

## 基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部設置							
フリガナ設置者	ガッコウホウジツン メイセイガクエン 学校法人 明星学苑							
フリガナ大学の名称	メイセイガク 明星大学 (Meisei University)							
大学本部の位置	東京都日野市程久保2丁目1番地1							
大学の目的	明星大学は、設置者である学校法人明星学苑の建学の精神である「和の精神のもと、世界に貢献する人を育成する」に基づき、広い教養と深い専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、自己実現を目指し、社会に貢献する人を育成することを目的とする。この目的を実現するための教育研究の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。							
新設学部等の目的	建築学部建築学科は、幅広い教養と建築学に関する専門知識及び実践的な技術を用いて、時代や環境の変化に対応した安全、健康かつ快適な建築、住宅及び都市空間を創出・提供することで、社会に貢献できる人材を育成する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	建築学部 [School of Architecture]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	東京都日野市程久保 2丁目1番地1
	建築学科 [Department of Architecture]	4	120	—	480	学士(建築学) 【Bachelor of Arts in Architecture】	令和2年4月 第1年次	
計		120	—	480				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	理工学部総合理工学科〔定員減〕 (△120) (令和2年4月)  心理学研究科心理学専攻 (M: 15、D: 3) (令和元年7月届出予定) 人文学研究科心理学専攻 (廃止) (M: △10、D: △3) ※令和2年4月学生募集停止  人文学研究科国際コミュニケーション専攻 (M: 10、D: 3) (令和元年7月届出予定) 人文学研究科英米文学専攻 (廃止) (M: △10、D: △3) ※令和2年4月学生募集停止							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
	建築学部 建築学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位		
		167科目	96科目	15科目	278科目			

	学部等の名称	専任教員等					兼任教員等	
		教授	准教授	講師	助教	計	助手	計
		人	人	人	人	人	人	人
新設分	建築学部 建築学科	10 (10)	6 (6)	0 (0)	1 (1)	17 (17)	0 (0)	100 (98)
	計	10 (10)	6 (6)	0 (0)	1 (1)	17 (17)	0 (0)	— (—)
既設分	理工学部 総合理工学科	32 (32)	13 (13)	2 (2)	1 (1)	48 (48)	0 (0)	52 (52)
	人文学部 国際コミュニケーション学科	8 (8)	4 (4)	10 (10)	0 (0)	22 (22)	0 (0)	10 (10)
	人間社会学科	5 (5)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	9 (9)	0 (0)	21 (21)
	日本文化学科	8 (8)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	10 (10)	0 (0)	25 (25)
	福祉実践学科	10 (10)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	20 (20)
	経済学部 経済学科	17 (17)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	26 (26)	0 (0)	17 (17)
	情報学部 情報学科	9 (9)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	20 (20)
	教育学部 教育学科	80 (80)	27 (27)	1 (1)	1 (1)	109 (109)	0 (0)	198 (198)
	教育学部 教育学科 (通信課程)							
	経営学部 経営学科	18 (18)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	13 (13)
	デザイン学部 デザイン学科	10 (10)	4 (4)	0 (0)	2 (2)	16 (16)	0 (0)	31 (31)
	心理学部 心理学科	9 (9)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	27 (27)
	明星教育センター	4 (4)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	2 (2)
	発達支援研究センター	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
	連携研究センター	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
	計	212 (212)	88 (88)	13 (13)	7 (7)	320 (320)	0 (0)	— (—)
合計	222 (222)	94 (94)	13 (13)	8 (8)	337 (337)	0 (0)	— (—)	
教員以外の職員の概要	職種	専任		兼任		計		
	事務職員	150 (150)		136 (136)		286 (286)		
	技術職員	0 (0)		78 (78)		78 (78)		
	図書館専門職員	2 (2)		0 (0)		2 (2)		
	その他の職員	0 (0)		4 (4)		4 (4)		
計	152 (152)		218 (218)		370 (370)			
校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用		計		
	校舎敷地	197,697㎡	0㎡	0㎡		197,697㎡		
		683,812㎡	0㎡	0㎡		683,812㎡		
	運動場用地	74,314㎡	0㎡	0㎡		74,314㎡		
		94,320㎡	0㎡	0㎡		94,320㎡		
	小計	272,011㎡	0㎡	0㎡		272,011㎡		
		778,132㎡	0㎡	0㎡		778,132㎡		
	その他	17,243㎡	0㎡	0㎡		17,243㎡		
18,621㎡		0㎡	0㎡		18,621㎡			
合計	1,086,007㎡	0㎡	0㎡		1,086,007㎡			
							・日野校 ・青梅校 ・日野校 ・青梅校 ・日野校 ・青梅校 ・日野校 ・青梅校 大学全体	

校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計		・日野校 ・青梅校 大学全体			
		179,251㎡ ( 179,251㎡)	0㎡ ( 0㎡)	0㎡ ( 0㎡)	179,251㎡ ( 179,251㎡)					
		32,714㎡ ( 32,714㎡)	0㎡ ( 0㎡)	0㎡ ( 0㎡)	32,714㎡ ( 32,714㎡)					
		211,965㎡ ( 211,965㎡)	0㎡ ( 0㎡)	0㎡ ( 0㎡)	211,965㎡ ( 211,965㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設		・日野校 ・青梅校 大学全体			
	92室	230室	244室	19室 (補助職員 6人)	0室 (補助職員 0人)					
	23室	8室	36室	1室 (補助職員0人)	0室 (補助職員 0人)					
	115室	238室	280室	20室 (補助職員6人)	0室 (補助職員 0人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称 建築学部 建築学科		室 数						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用 分図書：890,092 冊〔358,751冊〕 学術雑誌：11,723 種〔11,068種〕		
	建築学部 建築学科	7,100〔1,587〕 (6,500〔1,587〕)	48〔15〕 (48〔15〕)	16〔16〕 (16〔16〕)	16 (16)	1,157 (1,157)	2 (2)			
	計	7,100〔1,587〕 (6,500〔1,587〕)	48〔15〕 (48〔15〕)	16〔16〕 (16〔16〕)	16 (16)	1,157 (1,157)	2 (2)			
図 書 館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体			
		16,865㎡	862席		1,563,400冊					
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要					・日野校 ・青梅校 大学全体		
		8,006㎡	野球場、テニスコート							
		4,928㎡	野球場、テニスコート							
		12,934㎡								
経 費 の 見 積 り 及 び 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は大学 全体 図書購入費には電子 ジャーナル・データベ ースの整備費(運用コ スト含む)を含む 設備購入費は大学 全体
		教員1人当り研究費等		600千円	600千円	600千円	600千円	-	-	
		共同研究費等		49,500千円	49,500千円	49,500千円	49,500千円	-	-	
		図 書 購 入 費	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	45,000千円	-	-	
	設 備 購 入 費	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	-	-		
	学 生 1 人 当 り 納 付 金	学部	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
		建築学部	1,600千円	1,400千円	1,400千円	1,400千円	- 千円	- 千円		
		理工学部	1,600千円	1,400千円	1,400千円	1,400千円	- 千円	- 千円		
		人文学部	1,370千円	1,170千円	1,170千円	1,170千円	- 千円	- 千円		
		経済学部	1,210千円	1,010千円	1,010千円	1,010千円	- 千円	- 千円		
		情報学部	1,580千円	1,380千円	1,380千円	1,380千円	- 千円	- 千円		
		教育学部	1,390千円	1,190千円	1,190千円	1,190千円	- 千円	- 千円		
		教育学部 (通信課程)	154千円	114千円	114千円	114千円	- 千円	- 千円		
		経営学部	1,210千円	1,010千円	1,010千円	1,010千円	- 千円	- 千円		
デザイン学部		1,600千円	1,400千円	1,400千円	1,400千円	- 千円	- 千円			
心理学部	1,390千円	1,190千円	1,190千円	1,190千円	- 千円	- 千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入、補助金収入 等							

大学等の名称	明星大学								所在地
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	
既設大学等の状況	理工学部						1.00		
	総合理工学科	4	400	—	1,600	学士(理学) 学士(工学)	1.00	平成22年度	
	化学科	4	—	—	—	学士(理学)	—	昭和39年度	平成22年4月より 学生募集停止 (化学科)
	人文学部						1.15		
	国際コミュニケーション学科	4	100	—	400	学士(国際コミュニケーション学)	1.25	平成17年度	
	人間社会学科	4	80	—	320	学士(社会学)	1.10	昭和40年度	
	心理学科	4	—	—	—	学士(心理学)	—	平成22年度	平成29年4月より 学生募集停止 (心理学科)
	日本文化学科	4	100	—	400	学士(文学)	1.11	平成22年度	
	福祉実践学科	4	60	—	240	学士(社会福祉学)	1.10	平成22年度	
	経済学部						1.08		
	経済学科	4	260	—	1,080	学士(経済学)	1.08	平成13年度	平成29年4月より 入学定員変更 (経済学科300→ 260)
	情報学部						1.08		
	情報学科	4	140	—	560	学士(情報)	1.08	平成17年度	東京都日野市 程久保2丁目1番 地1
	教育学部						1.13		
	教育学科	4	350	—	1,370	学士(教育学)	1.13	平成22年度	平成29年4月より 入学定員変更 (教育学科320→ 350)
	経営学部						1.11		
	経営学科	4	200	—	800	学士(経営学)	1.11	平成24年度	
	デザイン学部						1.07		
	デザイン学科	4	120	—	480	学士(デザイン学)	1.07	平成26年度	
	心理学部						1.10		
	心理学科	4	120	—	360	学士(心理学)	1.10	平成29年度	
(通信教育部)						0.05			
教育学部						0.05			
教育学科 (通信課程)	4	2,000	—	8,000	学士(教育学)	0.05	平成22年度		

学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
人文学部						—			
心理・教育学科 (通信課程)	4	—	—	—	学士(教育学)	—	昭和42年度		平成22年4月より 学生募集停止 (人文学部心理・ 教育学科(通信課 程))
(大学院)									
理工学研究科									
(博士前期課程)						<b>0.36</b>			
物理学専攻	2	10	—	20	修士(理学)	0.15	昭和54年度		
化学専攻	2	10	—	20	修士(理学)	0.75	昭和48年度		
機械工学専攻	2	10	—	20	修士(工学)	0.50	昭和55年度		
電気工学専攻	2	10	—	20	修士(工学)	0.10	昭和54年度		
建築・建設工学専攻	2	5	—	10	修士(工学)	0.30	平成20年度		
環境システム学専攻	2	5	—	10	修士(工学)	0.30	平成20年度		
(博士後期課程)						<b>0.04</b>			
物理学専攻	3	5	—	15	博士(理学)	0.00	昭和56年度		
化学専攻	3	5	—	15	博士(理学)	0.20	昭和51年度		
機械工学専攻	3	5	—	15	博士(工学)	0.00	昭和57年度	東京都日野市 程久保2丁目1番 地1	
電気工学専攻	3	5	—	15	博士(工学)	0.00	昭和56年度		
建築・建設工学専攻	3	3	—	9	博士(工学)	0.00	平成20年度		
環境システム学専攻	3	2	—	6	博士(工学)	0.00	平成20年度		
人文学研究科									
(博士前期課程)						<b>0.44</b>			
英米文学専攻	2	10	—	20	修士(英米文学)	0.25	昭和58年度		
社会学専攻	2	10	—	20	修士(社会学)	0.00	昭和46年度		
心理学専攻	2	10	—	20	修士(心理学)	1.10	昭和49年度		
教育学専攻	2	—	—	—	修士(教育学)	—	昭和47年度		平成26年4月より 学生募集停止 (教育学専攻)
(博士後期課程)						<b>0.29</b>			
英米文学専攻	3	3	—	9	博士(英米文学)	0.11	昭和63年度		
社会学専攻	3	3	—	9	博士(社会学)	0.11	昭和51年度		
心理学専攻	3	3	—	9	博士(心理学)	0.66	昭和53年度		
教育学専攻	3	—	—	—	博士(教育学)	—	昭和49年度		平成26年4月より 学生募集停止 (教育学専攻)

既設大学等の状況	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
	経済学研究科 (修士課程)						0.35		
	応用経済学専攻	2	10	—	20	修士(応用経済学)	0.35	平成18年度	
	情報学研究科 (博士前期課程)						0.71		
	情報学専攻	2	7	—	14	修士(情報学)	0.71	平成10年度	
	(博士後期課程)						0.22		
	情報学専攻	3	3	—	9	博士(情報学)	0.22	平成12年度	
	教育学研究科 (博士前期課程)						0.05		東京都日野市 程久保2丁目1番地1
	教育学専攻	2	10	—	20	修士(教育学)	0.05	平成26年度	
	(博士後期課程)						0.11		
	教育学専攻	3	3	—	9	博士(教育学)	0.11	平成26年度	
	(通信制大学院)								
	教育学研究科 (博士前期課程)						0.41		
	教育学専攻 (通信課程)	2	30	—	60	修士(教育学)	0.41	平成11年度	
	(博士後期課程)						1.22		
	教育学専攻 (通信課程)	3	3	—	9	博士(教育学)	1.22	平成18年度	
	附属施設の概要	該当なし							

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

教 育 課 程 等 の 概 要														
(建築学部建築学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
明星大学と多摩	自立と体験1 (大学生活の基盤をつくる)	1前	2			○				1		1		
	自立と体験2 (社会の課題と出会う)	1後		2		○								兼4
	多摩と生活	1後		2		○								兼1
	多摩を歩く	1前・後		2		○								兼1
	多摩と自然	1後		2		○								兼1
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	情報の活用と倫理	1前	2			○								兼1
	英語1A	1前		1			○							兼5
	英語1B	1前		1			○							兼5
	英語2A	1後		1			○							兼5
	英語2B	1後		1			○							兼5
	英語3A	2前		1			○							兼5
	英語3B	2前		1			○							兼5
	英語4A	2後		1			○							兼5
	英語4B	2後		1			○							兼5
	ドイツ語1A	1前		1			○							兼2
	ドイツ語1B	1前		1			○							兼2
	ドイツ語2A	1後		1			○							兼2
	ドイツ語2B	1後		1			○							兼2
	ドイツ語3A	2前		1			○							兼2
	ドイツ語3B	2前		1			○							兼2
	ドイツ語4A	2後		1			○							兼2
	ドイツ語4B	2後		1			○							兼2
	フランス語1A	1前		1			○							兼2
	フランス語1B	1前		1			○							兼2
	フランス語2A	1後		1			○							兼2
	フランス語2B	1後		1			○							兼2
	フランス語3A	2前		1			○							兼2
	フランス語3B	2前		1			○							兼2
	フランス語4A	2後		1			○							兼2
	フランス語4B	2後		1			○							兼2
	中国語1A	1前		1			○							兼2
	中国語1B	1前		1			○							兼2
	中国語2A	1後		1			○							兼2
	中国語2B	1後		1			○							兼2
	中国語3A	2前		1			○							兼2
中国語3B	2前		1			○							兼2	
中国語4A	2後		1			○							兼2	
中国語4B	2後		1			○							兼2	
韓国語1A	1前		1			○							兼2	
韓国語1B	1前		1			○							兼2	
韓国語2A	1後		1			○							兼2	
韓国語2B	1後		1			○							兼2	
韓国語3A	2前		1			○							兼2	
韓国語3B	2前		1			○							兼2	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
全学共通科目	情報の活用とコミュニケーション	韓国語 4 A		1			○								兼2
		韓国語 4 B		1			○								兼2
		スペイン語 1 A		1				○							兼1
		スペイン語 1 B		1				○							兼1
		スペイン語 2 A		1				○							兼1
		スペイン語 2 B		1				○							兼1
		スペイン語 3 A		1				○							兼1
		スペイン語 3 B		1				○							兼1
		スペイン語 4 A		1				○							兼1
		スペイン語 4 B		1				○							兼1
		日本語 1 A		1				○							兼1
		日本語 1 B		1				○							兼1
		日本語 2 A		1				○							兼1
		日本語 2 B		1				○							兼1
		日本語 3 A		1				○							兼1
		日本語 3 B		1				○							兼1
		日本語 4 A		1				○							兼1
		日本語 4 B		1				○							兼1
		実践英語会話 1		1				○							兼1
		実践英語会話 2		1				○							兼1
		実用資格英語 1		1				○							兼1
		実用資格英語 2		1				○							兼1
		中級ドイツ語 1		1				○							兼1
		中級ドイツ語 2		1				○							兼1
		上級ドイツ語 1		1				○							兼1
		上級ドイツ語 2		1				○							兼1
		中級フランス語 1		1				○							兼1
		中級フランス語 2		1				○							兼1
		上級フランス語 1		1				○							兼1
		上級フランス語 2		1				○							兼1
		中級中国語 1		1				○							兼1
		中級中国語 2		1				○							兼1
		上級中国語 1		1				○							兼1
		上級中国語 2		1				○							兼1
		中級韓国語 1		1				○							兼1
		中級韓国語 2		1				○							兼1
		上級韓国語 1		1				○							兼1
		上級韓国語 2		1				○							兼1
		中級スペイン語 1		1				○							兼1
		中級スペイン語 2		1				○							兼1
上級スペイン語 1		1				○							兼1		
上級スペイン語 2		1				○							兼1		
コンピュータ基礎演習		1					○							兼1	
コンピュータ応用演習		1					○							兼1	
海外語学研修A		2					○							兼2 集中	
海外語学研修B		2					○							兼2 集中	



科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
全学共通科目	科学的思考科目群	自然哲学		2		○									兼1	
		論理学A	1前	2		○									兼1	
		論理学B	1後	2		○									兼1	
		生命と自然の倫理A	1前	2		○									兼1	
		生命と自然の倫理B	1後	2		○									兼1	
		統計学A	1前	2		○									兼1	
		統計学B	1後	2		○									兼1	
		自然科学A	1前	2		○									兼1	
		自然科学B	1後	2		○									兼1	
		数学A	1前	2		○									兼1	
		数学B	1後	2		○									兼1	
		物理学A	1前	2		○									兼1	
		物理学B	1後	2		○									兼1	
		化学A	1前	2		○									兼1	
		化学B	1後	2		○									兼1	
		地球惑星学A	1前	2		○									兼1	
		地球惑星学B	1前	2		○									兼1	
		地理学で知る自然と環境	1前	2		○									兼1	
		生物学A	1前	2		○									兼1	
		生物学B	1後	2		○									兼1	
		都市と建築	1後	2		○						1			兼1	
	科学技術論A	1前	2		○									兼1		
	科学技術論B	1後	2		○									兼1		
	科学コミュニケーション論	2前	2		○									兼1		
	人類とその環境	2前	2		○									兼2	共同	
	技術・科学史	2前	2		○									兼1		
	幅広い教養	現代社会課題解決科目群	21世紀の世界を考える	1前	2		○								兼3	オムニバス
			現代社会の仕組みA	1前	2		○								兼1	
			現代社会の仕組みB	1後	2		○								兼1	
			社会科学論A	1前	2		○								兼1	
			社会科学論B	1後	2		○								兼1	
			外国事情A (アジア)	1前	2		○								兼1	
			外国事情B (欧米)	1後	2		○								兼1	
			現代政治A	1前	2		○								兼1	
			現代政治B	1後	2		○								兼1	
			国際関係論A	1前	2		○								兼1	
			国際関係論B	1後	2		○								兼1	
			現代社会と平和	1前	2		○								兼4	オムニバス
			法学A	1前	2		○								兼1	
			法学B (日本国憲法)	1後	2		○								兼1	
			社会に生きる私たちの人権A	1前	2		○								兼1	
			社会に生きる私たちの人権B	1後	2		○								兼1	
現代経済への視点A			1前	2		○								兼1		
現代経済への視点B			1後	2		○								兼1		
グローバル時代の経営A			1前	2		○								兼1		
グローバル時代の経営B			1後	2		○								兼1		
ジェンダーを考えるA			1前	2		○								兼1		
ジェンダーを考えるB	1後	2		○								兼1				
ボランティア論	1前・後	2		○									兼1			
生涯学習論A	1前	2		○									兼1			
生涯学習論B	1後	2		○									兼1			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
全学共通科目	現代社会課題解決科目群	情報社会文化論A	1前	2		○									兼1	
		情報社会文化論B	1後	2		○									兼1	
		メディア論	1後	2		○									兼1	
		図書館の基礎と展望	1前	2		○									兼1	
		情報法制論	2前	2		○									兼1	
		グローバル時代の英語	2後	2		○									兼1	
		日本事情A	1前	2		○									兼1	
		日本事情B	1後	2		○									兼1	
	幅広い教養 人文知探究科目群	哲学A	1前	2		○									兼1	
		哲学B	1後	2		○									兼1	
		倫理学A	1前	2		○									兼1	
		倫理学B	1後	2		○									兼1	
		宗教学A	1前	2		○									兼1	
		宗教学B	1後	2		○									兼1	
		イスラームの歴史と文化	1後	2		○									兼1	
		考古学A	1前	2		○									兼1	
		考古学B	1後	2		○									兼1	
		日本史A（前近代）	1前	2		○									兼1	
		日本史B（近代）	1後	2		○									兼1	
		東アジアの歴史と文化A	1前	2		○									兼1	
		東アジアの歴史と文化B	1後	2		○									兼1	
		西洋の歴史と文化A（古代・中世）	1前	2		○									兼1	
		西洋の歴史と文化B（近現代）	1後	2		○									兼1	
		地理学で知る人間と社会	1後	2		○									兼1	
		教育学A	1前	2		○									兼1	
		教育学B	1後	2		○									兼1	
		民俗学A	1前	2		○									兼1	
		民俗学B	1後	2		○									兼1	
		文化人類学A	1前	2		○									兼1	
		文化人類学B	1後	2		○									兼1	
		美術を読み解く	1前	2		○									兼1	
		図像学A	1前	2		○									兼1	
		図像学B	1後	2		○									兼1	
		美学A	1前	2		○									兼1	
		美学B	1後	2		○									兼1	
		音楽といきる	1前	2		○									兼1	
		舞台芸術を読み解く	1後	2		○									兼1	
		日本の芸能A	1前	2		○									兼1	
		日本の芸能B	1後	2		○									兼1	
		言語学A	1前	2		○									兼1	
		言語学B	1後	2		○									兼1	
		世界のことばと文化を知る	1前	2		○									兼5	オムニバス
		外国の文学A（アジア）	1前	2		○									兼1	
		外国の文学B（欧米）	1後	2		○									兼1	
		日本の文学A	1前	2		○									兼1	
		日本の文学B	1後	2		○									兼1	
哲学から考える人間	2前	2		○									兼1			
哲学から考える世界	2後	2		○									兼1			
日本の歴史と文化A	2前	2		○									兼1			
日本の歴史と文化B	2後	2		○									兼1			
表象文化論	2前	2		○									兼1			
人類の社会と文化	2後	2		○									兼1			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
全学共通科目	心と体の健康	健康・スポーツ科学論	1前・後	2			○		○							兼6
		健康・スポーツ実習A	1前・後		1											兼6
		健康・スポーツ実習B	1前・後		1											兼6
		現代スポーツ論	1後		2		○		○							兼1
		食と健康	2後		2		○									兼1
		心理学A	1前		2		○									兼1
		心理学B	1後		2		○									兼1
		小計(200科目)	—	6	310	0			—		1	1	0	1	0	兼86
全学共通キャリア形成科目		自立と体験3A (社会人としての基礎をつくる)	2後			2	○									兼4
		自立と体験3B (就業力を身につける)	3前			2	○									兼4
		ボランティア実践A	2前			1		○								兼1
		ボランティア実践B	2後			1		○								兼1
		キャリアデザインA (理論で考える自己とキャリア)	1後			2	○									兼2
		キャリアデザインB (生き方と法律・労働・お金)	2後			2	○									兼2
		小計(6科目)	—	0	0	10			—		0	0	0	0	0	兼6

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
学 科 目	基 礎 科 目	建築入門	1前	2				○		8	6		1		兼1	オムニバス	
		基礎代数学	1前	2			○			1	1						
		実務の専門家が語る建築学	1後	2			○			2						兼1	
		基礎解析学	1後	2			○			1	1						
		基礎物理学	1前		2				○		1						
		建築デザイン幾何学	2前		2				○			1					
	小計(6科目)	—	8	4	0	—			10	6	0	1	0	兼1			
	専 門 基 幹 科 目	建築概論	1前	2			○			1					兼1	共同	
		造形デザイン実習	1前	2					○	1	2						
		建築基礎力学	1前	2			○			1		1					
		西洋建築史	1後	2			○				1						
		建築基礎設計製図	1後	2					○	2			1		兼1	共同	
		建築計画1	2前	2			○						1				
		建築法規	2前	2			○								兼1		
		建築設計製図1	2前	2					○	2	1				兼3	共同	
		建築構造力学	2前	2			○				1						
		建築構造計画	2前	2			○			1							
		建築環境学1	2前	2			○				1						
		建築設計製図2	2後	2					○	3	1				兼3	共同	
		建築設備1	2後	2			○				1						
		建築環境計画	2後	2			○			1							
		建築構法	2後	2			○			1							
		建築設計製図3	3前	2					○	4					兼3	共同	
		建築材料学	3前	2			○				1						
		建築施工管理	3後	2			○			1							
		建築表現	1後		2				○	3							オムニバス
		建築基礎力学演習	1後		2				○	2							
		建築材料実験	1後		2				○	2	1						オムニバス・ 共同(一部)
		日本建築史	2前		2		○								兼1		
		建築CAD演習A	2前		2				○	2	1		1				オムニバス・ 共同(一部)
		建築構造実験	2前		2				○	2	1						オムニバス・ 共同(一部)
		建築CAD演習B	2後		2				○	2	1				兼1	共同	
		建築構造力学演習	2後		2				○	1	1						
		建築材料力学	2後		2			○			1						
		建築診断・リフォーム	2後		2			○							兼1		
		施工実習	2後		1					○	2						共同
減災学		3前		2			○			4	1					オムニバス	
木造建築	3前		2			○			1								
BIM演習	3前		2				○		1	1			兼1	共同			
測量学	3前		2			○			1								
測量学実習	3前		1					○	1						集中		
ランドスケープ	3後		2			○			1								
建築マネジメント	3後		2			○			1								
小計(36科目)	—	36	34	0	—			10	6	0	1	0	兼11				
専 門 発 展 科 目	建 築 デ ザ イ ン	建築計画2	3前		2			○					1				
		建築意匠	3前		2			○		1							
		都市環境デザイン論	3前		2			○									
		建築再生論	3前		2			○				1					
		建築環境学2	3前		2			○				1					
		構造デザイン	3後		2			○				1					

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科科目	建築デザイン	都市計画	3後	2		○			1						
		コミュニティデザイン概論	3後	2		○			1						
		建築設備2	3後	2						1					
		建築デザインスタジオ	3後	2				○	3	3		1			
	住宅デザイン	住まいのデザイン	3前	2		○				1			1		
		住まい計画	3前	2		○									
		インテリアデザイン	3前	2		○			1						
		住宅と社会	3前	2		○			1						
		住環境と福祉	3後	2		○				1					
		住宅と実務	3後	2		○			1						
		住宅デザインスタジオ	3後	2				○	1	1					
	建築都市エンジニアリング	建築構造解析	3前	2		○			1						
		鉄筋コンクリート構造	3前	2		○				1					
		鉄骨構造	3前	2		○			1						
		地盤基礎工学	3前	2		○			1						
		都市数理工学	3後	2		○			2	1					
		耐震工学	3後	2		○			1						
		水工水理学	3後	2		○			1						
		地盤工学	3後	2		○			1						
		建築都市エンジニアリングスタジオ	3後	2				○	4	2					
キャリア支援科目	インターンシップ	3前	2				○	1							
	建築総合演習A	4前	2				○		1						
	建築総合演習B	4後	2				○		1						
	卒業研究	4通	8				○	8	6		1				
	小計(30科目)	—	8	58	0	—	—	9	6	0	1	0			
合計(278科目)			—	58	406	10	—	10	6	0	1	0	兼100%		
学位又は称号		学士(建築学)		学位又は学科の分野			工学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
全学共通科目から32単位以上、学科科目から必修科目52単位を含む92単位以上、合計124単位以上修得すること。 〔履修科目の登録の上限：45単位(年間)〕							1学年の学期区分			2期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

授 業 科 目 の 概 要				
(建築学部建築学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学共通科目	明星大学と多摩	自立と体験1（大学生生活の基盤をつくる）	本授業は、本学の教育目標を達成する最初の科目であり、自己実現の第一歩として設ける。初年次教育の一環として、新入生全員を対象に行う。学部学科横断クラスで30人程度のクラスを5～6班に分け、グループワークを通じて他者とのコミュニケーションスキルを向上させるとともに、最終的には自らの目標を明確化させて大学生としての自覚・自立を促していくことを目的とする。具体的な内容として、本授業は、大きく3部から構成され、まず第1部「人とかかわる」では、他者との関わりの中で自分を理解し、第2部「人とかかわる・学びのスタートを切る」として学生自身が学ぶ大学を知る。そして、最後の第3部で大学生生活を見通すことで大学生生活を計画することを目指す。	
		自立と体験2（社会の課題と出会い）	本授業は、「自立と体験1（大学生生活の基盤をつくる）」を更に発展させた学部学科横断クラスによるアクティブ・ラーニング型授業である。社会で活躍するゲストスピーカーを招聘するPBL（Problem-Based Learning＝問題解決型授業）を通して、社会の課題と出会い、自らと関連付けながら思考し、日常生活や社会で求められる汎用的能力としての「論理的な思考力と論理的な表現力」を身に付ける。社会的なテーマを巡って様々な角度から意見を出し合い、各自の学部学科の専門性を意識しながら問題解決に向けて情報収集を行うプロセスでは、総合大学ならではの学びの多様性が活かされる。PBLの成果発表の場としてプレゼンテーション大会が行われる。授業内の様々な活動を通して、大学における学びの基礎を培うことを目指す。	
		多摩と生活	本講義では、明星大学が位置する多摩地域の特徴を自然環境と歴史、文化の角度から読み解く。歴史については古代、中世、近世、近代と概観し、その歴史を成り立たせている地域の環境とその利用について、自然から生活文化の側面から捉え直す。最後に、本学の所在地である日野市との連携として、全国的にも知られる日野市の図書館運動にも触れる。学生たちが多摩地域を身近なものとして認識し、興味をもつことにより、地域と連携した他の授業科目への意欲を高めることを目標とする。	
		多摩を歩く	多摩は様々な顔を持つ地域である。鉄道沿線に広がる郊外住宅地や大型店が集中する市街地ばかりではなく、山梨県や神奈川県、埼玉県へとつながる険しい山間地、大消費地に近接することで農業が盛んな地域など、多摩地域を一面的に捉えることはできない。これらの多摩地域の持つ様々な特性は、多摩の持つ豊かな自然環境の上に成り立っている。本授業では、地形図や関連資料を通して、多摩の地形と歴史・文化、産業、生活などとの関係を考察し、地誌学的観点から、多摩のもつ多様性に関する知見を得ることを目的とする。	
		多摩と自然	東京都の西部に位置する多摩地域は豊かな自然が広がる地域であると同時に、歴史的にはその自然を利用し、あるいは克服する過程を経てきた。本講義では、多摩の自然環境が形成された過程や、多摩の自然が持つ多様性などを理解した上で、多摩に生きる人々がこれらの自然環境をどのように利用し克服してきたのか、地学的観点から人間の諸活動と関連させながら考察する。授業では、必要に応じて国土地理院発行地形図や映像資料などを用い、読図作業や景観写真の読み取りなどの作業を伴った活動を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	情報の活用と倫理	本講義では、情報を活用する上での情報倫理（モラル）や、情報機器及び情報通信ネットワークの機能など基本的知識や能力を修得し、情報通信社会において生じている諸問題（倫理的問題や犯罪）に対応できることを目標としている。また、情報を適切に収集・加工・表現するまでの基礎的な技能や知識を学修することで、コンピュータを道具として使えるようにするための基礎的な素養を養うことを目標としている。 ※情報倫理・Windowsの基礎・Word、Excel、PowerPointの基礎	
	英語 1 A	全学共通科目として履修する英語科目で、英語の基礎を固めることにより、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと）の全てを修得すべき目標としながら、特に、読むこと・書くことの技能に重点を置く。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	
	英語 1 B	全学共通科目として履修する英語科目で、英語の基礎を固めることにより、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能5領域（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと・やりとりすること）の全てを修得すべき目標としながら、特に、聞くこと・話すこと・やりとりすることの技能に重点を置く。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	
	英語 2 A	全学共通科目として履修する英語科目で、英語の基礎を確立することにより、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと）の全てを修得すべき目標としながら、特に、読むこと・書くことの技能に重点を置き、「英語 1 A」で身に付けた英語力を確かなものにする。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	
	英語 2 B	全学共通科目として履修する英語科目で、英語の基礎を固めることにより、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能5領域（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと・やりとりすること）の全てを修得すべき目標としながら、特に、聞くこと・話すこと・やりとりすることの技能に重点を置き、「英語 1 B」で身に付けた英語力を確かなものにする。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	
	英語 3 A	全学共通科目として履修する英語科目で、大学英語の基礎を固めることにより、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと）の全てを修得すべき目標としながら、特に、読むこと・書くことの技能に重点を置き、「英語 2 A」で身に付けた英語力を確かなものにする。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	
	英語 3 B	全学共通科目として履修する英語科目で、大学英語の基礎を固めることにより、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能5領域（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと・やりとりすること）の全てを修得すべき目標としながら、特に、聞くこと・話すこと・やりとりすることの技能に重点を置き、「英語 2 B」で身に付けた英語力を確かなものにする。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学共通科目	情報の活用とコミュニケーション	英語 4 A	全学共通科目として履修する英語科目で、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと）の全てを修得すべき目標としながら、特に、読むこと・書くことの技能に重点を置き、「英語 3 A」で身に付けた英語力をより確かなものにする。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	
		英語 4 B	全学共通科目として履修する英語科目で、グローバル社会で生きる日本人として英語の能力を身に付けるとともに、3年次からの専門分野・領域の学術的な英語にも対応できる基盤作りを目的とする演習科目である。本授業では、4技能5領域（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと・やりとりすること）の全てを修得すべき目標としながら、特に、聞くこと・話すこと・やりとりすることの技能に重点を置き、「英語 3 B」で身に付けた英語力を確かなものにする。授業中の学習はもちろんのこと、それと同時間以上の自律的学習に積極的に、継続的に取り組む姿勢が求められる。	
		ドイツ語 1 A	本授業は、初修者を対象としてドイツ語文法の理解、修得を目的とする演習科目である。ドイツ語の理解を深め、文法の定着を図るために、会話、発音、聞き取り、音読などのペアワークを実施する。学習内容に合わせて短いテキストを読む機会を設け、ドイツ語の短文を理解することを目指す。本授業科目の達成目標は、ドイツ語の基礎文法を理解すること、またドイツ文化に触れ、ドイツ語圏についての知識を深め、異文化を理解する力を養うことである。	
		ドイツ語 1 B	本授業は、初修者を対象として、「ドイツ語 1 A」よりもドイツ語の文章や応用問題に多く接することを狙いとする演習科目である。文法を理解した上で発展的な問題に取り組む機会を設ける。しかし、初修者が対象であるため、文法項目の補足説明を行い、段階を追って学修していく。語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文、短い文章などを通じて、ドイツ語文法の定着を図ると同時に、ドイツ語圏の文化についての理解を深める。	
		ドイツ語 2 A	本授業は、初級者を対象としてドイツ語文法の理解、修得を目的とする演習科目である。ドイツ語の理解を深め、文法の定着を図るために、会話、発音、聞き取り、音読などのペアワークを実施する。学習内容に合わせて短いテキストを読む機会も設ける。本授業科目の達成目標は、ドイツ語の基礎文法を理解すること、またドイツ語圏についての知識を深め、異文化を理解する力を養うことである。本授業は「ドイツ語 1 A」の内容を受けて展開するため、「ドイツ語 1 A」を履修済みであることが望ましい。	
		ドイツ語 2 B	本授業は、初級者を対象として、「ドイツ語 2 A」よりもドイツ語の文章や応用問題に多く接することを狙いとする演習科目である。文法を理解した上で発展的な問題に取り組む機会を設ける。しかし、初級者が対象であるため、文法項目の補足説明を行い、段階を追って学修していく。「ドイツ語 1 B」で補い得ないもの、語彙、言い回し、簡単な実用語、会話文、講読などの練習を通じてドイツ語文法の定着をはかると同時にドイツ語圏の文化についての理解を深める。本授業は「ドイツ語 1 B」の内容を受けて展開するため、「ドイツ語 1 B」を履修済みであることが望ましい。	
		ドイツ語 3 A	本授業は、初級から中級へとステップアップを図る演習科目である。ドイツ語の文章をもとに文法事項の確認を行うことにより、文章の組み立て方を理解していく。本授業では、文構造を理解し、ドイツ語の文を読み進めることができるようになること、さらに簡単なドイツ語の文を書くことができるようになることを目標とする。ともに、ドイツ語圏の文化や社会などの理解を深める。なお、本授業の履修者は、既に「ドイツ語 2 A」を履修済みであることが望ましい。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	ドイツ語 3 B	本授業は、初級から中級へとステップアップを図る演習科目である。授業は講読を中心に行う。様々なタイプのテキストを読み、文章を理解する能力を高めていく。「ドイツ語 3 A」よりも多様な読み物に触れる。発展的な練習として、ドイツ語の音読、聴き取りを行う。聴き取る力を身に付けるため、視聴覚メディアを用いて内容を理解する練習を行う。なお、本授業の履修者は、既に「ドイツ語 2 B」を履修済みであることが望ましい。	
	ドイツ語 4 A	本授業は、引き続きドイツ語中級へのステップアップを図る演習科目である。ドイツ語文章のなかで文法事項の確認を行い、文章の組み立て方を理解する。簡単なドイツ語文を書き、伝えたいことを表現する練習を行う。またメールや手紙などの文章を読む練習を取り入れ、状況に合う表現を用いることができるようにドイツ語の理解を深めることを狙いとする。文の構造・語順などの文法的な理解を深める。なお、本授業の履修者は、既に「ドイツ語 3 A」を履修済みであることが望ましい。	
	ドイツ語 4 B	本授業は、引き続きドイツ語中級へのステップアップを図る演習科目である。様々なテキストを扱い、読む練習に加えて、書く練習を行う。文法事項の確認を行うためのペアワークやアクティビティを取り入れ、学生同士で学び合う機会を用意する。発展的な問題として、聴き取り練習を行う。学生には、視聴覚メディアの内容を理解することで、ドイツ語が着実に身に付いていることを実感させる。なお、本授業の履修者は既に「ドイツ語 3 B」を履修済みであることが望ましい。	
	フランス語 1 A	本授業は、全くの初心者を対象とし、基本的な発音、文法、語彙をひとつとおろおさえながら、フランス語でコミュニケーションする基礎的な能力を身に付けることを目標とする演習科目である。視聴覚教材を取り入れて、各種映像のほか、CDなどを使って口頭練習をはじめ、口、手、耳、目を使った様々な作業を行う。本授業では初級文法の前半を学び、「フランス語 2 A」とあわせて、最終的にフランスとフランス語に親しみ、話し、読み、書くことの初歩をマスターすることが目標である。また、教科書はフランス語検定(5級)受験を視野に入れて作成されたもので、受験希望者には、随時、その指導も行う。	
	フランス語 1 B	本授業は、「語学+フランス文化」を基本方針とする演習科目である。初心者を対象とし、基本的な発音、文法、語彙をひとつとおろおさえながら、フランス語で日常生活が支障なく送れる程度の基礎的なコミュニケーション能力を身に付ける。コンピュータ教材を用いた視聴覚的な初級語学の勉強に加え、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介する。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが本授業の目標である。	
	フランス語 2 A	「フランス語 1 A」に引き続いて、本演習科目では、基本的な発音、文法、語彙をひとつとおろおさえながら、フランス語でコミュニケーションする基礎的な能力を身に付けることを目標とする。視聴覚教材を取り入れて、各種映像のほか、CDなどを使って口頭練習をはじめ、口、手、耳、目を使ったさまざまな作業を行う。「フランス語 1 A」とあわせて、最終的にフランスとフランス語に親しみ、話し、読み、書くことの初歩をマスターすることが本授業の目標である。また、教科書はフランス語検定(5級)受験を視野に入れて作成されたもので、受験希望者には、随時、その指導も行う。	
	フランス語 2 B	本演習科目では、「フランス語 1 B」に続いて、「語学+フランス文化」を基本方針とし、基本的な発音、文法、語彙をひとつとおろおさえながら、フランス語で日常生活が支障なく送れる程度の基礎的なコミュニケーション能力を身に付ける。コンピュータ教材を用いた視聴覚的な初級語学の勉強に加え、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化を視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介する。フランスの文化を通じてフランス語に親しむことが本授業の目標である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	フランス語 3 A	1年次に学んだ初級の学修を基礎にして中級レベル前半の文法学修に入る。「フランス語 1 A」「フランス語 2 A」と同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をする。1年生で学修した知識・技能を復習しながら、フランス語での日常的なコミュニケーションの応用力を身に付け、さらに学習レベルを発展させる。会話面では、日常生活の様々な局面で用いられる慣用的な表現を、自然なアクセントとスピードで聞き取り話せるようにする。	
	フランス語 3 B	本演習科目では、語学及びフランス文化について発展的に学ぶ。このため、本授業の履修者は、予め「フランス語 1 B」「フランス語 2 B」を履修していることが望ましい。コンピュータ教材を用いた語学の勉強に加えて、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化をVIDEOやDVDなどの視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介する。文法は、1年生の初級文法を踏まえて、さらに中級レベルの項目から選んで学ぶ。また、文化面では、「フランス語 1 B」「フランス語 2 B」に続いて、様々な角度からフランスの文化について理解を深める。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標である。	
	フランス語 4 A	本演習科目では、1年次の初級の学修を基礎にして中級レベル前半の文法学修に入る。「フランス語 1 A」「フランス語 2 A」「フランス語 3 A」と同様に視聴覚教材を用いて感覚的に、また実践的に具体的な状況の中で文法を理解する練習をする。1年生で学修した知識・技能を復習しながら、フランス語での日常的なコミュニケーションの応用力を身に付け、さらに学習レベルを発展させる。会話面では、日常生活の様々な局面で用いられる慣用的な表現を、自然なアクセントとスピードで聞き取り話せるようにする。このため、本授業の履修者は、予め「フランス語 3 A」を履修していることが望ましい。	
	フランス語 4 B	本演習科目は、語学及びフランス文化について発展的に学修する。コンピュータ教材を用いた語学の勉強に加え、文学、美術、音楽、映画、歴史、社会など、フランスの文化をVIDEOやDVDなどの視聴覚教材を用いて、広く親しみやすく紹介する。文法は、1年生の初級文法を踏まえて、さらに上級レベルの項目から選んで学ぶ。また、文化面では、「フランス語 1 B」「フランス語 2 B」「フランス語 3 B」に続いて、様々な角度からフランスの文化について理解を深める。フランスの文化を通じて総合的にフランス語を学ぶことが目標である。このため、本授業の履修者は、予め「フランス語 3 B」を履修していることが望ましい。	
	中国語 1 A	本演習科目は、現代中国語の入門授業と位置付ける。中国語独特の4つの声調、日本語とは異なる母音や子音、ピンインと呼ばれる中国語独自のローマ字表記方法など、中国語を学んでいく上で必ず身に付けていかなければならない事項を順を追って学んでいく。正確な発音のマスターが中国語学修においては何より大切であるので、本授業では、簡単な会話文の練習などを繰り返し行い、中国語の基礎的な語彙を身に付けていく。後期開講の「中国語 2 A」とあわせて履修することで、中国語検定試験準4級レベルに到達できることを目標とする。	
	中国語 1 B	本演習科目は、現代中国語の入門授業と位置付ける。「中国語 1 A」同様、中国語独特の4つの声調、日本語とは異なる母音や子音、ピンインと呼ばれる中国語独自のローマ字表記方法など、中国語を学んでいく上で必ず身に付けていかなければならない事項を順を追って学んでいく。本授業では、「中国語 1 A」で行った反復練習について、中国語ではなぜそのような表現になるのか説明したり、学生の理解を文法面から支えたりしていく。後期開講の「中国語 2 B」とあわせて履修することで、中国語検定試験準4級レベルに到達できることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	情報の活用とコミュニケーション	中国語 2 A	本演習科目は、現代中国語の入門授業と位置付ける。前期の「中国語 1 A」で修得した4つの声調、母音や子音、ピンインなど中国語の基礎を復習しながら、中国語の語彙を少しずつ増やしていき、中国語での簡単なやりとりなどを学んでいく。正確な発音のマスターが中国語学修においては何より大切であるので、本授業では、簡単な会話文や聞き取り練習などを繰り返し行い、中国語の運用能力の基礎を固めていく。前期開講の「中国語 1 A」とあわせ履修することで、中国語検定試験準4級レベルに到達できることを目標とする。
		中国語 2 B	本演習科目は、現代中国語の入門授業と位置付ける。中国語の4つの声調、母音や子音、ピンインなど中国語の基礎を反復練習するとともに、中国語文法の初歩を学ぶ。本授業では、中国語と日本語や英語との相違点や共通点について解説し、学生の理解を深めていく。中国語文の日本語訳に加えて、簡単な日本語を中国語で表現する。中国語作文にも取り組んでいく。前期開講の「中国語 1 B」とあわせ履修することで、中国語検定試験準4級レベルに到達できることを目標とする。
		中国語 3 A	本授業は、「中国語 1 A」「中国語 2 A」で学んだ中国語の基礎の上に立ち、中国語準中級レベルの中国語の語彙を身に付け、会話能力を高めていくことを狙いとする演習科目である。中国語の平易な文章を読み理解し、簡単な中国語会話を行えるように学修を進めていく。「中国語 1 A」「中国語 2 A」同様、本授業では、正確な発音と自然なリズムで中国語が話せるよう配慮して授業を進めていく。後期開講の「中国語 4 A」とあわせ履修することで、中国語検定試験4級から3級のレベルに到達できることを目標としている。
		中国語 3 B	本授業は、「中国語 1 B」「中国語 2 B」で学んだ中国語の基礎の上に立ち、中国語準中級レベルの中国語の語彙を身に付け、中国語文法の基礎を固めていく演習科目である。本授業では、中国語と日本語や英語との相違点や共通点について解説し、学生の理解を深めていく。とりわけ学生の文法力向上に力点を置き、中国語文の日本語訳に加えて、日本語を中国語で表現する中国語作文にも力を入れていく。後期開講の「中国語 4 B」とあわせ履修することで、中国語検定試験4級から3級のレベルに到達できることを目標とする。
		中国語 4 A	本授業は、これまで学んできた中国語の基礎の上に立ち、中国語の語彙をさらに身に付け、会話能力をよりいっそう高めていくことを狙いとする演習科目である。中国語の平易な文章を読み理解だけでなく、中国語を使った簡単なやりとりができる力を身に付けていく。「中国語 1 A」「中国語 2 A」「中国語 3 A」同様、本授業でも、正確な発音と自然なリズムで中国語が話せるよう配慮して授業を進めていく。前期開講の「中国語 3 A」とあわせ履修することで、中国語検定試験4級から3級のレベルに到達できることを目標としている。
		中国語 4 B	本演習科目では、これまで学んできた中国語を文法面から整理し、修得してきた中国語の語彙を活用して、文法的に間違いのない中国語文を作る能力を養う。「中国語 1 B」「中国語 2 B」「中国語 3 B」同様、本授業でも、中国語と日本語や英語との相違点や共通点について解説し、学生の理解を深めていく。とりわけ学生の文法力向上に力点を置き、中国語文の日本語訳はもとより、日本語を中国語で表現する中国語作文にも力を入れていく。前期開講の「中国語 3 B」とあわせ履修することで、中国語検定試験4級から3級のレベルに到達できることを目標とする。
		韓国語 1 A	本演習科目は、韓国語の入門授業と位置付ける。はじめに韓国語の文字（ハングル）と発音の基礎を学ぶ。母音、次に子音、そして半母音&二重母音、最後にパッチム（母音の後に来る子音）を学修する。ハングルと発音とを結びつけることが目標となる。ハングルの読み書きができるようになったら、次に基本的なあいさつ表現、基礎語彙、基本的な助詞や文型を学ぶ。韓国語は文字（ハングル）とその発音を最初に学修する必要があるため、本授業で学んだ文法や表現を、反復練習や応用を行う「韓国語 1 B」と連携することで、効果的な学修が期待される。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	韓国語 1 B	本演習科目は、韓国語の入門授業と位置付ける。「韓国語 1 A」と連携し、本授業では反復練習や応用練習を行い、文法や表現を身に付けることを目標とする。はじめに、韓国語の文字（ハングル）と発音の基礎を、母音、子音、半母音&二重母音、パッチム（母音の後に来る子音）の順に学修する。ハングルの読み書きができるようになったら、次に基本的なあいさつ表現、基礎語彙、基本的な助詞や文型を習い、それを使い、表現する練習を重ねる。韓国語は文字（ハングル）とその発音を最初に学修する必要があるため、基本的な文法や表現を学修する「韓国語 1 A」と連携することで効果的な学修が期待される。	
	韓国語 2 A	本授業は、「韓国語 1 A」「韓国語 1 B」で学修したことを踏まえて基本的な文法事項の学修を行い、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばす演習科目である。様々な数字の使い方、用言の活用、丁寧体、可能形、否定形、尊敬形、過去形などを学修する。各課の会話文と文法事項の説明、豊富なタスクを用いて練習する。また、文章や単語に現れる韓国の文化の特徴についても注意していく。「韓国語 2 B」と連携し、作文、読解、会話による応用練習を行うことにより、効果的な学修が期待される。	
	韓国語 2 B	本授業は、「韓国語 1 A」「韓国語 1 B」で学修したことを踏まえて基本的な文法事項の学修を行い、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばす演習科目である。様々な数字の使い方、用言の活用、丁寧体、可能形、否定形、尊敬形、過去形などを作文、読解、会話の応用練習をくり返すことにより修得する。とりわけ、会話練習では、発音の変化にも注意する。各課の文法事項や練習問題中心の「韓国語 2 A」と連携することで、効果的な学修が期待される。	
	韓国語 3 A	本授業は、「韓国語 1 A」「韓国語 1 B」「韓国語 2 A」「韓国語 2 B」で学んだことを踏まえて、基本的な文法事項の学修を行い、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばす演習科目である。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにより豊富な文法や表現を学修するが、本授業においては、基本的な会話文や、文法事項の説明及び練習問題等に比重を置く。既に学修済みの基本的な文法事項を活かし、新たに用言の連体形やより豊かな表現、語彙を増やし、練習を繰り返して定着を図る。応用練習中心の「韓国語 3 B」と連携することで、効果的な学修が期待される。	
	韓国語 3 B	本授業は、「韓国語 1 A」「韓国語 1 B」「韓国語 2 A」「韓国語 2 B」で学んだことを踏まえて、様々な文法事項の学修を行い、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばす演習科目である。これまで使用した教科書の復習からはじめ、さらにより豊富な文法や表現を学修するが、本授業においては、「韓国語 3 A」で学んだ基本的な文法事項や表現をもとに、さらにより豊かな表現、語彙を作文、読解、会話練習を通して修得することを目指す。文法の説明と練習問題中心の「韓国語 3 A」と連携することで、効果的な学修が期待される。	
	韓国語 4 A	本授業は、「韓国語 3 A」「韓国語 3 B」で学んだことを踏まえて、様々な文法事項の学修を行い、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばす演習科目である。本授業では、一連の不規則用言の活用、様々な場面での豊かな表現を、各課の会話文と文法事項の説明、豊富な練習問題を通して学修する。応用練習中心の「韓国語 4 B」と連携することで、効果的な学修が期待される。2年間の韓国語学修により、基本的な韓国語の文章や話が理解でき、また自分の考えや感想を韓国語の自然な表現で表し、まとめる力を養うことができる。	
	韓国語 4 B	本授業は、「韓国語 3 A」「韓国語 3 B」で学んだことを踏まえて、様々な文法事項の学修を行い、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばす演習科目である。本授業では、一連の不規則用言の活用、様々な場面での豊かな表現を、作文、読解、会話練習を通して修得することを目指す。文法の説明と練習問題中心の「韓国語 4 A」と連携することで、効果的な学修が期待される。2年間の韓国語学修により、基本的な韓国語の文章や話が理解でき、また自分の考えや感想を韓国語の自然な表現で表し、まとめる力を養うことができる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	スペイン語 1 A	スペイン語はスペインのみならず、20以上の国と地域で公用語として話されている言葉である。本演習科目では、初めてスペイン語を学ぶ学生を対象に、スペイン語でコミュニケーションをするために必要となる文法の基礎を学修する。そして、その文法構造を理解した上で練習問題を解き、定着を図る。学修項目はあいさつ表現、アルファベットと発音、名詞・形容詞の性数変化、“動詞ser” “動詞estar” “動詞hay”そして規則的な活用をする-ar、-er、-ir動詞である。また言語知識のみならず、スペイン語を学ぶことを通して、世界の多様性を意識し、自らの視野を広げるきっかけとなるよう、スペイン語を話す国々についても取り上げる。さらに言語を使用する上で必要不可欠となるスペイン語圏の常識についても紹介する。	
	スペイン語 1 B	本授業は、ゼロからスペイン語を学ぶ初学者が対象であり、「スペイン語 1 A」（文法）で修得した文法の基礎知識を活用して「聴く」そして「話す」能力のトレーニングに重点を置いた演習科目である。実生活に必要なスペイン語でのコミュニケーション能力向上を目指す。基本的な授業形式は、最初に「スペイン語 1 A」で学修する文法内容の重要事項を毎回復習する。その後、前半でダイアログのリスニング、発音練習、講師による解説、後半でペア又は3～5名の小グループに分かれて会話練習を行う。購入テキスト以外にも映像や音声も適時使用し、それらの内容をテーマとしたディスカッションも行う。アルファベットから動詞直説法現在の規則活用及び動詞ser、estar、haber、tenerの使い方まで学修する。	
	スペイン語 2 A	スペイン語はスペインのみならず、20以上の国と地域で公用語として話されている言葉である。本演習科目では、「スペイン語 1 A」で学修したことを復習し、さらにスペイン語でコミュニケーションをとるために必要となる基礎文法を学修し、その文法構造を理解した上で練習問題を解き定着を図る。直説法現在形の動詞、直接・間接目的格代名詞、比較級・最上級を扱い、スペイン語の基礎を固めることを目的とする。またスペイン語を話す国々についてグループに分かれて調べ学修を行い、それを授業で共有し、言語知識のみならず、スペイン語・スペイン語圏の多様性について考える機会を設ける。	
	スペイン語 2 B	本授業は、「スペイン語 2 A」（文法）で修得した文法の基礎知識を活用して「聴く」そして「話す」能力のトレーニングに重点を置いた演習科目である。実生活に必要なスペイン語でのコミュニケーション能力向上を目指す。基本的な授業形式は、最初に「スペイン語 2 A」で学修する文法内容の重要事項を毎回復習する。その後、前半でダイアログのリスニング、発音練習、講師による解説、後半でペア又は3～5名の小グループに分かれて会話練習を行う。購入テキスト以外にも映像や音声も適時使用し、それらの内容をテーマとしたディスカッションも行う。直説法現在の不規則動詞から不定語・否定語まで学修する。	
	スペイン語 3 A	本演習科目では、「スペイン語 1 A」「スペイン語 2 A」で学修した直説法現在形の動詞の活用とその使用を復習し、スペイン語でコミュニケーションをとるために必要となる初級文法を学修し、その文法構造を理解した上で練習問題を解き定着を図る。直説法点過去形と線過去形、現在完了を扱い、線過去と点過去、点過去と現在完了の違いにも注目する。そして「今日したこと」「昨日したこと」「現在と過去の習慣」が表現できるようになることを目標とする。授業の開始時には毎回、前回の内容を確認するためのクイズを行う。さらに言語知識のみならず、スペイン語が話されている地域へ目を向けるため、スペイン語圏への旅行計画を立て、それを授業内にスペイン語で発表する機会を設ける。	
	スペイン語 3 B	本授業は、「スペイン語 3 A」（文法）で修得した文法の基礎知識を活用して「聴く」そして「話す」能力のトレーニングに重点を置いた演習科目である。実生活に必要なスペイン語でのコミュニケーション能力向上を目指す。基本的な授業形式は、最初に「スペイン語 3 A」で学修する文法内容の重要事項を毎回復習する。その後、前半でダイアログのリスニング、発音練習、講師による解説、後半でペア又は3～5名の小グループに分かれて会話練習を行う。購入テキスト以外にも映像や音声も適時使用し、それらの内容をテーマとしたディスカッションも行う。直説法点過去から直説法過去未来まで学修する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	スペイン語 4 A	本演習科目では、「スペイン語 1 A」「スペイン語 2 A」「スペイン語 3 A」で学修した直説法の使用を総復習し、基本文法の最後の項目となる命令形と接続法現在・過去形の活用と用法を扱う。そして、その文法構造を理解した上で、接続法を含む文を読み、その定着を図る。また、言語知識のみならず、使える言葉としての「スペイン語」を意識するため、これまでに学修した知識を応用し、実際にあるスペイン語圏の求人情報を読み解き、応募書類や履歴書を書く作業を行う。また2年間の総復習として、検定試験の問題などに触れる機会も設ける。	
	スペイン語 4 B	本授業は、「スペイン語 4 A」(文法)で修得した文法の基礎知識を活用して「聴く」そして「話す」能力のトレーニングに重点を置いた演習科目である。実生活に必要なスペイン語でのコミュニケーション能力向上を目指す。基本的な授業形式は、最初に「スペイン語 4 A」で学修する文法内容の重要事項を毎回復習する。その後、前半でダイアログのリスニング、発音練習、講師による解説、後半でペア又は3～5名の小グループに分かれて会話練習を行う。接続法現在・過去及び命令表現まで学修する。テキストの内容終了後は、これまで学んだあらゆる表現を駆使して、毎回異なるテーマに関するディスカッションを行い総復習とする。	
	日本語 1 A	本演習は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力一講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力一を定着させることを目標とする。講義を聴く技法、ノートをとる技法、情報の整理法、レポートを書く技法、発表する技法、資料・文献の収集法、レポートを書く技法を中心テーマとして取り上げて、テーマに沿った課題を出し、提出した課題を分析しながら授業を進める。	
	日本語 1 B	本演習では、新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲など様々なメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。語彙力、読解力を高め、新聞記事や短編小説の大意をつかみ、要約文や粗筋をまとめることができるレベルを目標とする。授業では様々なジャンルの文章を多読・精読し、要約をまとめてもらう。また、映画やアニメーションを鑑賞しながら、その表現の特質を考えていく。	
	日本語 2 A	本演習は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の能力を総合的に伸ばしながら、大学教育に対応した高度な日本語能力一講義を理解し、ノートを取り、資料や文献を収集し、レポートを書き、質疑応答や研究発表を行うといった大学生としての基礎能力一を定着させることを目標とする。「日本語 1 A」で修得した技法を確認・復習しながら、授業で調査・研究結果の発表方法、論文を読む技法を検討する。さらに、実際に課題を決め、関連する課題図書を読んで、研究成果を発表するという形で授業を進める。	
	日本語 2 B	本演習では、新聞、雑誌、小説、映画、アニメ、歌曲など様々なメディアやジャンルの日本語表現にふれ、日本語能力の奥行きを広げるとともに、日本の社会や文化への理解を深めていく。書く能力、発表能力の強化を図り、自分の意見や感想を的確に発表・記述できることを目標とする。授業では日本社会の幾つかのトピックスを取り上げ、関連する資料を読解しながら、質疑応答や討論を行った上で、各トピックスに対する感想文を提出し、それに対してフィードバックを行うという形で授業を進める。	
	日本語 3 A	本演習では、既習の日本語表現を確認し、より論理的な文章を書く方法を提示する。文体によってことばの選び方や文末表現が異なるので、教材や様々な文章例を参考にして何度も作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることを目指す。いろいろな書きことばの文体を学んだ後、物事の前後関係、仕組み・手順・方法、因果関係、行為の理由・目的、物事間の共通点・相違点、伝聞・引用などを表す表現を取り上げ、作文の練習をするというスタイルで授業を進める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	日本語 3 B	本演習は、対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上を目指す。後半に話しことばと似た性格を持つ電子メールの練習をして、両者の共通点と相違点を認識してもらうことを目標とする。授業は、まず話し言葉の特徴を考え、その後日本語の改まり度や敬意表現、伝言、勧誘、許可、情報の提示、依頼、申し出などの機能を担う表現を取り上げ、ロールプレイやディベートといった形でそれらの表現を含む会話練習をする。さらに、会話と電子メールの共通点と相違点を検討し、電子メール表現の特質を考える。	
	日本語 4 A	本演習では、より論理的な文章を書く方法を提示する。教材や様々な文章例を参考に何度か作文を重ね、書きことばの表現能力を向上させることを目指す。また、自分の意見と、参考にした文章との違いを明確に書き分けられることを目標とする。自分の考えを述べ、物事の変化・推移、賛成意見・反対意見などを表す表現を取り上げ、作文の練習もする。さらに、テーマと目的やアウトラインを考え、情報を整理して、レポートにまとめるというスタイルで授業を進める。	
	日本語 4 B	本演習は、対人関係を考慮した総合的なコミュニケーション能力の向上を目指す。また、文章を基に、プレゼンテーションをする力を身に付けることも目標とする。授業ではまず、不満・言い訳、提案、感想表現といった対人関係を考えた基本的な会話表現を練習する。その後、電子メールと手紙の共通点と相違点を考える。後半ではインタビューとそのまとめ、発表の練習をし、さらに実際にインタビューによる調査とそのプレゼンテーションを行う。	
	実践英語会話 1	本演習科目では、「英語 1 B」から「英語 4 B」の授業科目で身に付けた大学英語の基礎力を使って、実践的な会話能力を養成することを目指す。目標とする技能は英語でやりとりすることである。自然な口調で話された英語を理解し、基本的な会話表現を用いて適切な発音やイントネーションにより応答できる英語表現力を身に付ける。授業では、実践的な場面として大学生活などで必要な会話表現や語彙を扱う。また、海外旅行の場面などで交わされる会話も扱う。	
	実践英語会話 2	本演習科目では、「実践英語会話 1」で身に付けた英語を使って、より実践的な会話能力を養成することを目指す。目標とする技能は英語で正確に速くやりとりすることである。自然な速さで話された英語を正しく理解し、適切な表現や発音、イントネーションによりすばやく応答できる力を身に付ける。この授業では、実践的な場面として社会生活などで必要な会話表現や語彙、口語文法を扱う。また、海外生活の場面などで交わされる高度な会話も扱う。	
	実用資格英語 1	本演習科目では、実用性に重点を置き、様々な資格英語教材を使って、「英語 1 A」から「英語 4 A」及び「英語 1 B」から「英語 4 B」の授業科目で身に付けた英語から、さらに実践的で正確な英語力を養成することを目指す。目標とする技能は、単に英語資格試験対策に留まらず、いわゆる 4 スキルズ（リスニング・リーディング・スピーキング・ライティング）の英語の実用技能である。本授業では、特にリスニング力・リーディング力を重点的に養うこととする。	
	実用資格英語 2	本演習科目では、実用性に重点を置き、様々な資格英語教材を使って、「実用資格英語 1」で身に付けた英語から、さらに実践的で正確な英語を養成することを目指す。目標とする技能は、単に英語資格試験対策に留まらず、いわゆる 4 スキルズ（リスニング・リーディング・スピーキング・ライティング）の英語の実用技能である。本授業では、特にスピーキングとライティングを重点的に扱うが、統合的・総合的に実用英語と資格英語を扱う。	
	中級ドイツ語 1	本授業は、ドイツ語の初級文法をすでに修得した学生を対象とし、「習うドイツ語」から「使うドイツ語」を指向する演習科目である。日常の様々な場面を想定した会話表現の獲得に重点を置く。さらに高度な文法知識を得ると同時に、生のドイツ語に実践的に対応できるような運用能力を養成する。ドイツ語を話す人たちの社会、歴史、文化、生活様式などにも目を向けて、ドイツ人の考え方や発想の仕方を学び、国際的視野を涵養する一歩とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	中級ドイツ語 2	本授業は、ドイツ語の基礎の学修を終えた学生を対象とし、テキストの読解練習を通して文章を理解する力を身に付ける演習科目である。ドイツ語圏の文化を扱った短い文章を読むことで、基礎的な語彙と文法の定着を図る。とりわけ「住まい」や「学校生活」など、ドイツ語圏の人々の生活文化をテーマとした様々な文章を丁寧に読み進める。また「ドイツ語技能検定試験」(独検)3級や「ゲーテ・ドイツ語検定試験」及び「オーストリア政府公認ドイツ語能力検定試験」A2、B1の合格を目指して試験対策を行う。	
	上級ドイツ語 1	本授業は、ドイツ語の基礎及び中級ドイツ語の学修を終えた学生を対象とし、状況に応じた表現を使うことができるよう、ドイツ語の運用能力を伸ばす演習科目である。メール及び手紙をテーマに文章を書く力を養う。丁寧な表現方法を学ぶとともに、自分の意思を伝える能力を高める。さらに、手紙やポストカードを作成する課題を通して、相手を思いやる表現などを身に付けることを目指す。丁寧な依頼などを表現するために、接続法を用いた文を使用する練習を行う。	
	上級ドイツ語 2	本授業は、ドイツ語の基礎及び中級ドイツ語の学修を終えた学生を対象とし、ドイツ語圏の文学作品の原典を精読する。物語では、接続法や過去形が多用されるため、読解を通して文法、語順などの確認を行う。グリム童話等、19世紀初頭の文学作品を扱い、これまでに学んだ語彙や文法の定着を図る。その後、物語の内容を要約する練習を行うことにより、理解力と表現力の向上を目指す。また、「ドイツ語技能検定試験」(独検)2級や「ゲーテ・ドイツ語検定試験」及び「オーストリア政府公認ドイツ語能力検定試験」B1、B2に向けて試験対策を行う。	
	中級フランス語 1	本授業は、フランス語のコミュニケーション能力の向上を目指した実践的練習を行う演習科目である。これまで学んできたフランス語を実際に運用できるように、基本的な言語表現を、その表現が用いられる状況に即した形で練習する。そのため、DVD・CD等の視聴覚教材を活用しつつ、話す、聞く、読む、書くという4つの作業をフランス語で行う。その一例：ヌーヴェル・ヴァーグ映画からエリック・ロメールの作品を選び、そのシナリオをフランス語で読み、映画の場面を繰り返し見ることによってその日常表現を覚える。	
	中級フランス語 2	本授業は、既習フランス語の運用能力を高めるとともに、フランス語世界についての知識を深めることを目標とする演習科目である。フランス語世界の歴史、文化、社会問題等について、フランス語で書かれたテキスト(新聞・書物等)を利用し、また文学作品のテキストやその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVD(ビゼー作曲『カルメン』など)を活用しつつ、フランス語世界の具体相に触れ、学生をその世界へ触発する。毎時間訳読が課されるので、その心構えが必要である。	
	上級フランス語 1	本授業は、「中級フランス語 1」に続いて、基本的に同じ方針の下に、コミュニケーション能力の向上のための実践的練習を、さらに発展させる。「中級フランス語 1」に続いて、基本的な言語表現を状況に即した形で練習するためにDVD・CD等の視聴覚教材を活用するが、その一例として、「中級フランス語 1」のエリック・ロメールに続いて、やはりヌーヴェル・ヴァーグ映画の旗手と言われるゴダールの作品のシナリオをフランス語で読み、映画の場面を繰り返し見ることによってその表現を覚える。	
	上級フランス語 2	本授業は、「中級フランス語 2」に続いて、基本的に同じ方針の下に、フランス語の運用能力を高め、フランス語世界についての知識を深めるための実践的練習を、さらに発展させる。「中級フランス語 2」に続いて、フランス語世界を広く学修するため、新聞・書物等を利用し、また文学作品やその映画化されたもの、さらにオペラなどのDVDを活用するが、本授業では、特に『マノン・レスコー』を、原作である小説と映画、そしてオペラを介して比較し、そのフランス語表現を味わいつつ語法も学修する。フランス語の表現と日本語の表現の違いを認識することが重要である。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	中級中国語 1	本授業は、初級中国語を履修した上で、これまでに修得した中国語の基礎を活かしつつ、漢語水平考試 (HSK) 3級～4級、中国語検定試験4級～3級レベルの語学力を身に付けることを目標とする。また、HSKや中国語検定試験、中国留学を積極的に支援する。そのために、発音、単語、基本文型をしっかりと把握し、「聴く」「読む」だけでなく、「話す」「書く」機会を増やした授業を行う。さらに、言語の根底にある文化に対する理解を深めるために、中国の最新事情や最新用語などの解説も行い、絶えず知識の更新を目指す。	
	中級中国語 2	本授業は、「中級中国語 1」に続き、漢語水平考試 (HSK) 3級～4級、中国語検定試験4級～3級レベルの語学力を身に付けることを目標とする。さらなるステップアップをはかり、会話においては、より豊かな表現ができるように、文章の読解や作文においては、より複雑な文型が使えるように、練習の機会を増やした授業を行う。常に生きている中国語を学ぶことができるよう、その時々話題を取り上げ、中国で起きていることを通して、言語に対する理解を深める。	
	上級中国語 1	本授業は、「中級中国語 1・2」を履修した上で、漢語水平考試 (HSK) や中国語検定試験の難関に挑戦し、HSK5級～6級、中国語検定試験2級～1級レベルの語学力を身に付けることを目標とする。そのために、過去問題集に基づくトレーニングや、中国メディアで取り上げられるその時々話題をめぐる議論などを通して、中国語の構造や中国文化の特徴を把握し、いかなる場面にも対応できる中国語のコミュニケーション能力を養い、留学はもちろん、就職にも役に立つ実用レベルの中国語の修得を目指す。	
	上級中国語 2	本授業は、「上級中国語 1」に続き、HSK5級～6級、中国語検定試験2級～1級レベルの語学力を身に付けることを目標とする。高度な中国語を身に付けるよう、語彙が多様なニュース、表現が豊富な映画やドラマも教材として使用する。さらに、翻訳や通訳の作業を通して、それらの内容をどこまで理解しているかを検証し、学んだ知識を完全に把握し、活用できるようになるまで練習を繰り返し、中国語を「できる」レベルから「駆使する」レベルに向上させる。検定試験に留まらず、実用にも十分堪えうる語学力の修得を目指す。	
	中級韓国語 1	本授業は、韓国語の基礎の学修を終えた学生を対象とし、語彙、文法、表現の増強を図り、実践的に表現しうる能力を養う演習科目である。用言の活用の様々なタイプに習熟し、話しことばと書きことば、敬意体と非敬意体、連体形や接続形、引用形などの様々な文法を学ぶ。加えて、基礎的な語彙力の拡充を図り、「電話の表現」「感謝を表す」「許可を得る」「提案する」「意志を述べる」といった、より洗練された談話表現の獲得にも力を注ぎ、実践的な表現力を増強する。	
	中級韓国語 2	本授業は、韓国語の基礎の学修を終えた学生を対象とし、会話力と作文力を実践的な練習を通して身に付ける演習科目である。まず、発音の練習を徹底して繰り返す。次に、会話における「場」の重要性を認識し、いつ、どこで、誰と、何を、どのように、なぜ、言葉を用いて話すのか常に意識し、やり取りする練習を行う。また、自分の考えや感想を韓国語の自然な表現で表し、まとめる力を養う。加えて、韓国語学習の成果の一つとしてハングル検定試験3級合格を目指し、試験対策も行う。	
	上級韓国語 1	本演習科目は、韓国語の中級の学修を終えた学生を対象とし、より豊かで自然な韓国語表現力を養うことを目標とする。日本語と韓国語の対照言語学的な観点も考慮に入れ、両言語の類似点と相違点に気付き、さらに直訳では不自然な、高度な表現の修得にも力を注ぐ。また、韓国で出版されたテキストのほかに、小説、童話、詩集、新聞記事等を教材とし、豊かな表現の学修とともに、そこに反映されている韓国文化や価値観、考え方等を知り、理解することを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 情報の活用とコミュニケーション	上級韓国語 2	本演習科目は、韓国語の中級の学修を終えた学生を対象とし、より豊かで自然な韓国語でのコミュニケーション能力を養うことを目標とする。まず、聞き取りや会話練習に重点を置き、テキストでの学びの他に、映画やドラマ等を題材にし、様々な表現を学び、応用できる練習を行う。また、日記や感想文を課題にし、自分の考えや主張等を効果的に伝えるための文章力を養う。加えて、韓国語学修の成果の一つとして「ハングル」能力検定試験」2級・準2級の合格を目指し、試験対策も行う。	
	中級スペイン語 1	本授業は、スペイン語を2年間学修し、接続法までの基礎文法を学修した学生を対象とする演習科目であり、既習文法を応用し、「読む」「書く」「話す」という三つの技能を総合的に伸ばすことを目的とする。まずは、スペイン語圏の文化を題材とした手紙、E-mail、レシピを読み、既習文法を復習するとともに、「スペイン語 1 A・B～4 A・B」で扱えなかった、細かい用法についても注目する。さらに読んだ題材を基に、日本文化を紹介する文を作成し、授業内にスペイン語で発表する。スペイン語圏のみならず、日本文化にも目を向け、双方の共通点や相違点についても意識することを目指す。	
	中級スペイン語 2	本授業は、スペイン語を2年間学修し、接続法までの基礎文法を学修した学生を対象とする演習科目であり、既習文法を応用し、「読む」「書く」「話す」という三つの技能を総合的に伸ばすことを目的とする。まずは、スペイン語圏の文化を題材とした伝記、旅行記、新聞記事を読み、既習文法を復習するとともに、「スペイン語 1 A・B～4 A・B」で扱えなかった、細かい用法についても注目する。学修の成果として、クラス内でそれぞれのテーマに関してスペイン語で発表する。読む力のみならず、スペイン語で発信する力を増強することを目指す。	
	上級スペイン語 1	本授業は、スペイン語を3年間学修し、身の回りのことや日常的なことが表現できる学生を対象にした演習科目であり、既習事項を応用し、「読む」「書く」「話す」という三つの技能を総合的に伸ばすことを目的とした、プロジェクト型の授業を行う。スペイン語圏で日本語を勉強している大学生に、日本の大学や学生生活を紹介する動画を作成する。学生は与えられたタスクを達成するために、新聞や文献、又は身の回りの方々へのインタビューなどから情報を収集し、それを基に作業を進める。特に、日本とスペイン語圏の大学・大学生に関する類似点・相違点を意識して作業を進めてもらいたい。また、授業の最後に、動画をスペイン語圏の大学へ送り、海外の学生と意見交換をおこなう機会を設ける。	
	上級スペイン語 2	本授業は、スペイン語を3年間学修し、身の回りのことや日常的なことが表現できる学生を対象にした演習科目であり、既習事項を応用し、「読む」「書く」「話す」という三つの技能を総合的に伸ばすことを目的とした、プロジェクト型の授業を行う。来日して間もない外国人(スペイン語圏出身者)に「日本について紹介すること」をテーマに、文化・歴史・社会に関連するものから決定する。学生は日本とスペイン語圏との文化の違いを意識し、与えられたタスクを達成するために、新聞や文献、又はスペイン語圏出身の留学生やスペイン語圏に滞在歴がある学生へのインタビューなどから情報を集め、それを基に作業を行う。最終的にはクラス内で発表をし、意見交換を行う。	
	コンピュータ基礎演習	本演習科目は、前期の必修科目である「情報の活用と倫理」に続く授業と位置付ける。最初に画像に関する基礎知識を学び、次に情報検索によるメディアリテラシーを学修する。Officeアプリケーションを中心としたアプリケーション間の連携を体験することで、情報の収集・加工・表現までの一連の流れを深く修得し、大学生活や社会に出た時にPCを有効な道具として使いこなせるようにすることを目標としている。 ※画像処理・情報検索・Word、Excel、PowerPointの連携	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
情報 の活用 と コミュニケーション	コンピュータ応用演習	本演習科目は、特に大学の学びの中でのレポートの書き方や卒業論文等の書き方など、具体的な題材を扱うことで、より実践的なOfficeアプリケーションの使い方を修得することを目標とする授業である。Wordでは長文作成の方法を学び、Excelではアンケート調査結果を基に表の作成からグラフ作成や簡単な統計処理を学ぶことで、実践的な技能の修得と情報分析力を高めることを目標としている。 ※情報収集・Word、Excelの応用・情報分析力		
	海外語学研修A	本演習科目は、本学と提携協定を結んでいる海外大学等の語学研修プログラムに参加し、現地での研修を受講するとともに、本学で実施する事前事後研修を併せて受講し、英語又は中国語の基礎的なコミュニケーション能力を高めることを目的とする。予め学内において、英語又は中国語に関する授業時間数が60時間以上のプログラムを選定し、学生に希望するプログラムを選択させる。各プログラムは語学に関する授業のほか、渡航先の社会や文化を学ぶ授業も用意されている。授業の実施に当たっては、渡航前に学内で事前研修を行い、英語又は中国語を実際に使用する上での留意点をはじめ、文化や生活習慣など、現地で研修を受講する上での基礎的な知識を修得させる。渡航後、学生は報告レポートを作成し、学内報告会において成果発表を行う。		
	海外語学研修B	本演習科目は、「海外語学研修A」を履修した学生を対象に開講する2回目の語学研修プログラムである。「海外語学研修A」同様に本学と提携協定を結んでいる海外大学等の語学研修プログラムに参加し、現地での研修を受講するとともに、本学で実施する事前事後研修を併せて受講し、英語又は中国語のコミュニケーション能力をさらに高めることを目的とする。予め学内において、英語又は中国語に関する授業時間数が60時間以上のプログラムを選定し、学生に2回目の語学研修としてふさわしいプログラムを選択させる。学生にはより高い研修目標を設定させ、語学力はもとより、異文化理解を深めさせる。授業の実施に当たっては、渡航前に学内で事前研修を行い、渡航後、学生は報告レポートを作成し、学内報告会において成果発表を行う。		
全学 共通 科目	科学的 思考 科目 群 幅広い 教養	自然哲学	本講義では、自然を対象として、過去の人々がどのような「問い」をたて、何を「根拠」として「答え」を導き出したのか、その実例をテーマごとに取り上げていく。第2回では、私たちが生きる世界を構成する原理、第3回から第7回までは宇宙から人間へ、第8回からは、人間の心と身体に着目して取り上げる。これらの実例を通じて、様々な「問い」について考えていく。各回のテーマに応じた「問い」としては、たとえば、この世界にはどのような仕組みがあるのか、世界には初まりと終わりがあるのか、宇宙人はいるのか、などがある。さらにより抽象度の高い「問い」、たとえば、より確からしい知識には何らかの基準があるのか、といった「問い」についても考えていく。このように、自らの関心に応じて考えたいことを考えてよい土壌こそが自然哲学の醍醐味である。	
		論理学A	本講義では、形式論理学を中心に扱う。推論とは何か。また、推論の正しさの基準について、厳密な手法を学んでいく。これにより、学生には形式的な思考法を身に付けさせる。形式的な演繹の方法を学修することで、より正確な推論手法を修得することができる。推論の正しさを直観的ではなく、形式的に表現し、とらえる手法を学修することで、推論を体系的かつ厳密に理解することの重要性を学んでいく。このことを通して、論理的な思考力を高めてもらうことも、本講義の狙いである。代表的な推論の取り扱いの手法としては、真理値分析や自然演繹を取り上げる。	
		論理学B	本講義では、主に議論を含めた非形式論理学を扱う。議論やディベートの基盤となるような、より実用的で日常志向の論理について演習問題を通して学修していく。もちろん、学問的な思考の重要な部分も、このような非形式的論理からなる。議論やディベートにも確固たる方法論があり、これを修得することで、議論やディベートにおいて主導的な役割を果たしていくようになるのが本講義の狙いである。さらに、議論で犯しがちな誤りについて検討することで、議論に対してより批判的な視点を得たい。批判的な思考力も、論理的思考力の不可欠な要素である。政治的なテーマから、サークルやゼミでの討論など様々な具体例を交えながら、学生には実践的な議論力を身に付けさせる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 科学的思考科目群	生命と自然の倫理 A	安楽死や中絶など、現在日本でも大きな論点になっている医療倫理や生命倫理上の問題を取り上げる。特に、インフォームド・コンセントや医療倫理の4原則など、医療倫理の基本原則を勉強していく。そうすることで、学生に、現在、新聞などのメディアで大きな話題となっている生命倫理のテーマをより正確に深く考えるための素養を身に付けさせる。また生命倫理の問題が、障害者差別などの社会問題と密接に関係していることを学んでもらい、広く社会についての問題意識を高めることが本講義の狙いである。	
	生命と自然の倫理 B	代理出産などの生殖補助医療やデザイナー・ベビーなどの問題を取り上げる。また、現在、特に身近になっている医療の問題として、在宅医療の問題もテーマとする。政策論的な観点も交えながら、主に、思想的な観点からこれらの問題を考察していくことにする。これらは、とりわけ人間の生き方や価値観に深く関わる。それと同時に、社会のあり方や制度にも密接に関わり、視野の広い考察が求められる。自身あるいは社会の今後を考える上でも極めて重要な生命倫理について、問題意識を高めることが本講義の狙いである。	
	統計学 A	本講義では、まず、これまでの高等学校までで学習した記述統計について、より詳しく学修する。統計で扱うデータの種類、データの種類によりどのようなグラフ表現が有効であるかを扱う。データの中心的傾向、散らばり傾向、対称性、尖り具合を表す特性値、特性値の長所・短所なども学修する。「統計学 B」で扱う推測統計の基礎的素養として、確率や確率分布も取り上げる。確率に関しては、これまでに学修してきた数学的確率、統計的確率に加え、公理主義的確率やベイズの定理などを扱い、確率分布では、ベルヌーイ分布、二項分布から始め、連続型確率分布の正規分布の確率計算まで学修する。	
	統計学 B	本講義では、推測統計を取り扱う。まず初めに、大数の法則、中心極限定理を学修する。理論的な部分は難解であるので、これらの法則や定理について計算機シミュレーションで直感的に理解させる。点推定、区間推定、仮説検定の考え方と使い方を学修する。点推定における不偏性・一致性・漸近世紀性・有効性なども理論的に理解することは難しいので、計算機シミュレーションなどを通して考え方を理解させ、具体的なデータを用いて使用法を学修する。また、仮説検定に関しては、母集団分布を仮定しないノンパラメトリック検定なども取り上げる。	
	自然科学 A	自然科学とは自然に存在する様々なものや現象を対象とし、その法則性を明らかにしようとする学問である。産業革命以降、自然科学は技術と結びつき、科学技術として経済成長の原動力となった。科学技術の発展に伴って私たちの生活が豊かになる一方で、環境の汚染が生じている。本講義では、私たちの生活環境で生じている環境汚染、特に水環境汚染と大気汚染の現状を学ぶ。環境汚染が進行した社会的背景を念頭に、汚染の現状とその対策を理解していくことを目標とする。	
	自然科学 B	自然科学と技術が結びついて生まれた科学技術は私たちの生活を一変させた。世界人口の増加に伴った生活需要の高まりを科学技術の進歩が支えてきたが、その一方で環境汚染をはじめとした多くの問題を生じている。本講義では、私たちの生活環境で生じている環境問題、特に化学物質と食品との関係や、生態系への化学物質の混入による健康問題を学ぶ。化学物質を使用した社会的背景を念頭に、化学物質汚染の現状とその対策を理解していくことを目標とする。	
	数学 A	本講義では、三角関数、指数関数、対数関数の定義や性質から始まり、逆関数や有理関数などについて学修し、その後、微分積分学の基礎を学修する。微分法に関しては、数列の極限值、関数の極限值、導関数、合成関数の微分法、逆関数の微分法などの微分法の基礎を扱い、それらを用いた関数の増減などの微分法の応用を学修する。積分法に関しては、微分法で扱った関数に対する不定積分、定積分、部分積分法、置換積分法の積分法の基礎を扱い、それらを用いて面積などの積分法の応用を学修する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 科学的思考科目群	数学B	本講義では、線形代数の基礎的部分を学修する。平面・空間のベクトル、その演算、ベクトル方程式から始め、行列の定義と演算（和・差・スカラー積、行列同士の積、逆行列）、連立一次方程式と行列（基本変形による連立一次方程式の解法）、行列の階数、行列式の定義と性質などを学修する。行列式を用いた逆行列の求め方、階数・行列式を用いて連立一次方程式の解の性質を調べたり、連立一次方程式の基本変形以外の解法などについても学修する。	
	物理学A	自然界で起こっている自然現象には多くの真理が含まれているが、その真理にたどり着くことは容易なことではない。今日の物理学は、われわれの先人たちが、自然界という大海の中で、真理の探究を絶え間なく行ってきた努力によるものであるといえる。そのような真理にたどり着くためには、既成概念にはとらわれず、問題の本質を見極めて、事実を念頭においた判断をし、自らの考えを組み立てていくことが必要である。本授業では、「運動と力」において、物体に力が作用することで物体の運動がどのような影響を受けるのか、ということについて講義し、続いて、仕事とエネルギー、温度と熱などについて解説していく。	
	物理学B	自然現象を正しく見つけ、その中からそれらの現象を貫く普遍的な法則を探りあてようとする努力によって育まれてきたものが物理学であり、自然現象の事実に基づいて考えることが物理学の出発点であるといえる。既成の知識や体系だけにとらわれず、常に自然が織りなす事実に立ちかえって、より統一的な考え方を作り上げていくように努力していくことが必要である。われわれは、そのような先人たちの努力によって明らかにされてきた物理学の諸法則を学んでいく。本講義では、「物理学A」の講義内容に引き続き、「光と波」において、光と波の性質及び光の二重性についてと電磁波とは何か、について講義し、その他、電気と磁気、原子物理、核物理などについて解説していく。	
	化学A	化学は自然科学の中で様々な物質の構造、性質や反応を学ぶ学問である。化学物質は私たちの生活を豊かにし、快適な生活を維持していくためには欠かせないものである。本講義では、これまで化学を履修していない学生あるいは高校での履修内容を再確認したい学生でも学びやすいよう、大学での化学関連科目を学ぶための基礎知識となる物質の構成を中心に学ぶ。原子の構造、元素の種類と原子中の電子配置との関係、化学結合の種類と特徴を関連付けて学び、物質は原子と分子から成り立っていることを理解していくことを目標とする。	
	化学B	本授業は、私たちの身のまわりの生活や私たちの体に関わる化学現象、化学技術について理解し、各人が生活の中で化学とつきあうための教養を身に付けることを目標とする。生活で使っている製品や私たちの体を構成している物質について、どのような化学的な意味があるのか正しく理解し、(1) 私たちがどのようにして金属を利用しているのか、化学的性質に基づいて、(2) 私たちの身のまわりの様々な有機化合物について、その性質や用途を化学的に、(3) 私たちの体をつくっている物質について理解し、説明できるようにすることを旨とする。	
	地球惑星学A	本講義の目的は、地球惑星科学の基礎を学び理解することである。「地球表層、マントル、コアのダイナミクス」すなわち「プレートテクトニクス理論」と「プルームテクトニクス理論」の概要と原理を学ぶ。具体的講義内容は、「地球惑星の構造」「地殻とプレート」「移動する大陸と拡大する海洋底」「海嶺のしくみと引き裂かれる大地」「海嶺とトランスフォーム断層のしくみ」「海溝・沈み込み帯」「衝突帯のしくみ」「ウイルソンサイクル」「プルームテクトニクス(1) マントルトモグラフィー、プルーム、スラブの行方」「プルームテクトニクス(2) 超大陸分裂説と超巨大噴火、生物大量絶滅説」さらに「地震の科学(1) 日本列島の地震、プレート境界型地震と活断層型地震」と「地震の科学(2) 日本列島の地震、東日本太平洋沖地震、関東の地震」について学ぶ。講義は、最新の研究成果及び話題を織り交ぜ解説し、論じる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 科学的思考科目群	地球惑星学 B	本講義では、「宇宙の誕生と歴史」「地球史」について学ぶ。特に地球誕生から46億年かけて形成した気圏、水圏、地圏、生物圏における物質、エネルギー循環とその相互作用について学び、地球を一つのシステムとして捉え、地球環境の変動メカニズムについての概要と原理を興味関心を持って学び理解することを目標とする。具体的講義内容は「宇宙論：相対性理論」「素粒子物理学と宇宙史」「宇宙の未来と物質の進化」「銀河系と太陽系の誕生」「原始地球、月、海洋の誕生」「生命の誕生&地球磁場誕生とブルーム理論」「酸素の歴史と生物の陸上進出と大量絶滅」「中生代の地球環境、恐竜類の繁栄と絶滅」「新生代の生物と人類の誕生」、さらに「第四紀の地球環境&気候変動とその原因」と「地球温暖化問題」について学ぶ。講義は、最新の研究成果を織り交ぜ解説し、論じる。	
	地理学で知る自然と環境	異常気象や大規模な自然災害が多発する近年、身近な生活環境から地球規模の地形形成や気候条件などへの関心が高まっている。人類は誕生以来、地球上の自然環境と共存してきた。本講義では、自然が織りなす環境について身近なスケールから地球規模のスケールまでを対象に取り上げ、将来の生活に役立つ正しい知識の理解に努めることを目標にする。我々の体は自然の一部でありながら、人工的に整えられた環境での生活に浸っている。地形の形成や気候条件などの異常さばかりに目が向けられがちであるが、「正常」な状態とは何か、どのような仕組みで自然環境が成り立っているのか、基礎的な理解が大切である。この授業の受講を機会に、身近な自然環境に目を向け、自然に親しんでもらいたい。	
	生物学 A	生物学は、自然科学の中で生物を学ぶ学問であると同時に生命現象を学ぶ学問である。本講義では、これまで生物学を履修していない学生あるいは高校での履修内容を再確認したい学生でも学びやすいよう、大学での生命科学関連科目を学ぶための基礎知識となる細胞の構造と機能を中心に学ぶ。細胞の構造、細胞の物質輸送、細胞分裂、発生、器官の働きを関連付けて学び、生物は基本単位である細胞から成り立っていること、生命現象は連続性を有していることを理解していくことを目標とする。	
	生物学 B	生物は細胞から成り立っているが、その細胞内では多種多様な生命活動が行われている。生物を維持するのに必要な生命活動の一つに、細胞内で行われる遺伝情報伝達がある。本講義では、遺伝物質であるDNAの構造及び分子遺伝による遺伝情報伝達の仕組みを学ぶ。生物が示す多くの現象は生命の設計図として知られる遺伝物質DNAに依存していること、DNAが引き起こす生命現象は連続性を有していることを理解していくことを目標とする。	
	都市と建築	都市の構成要素として、建築、公園緑地、都市交通施設、供給処理施設などがある。それらを統合して都市計画を策定するわけであるが、本講義では、建築を地域レベルで捉え、都市環境の中で建築物が機能するための方法論を解説する。具体的には、著名な建築家による都市論を取り上げ、彼らが構想した都市計画論の詳細を理解することを通して、都市と建築の在り方を考える。また、多摩地域の都市を取り上げ、具体的な都市計画と建築との関係を解説する。	
	科学技術論 A	現代社会における科学技術の発展は目を見張るものがある。われわれはそうした中で社会産業を構築してきており、われわれの日々の生活もその恩恵を受けているとあってよい。われわれが生活する上で、もっとも利用しているエネルギーは電気エネルギーであろう。ひとたび震災や災害が起こり、主要な発電所の稼働が不可能となれば、われわれの普段の生活を維持することはきわめて困難となる。本講義では、われわれの身近なエネルギーとして、電気に関する基本事項を理解することを目的とする。具体的には、その電気エネルギーを得るためにどのような方法で発電しているのか、ということを理解した上で、原子力発電に代る再生可能エネルギーとされる、自然エネルギーなどについて解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 科学的思考科目群	科学技術論B	<p>本講義では、われわれの生活の身近なところで役立っているセンサーを取り扱う。センサーは、力や熱、重さや長さなどの物理的な量を、多くの場合、電気的なエネルギーに変換し、回路技術やプログラミングの工夫によって、産業機器や医療機器、自動車やパソコン、家電製品に組み込まれており、われわれは意識せずともその恩恵を受けている。例えば温度センサーは、感知するのは温度という物理量だけであるが、エアコンや冷蔵庫、電気釜、風呂やガス台、湯沸かし器など広範囲に利用されている。その他、コイルを組み合わせることによって生じる電磁エネルギーを利用したセンサーも利用範囲が広い。センサーに関することだけに留まらず、物理的な法則などを織り交ぜて解説する。</p>	
	科学コミュニケーション論	<p>科学コミュニケーションは、一般に「研究者、メディア、一般市民らと意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動」と捉えられている。本講義は、大学生の科学リテラシー向上を図るための教養教育の一授業科目として開講するものであるが、狭義の「科学コミュニケーション」にとらわれることなく、「生活とつながる科学コミュニケーション」をテーマとし、特に「塩（しお）」「微生物」をキーワードとしたコミュニケーション展開を試みる。本授業の受講により、塩文化・発酵文化に限らず、身近な「もの」に関わる文化と科学・技術とのつながりを捉える姿勢を持ちながら、コミュニケーションを展開する能力を身に付けることを目標とする。</p>	
	人類とその環境	<p>環境問題というと地球温暖化論など環境破壊の側面が問題とされやすい。日本では特に、現在の地球環境は人類が守らなければならない、善なる弱くて優しい存在と捉えられることが多いが、環境は決して受身の存在ではない。この授業ではそのこと自体を問題とし、地球という環境、生物と環境、生物が作り出す環境、人類の環境利用を柱として環境問題を捉えなおそうという学問領域を超えた試みである。人類も環境を構成する一要素であるという自覚を持つことが出来るであろう。</p>	共同
	技術・科学史	<p>生物が生きる究極の目的は、自分の複製を作り、命を繋ぐことにある。私達ヒトの場合、姿や顔、性格などが親から子へと複製され、受け継がれていく。本講義では、その中心的役割を果たす遺伝子について、それは何か、どのように働くかを解明していった歴史、及び今後の展開について学修する。メンデルの遺伝する二つの因子の発見から始まる解明には「血液が受け継がれる」「タンパク質が遺伝子」等の俗説・学説との対立を含む紆余曲折の歴史がある。様々なエピソード・歴史を学ぶことにより生命現象の基本である遺伝について理解を深める。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 現代社会課題解決科目群	21世紀の世界を考える	<p>(概要) 哲学・倫理学・宗教学・美学など、人文系思想科目について広く全般的な案内となることを目標として、それぞれの分野での中心的思想家・著作を紹介していく。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(60 浜野 喬士/6回)            ホッブズ、ルソー、カントといった近代を代表する哲学者たちが、人間や社会の本質についていったい何を考え、そしてその問題意識が21世紀の世界を考えるうえで、どのようなヒントを与えてくれるか、という点について基礎的なレベルから論じる。</p> <p>(68 佐藤 洋/5回)            ソクラテス、プラトン、アリストテレスなど古代ギリシアを代表する哲学者たちの議論を踏まえて、「よく生きる」という考え方を基礎とした幸福論、徳論、友愛論などを論じる。</p> <p>(39 林 伸一郎/4回)            17世紀フランスの二人の哲学者・思想家デカルトとパスカルのテキストをとりあげ、この二人が「私」に収斂していく人間存在をどのようなものとして捉えているのか、確認しながら、21世紀に生きる私たち自身について思いを巡らす機会を提供したい。</p>	オムニバス方式
	現代社会の仕組みA	この授業科目は、社会学的なものの見方や考え方を学び、現在の日本がかかえる社会問題について考察する講義科目である。具体的には、ジェンダー、性別役割分業、男女共同参画社会、性にかかわる諸問題、近代家族と家族の変容、未婚化・晩婚化、少子化、高齢化、介護と社会保障について取り上げる。これらの問題の考察を通じ、私たちを取り巻く社会がどのような仕組みを持ち、そのなかで私たちがどのように生きていくのかを考える機会とする。	
	現代社会の仕組みB	この授業科目は、社会学的なものの見方や考え方を身に付け、ダイナミックに変化している社会の現状について学修する講義科目である。具体的には、現代社会の成立、経済のグローバル化、人の移動のグローバル化、グローバル化の進展とその行方、エスニシティの政治問題化、移民、難民、日本社会の外国人住民について取り上げる。これらの問題の考察を通じ、グローバルな社会の仕組みを理解し、変容する社会のなかでどのように生きていくのかを考える機会とする。	
	社会科学論A	社会科学とは、「自然」を対象にする自然科学と異なり、社会における「人間」の行動を明らかにする学問であり、社会学、政治学、経済学など多様な分野にわたる。本講義では、社会学の中でもジェンダー（女らしさ/男らしさ）に関する理論を取り上げる。そして女らしさ/男らしさ、恋愛、結婚、家族といったテーマで、通常の講義に加えてゲストスピーカーによる講義、映像資料やグループワークなどを通じて「性のあたりまえ・思い込み」を解きほぐし、自らの日常生活をジェンダーの視点から問い直す。	
	社会科学論B	社会科学とは、「自然」を対象にする自然科学と異なり、社会における「人間」の行動を明らかにする学問であり、社会学、政治学、経済学など多様な分野にわたる。本講義では、セクシュアリティ（人間の性のありよう）に関する理論を取り上げる。そして性的指向・性自認、異装、性的同意といったテーマで、通常の講義に加えてゲストスピーカーによる講義、ワークショップ、映画などを通じて「性のあたりまえ・思い込み」を解きほぐし、自らの日常生活をジェンダーの視点から問い直す。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 現代社会課題解決科目群	外国事情A (アジア)	日本の近隣・中国はどういう国なのか、本講義では、「中国」という名称の由来から今日の中国の現状まで解説する。一九四九年に成立した共産党政権下の中華人民共和国の時代を中心に、現代中国が歩んできた道程をたどりつつ、中国社会の現状や中国文化の変遷を概観する。文化大革命など現代中国における重大事件について検証し、中国の直面する諸問題を客観的に取り上げる。また、中国から日本に文化が伝来したことはよく知られているが、実は日本から中国にも文化が伝わっている。その実態に触れ、中国文化と日本文化がどのように互いに影響を与えているかについても解説する。	
	外国事情B (欧米)	各国の祝祭や年中行事、またこれらと関連する伝統芸能は、時代や地域に対応するように少しずつ形を変えながら現在に至っている。これらが他国へと渡り、新たな意味を付与されることも少なくない。本授業では、ドイツ、スイス、オーストリアを中心に、欧米諸国の祝祭や年中行事、伝統芸能の変遷と現在の在り方、現代的な意義について考察する。歴史、移民、家族、美術、音楽、映画などをキーワードとして欧米諸国の現在を多角的に検討する視点を養うことを目的とする。	
	現代政治A	政治というと、「国会」や「選挙」などを思い浮かべるかもしれない。しかし、政治の意味はそれだけではない。本講義では、政治を「社会における諸権力・諸団体のあいだの対立や利害関係」と捉え、日本だけでなく国際社会において、どのような問題を巡ってどのような政治が展開されているかを概観する。具体的には、民族、人種、老人、女性、子ども、セクシュアルマイノリティ、障害といったマイノリティに向けられた差別に対して、世界の人々はどう闘っているのかを、様々な文献の購読を通じて考察する。	
	現代政治B	政治というと、「国会」や「選挙」などを思い浮かべるかもしれない。しかし、政治の意味はそれだけではない。本講義では、政治を「社会における諸権力・諸団体のあいだの対立や利害関係」と捉え、日本だけでなく国際社会において、どのような問題を巡ってどのような政治が展開されているかを概観する。具体的には、日本や国際社会でどのような環境問題、貧困、紛争が起こっているのか、どこの誰がそうした問題に関わっているのか、犠牲になるのはだれか、その根絶のために私たちは何ができるか等について、グループワークや発表を通じて考える。	
	国際関係論A	国際関係論は、国際社会における国家や人々の集団・組織の相互関係を分析する学問である。その主な対象は、「戦争・紛争」であり続けてきた。既存の国際関係論では、「戦争・紛争」や「安全保障」とは、「男性が行うもの」と想定され、女性は不在であった。今日でも「戦う」ことや「守る」ことは「男らしさ」と結びつけられている。そこで本講義では、戦争・紛争あるいは大規模な暴力を中心テーマに据えながら、「男らしさ」「女らしさ」が、いかにして戦争・紛争を成り立たせているか、そのことは私たちの身近な社会生活とどのように結びついているかをみていく。そして誰もが平和に暮らせる社会を作るためにはどうすればよいかを考えていく。本授業では「理論・事象編」として、ジェンダーの視点から戦争・紛争・暴力を捉えた時に何が見えてくるかを、ドキュメンタリー映像等を用いながら考えていく。	
	国際関係論B	国際関係論は、国際社会における国家や人々の集団・組織の相互関係を分析する学問である。その主な対象は、「戦争・紛争」であり続けてきた。既存の国際関係論では、「戦争・紛争」や「安全保障」とは、「男性が行うもの」と想定され、女性は不在であった。今日でも「戦う」ことや「守る」ことは「男らしさ」と結びつけられている。そこで本講義では、戦争・紛争あるいは大規模な暴力を中心テーマに据えながら、「男らしさ」「女らしさ」が、いかにして戦争・紛争を成り立たせているか、そのことは私たちの身近な社会生活とどのように結びついているかをみていく。そして誰もが平和に暮らせる社会を作るためにはどうすればよいかを考えていく。本授業では「解決編」として、今日の戦争・紛争や大規模な暴力を解決するためにどのような取り組みがなされてきたのか、また解決には何が必要かをジェンダーの視点から考えていく。授業では、アニメーション映像を用いたり、グループワーク・発表を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 現代社会課題解決科目群	現代社会と平和	<p>(概要) 平和学とは、単に戦争のない世界をつくり出そうとするだけでなく、人々の自己実現の機会を阻む社会構造の中に「暴力」を見いだし、暴力の内包された社会の変革を目標とする価値志向/価値実現型の学問領域である。本講義では、核軍拡競争や戦争の発生要因を明らかにするだけでなく、不平等や経済的不公平、社会的不正(貧困・差別)など広範な課題を扱う。特に、社会において最も立場の弱い存在、社会構造によって抑圧されている人々、戦争被害者の視点に立って、国際社会の諸問題を解説する力を養い、その解決への展望を模索することを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(45 毛利 聡子/3回) 平和学とは何か。構造的暴力・直接的暴力と平和について解説する。</p> <p>(22 加藤 めぐみ/4回) 太平洋戦争時の日系強制収容、日本軍による英連邦兵士戦争捕虜、文学と戦争について解説する。</p> <p>(26 熊本 博之/4回) 沖縄の米軍基地問題及び地方自治のゆくえについて解説する。</p> <p>(56 竹峰 誠一郎/4回) 平和を学び築く戦争遺跡・平和博物館、核エネルギーと平和、日本国憲法と平和について解説する。</p>	オムニバス方式
	法学A	<p>法(律)は我々が社会生活を送る上で基本となる重要なルールである。そこで本講義科目の第一目標は、どのような法(律)分野があり、それらの基礎知識及びそれらがどのように我々の生活に関わっているのかを学びその役割を理解することとする。さらなる追加の目標としては、権利と義務の関係や法解釈の方法等、いわゆる基礎法学や法的思考方法についても学んでいくものとする。そして、現代社会の問題を法的観点から自分なりに分析し、解決方法を述べる力を獲得することを目指す。</p>	
	法学B (日本国憲法)	<p>本授業は、最高法規である日本国憲法の基本原理を理解することを目標とする講義科目である。最初に憲法を理解するために憲法の内容、近代憲法の原則等の基本を論じる。次に、日本国憲法の原理及び構成を明らかにし、平和主義の理念、統治組織としての国会、内閣、裁判所の各々の性格と機能、人権保障の意義と種類等を学修する。そして、日本国憲法を巡る今日的諸課題について理解することを目標とする。なお、本授業の履修者は、予め「法学A」を履修していることが望ましい。</p>	
	社会に生きる私たちの人権A	<p>自分の思いを自由に表現し、学びたいことを学び、好きな人と結婚し、病気になったら医療を受けることができ、不当な差別を受けないこと。これらは私たちが人間らしく生きるために必要な権利だ。しかし、これを「あたりまえ」だといえるようになったのは70年ほど前のことにすぎない。世界人権宣言(1948年)は、はじめて全ての人間が生まれながらに基本的人権を持っていることを明らかにした。しかし、いまでも、自由や公正や命を脅かされている多くの人びとがいる。</p> <p>本講義では、人権が私たちの暮らしや社会とどのようにむすびついているのかを考えていく。人権概念がどのように形成され、それを具体化するために人びとがどのようにたたかってきたのか。現代社会の人権課題を具体的に検討することを通じて、私たち一人ひとりが享受している人権をさらに発展させ、次世代に引き継ぐ担い手であることを理解する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 現代社会課題解決科目群	社会に生きる私たちの人権B	<p>90年代以降のグローバル化の進展に伴い、日本社会の多文化・多民族化が進んできたことを身近に感じている人も多いただろう。日本で暮らす外国人は250万人を超え、海外で暮らす日本人も135万人と漸増し続けている。日本で暮らす外国人の8割強はアジア諸国の出身者だが、そうした人びとの存在は、かつて日本人がアジア諸国へ出かけていった結果でもある。</p> <p>グローバル化が進む中で「私たちの社会」を構成する私たちとは誰か。国籍、市民権、民族といった概念はどのように変化しようとしているのか。本講義では、人の国際移動を中心に、外国人労働者の権利、トランスナショナルなネットワークのもつ意味と可能性、国際結婚に伴う複数国籍者の存在と日本の国家像との折り合いのつけ方などを議論し、グローバル化の中で公正な社会を実現するためにどのような条件整備が求められているのかを考える。</p>	
	現代経済への視点A	<p>本講義では、近代経済学の一分野であるマイクロ経済学の前提となる、消費者と生産者の行動に関する仮定と結論を学んだ上で、現代経済で特徴的な財貨・サービスの生産と消費の傾向を分析する。消費者に関しては、標準的な選好順序に基づいて、無差別曲線と予算制約線から需要曲線を導出する。従来は例外的であると考えられてきた「右上がりの需要曲線」にも言及し、「ネットワーク外部性」との関連性を議論する。生産者に関しては、標準的な生産関数と線形の費用関数から、一般に「右上がり」となる供給曲線を導出する。そして、需要と供給の「価格調整」と「数量調整」の概念に基づいて、これらの調整が「安定」ないし「不安定」となるような、現代経済における財貨・サービスを考察する。</p>	
	現代経済への視点B	<p>本講義では、マイクロ経済学の消費理論と生産理論に基づいて、現代経済で特徴的な財貨・サービスの需要と供給を分析する。まず、インターネットに接続されたコンピュータのOSなど「ネットワーク外部性」を持つ財貨・サービスの特徴である「右上がりの部分を持つ」需要曲線を用いて、需要と供給の一致する価格と数量の可能性、さらに需給調整の安定性を、1財、そして組み合わせて使用する2財のケースに関して分析する。次に、発展途上国の労働条件改善のための社会運動に端を発する、「フェアトレード運動」の特徴を、マイクロ経済学の視点から分析する。発展途上国におけるコーヒー栽培を念頭に、生産関数と需要関数の形、さらには労働条件改善のために上乗せする「プレミアム」の金額に関して、「フェアトレード」製品の市場規模を拡大するための方策を議論する。</p>	
	グローバル時代の経営A	<p>本講義では、グローバル市場の展開の中での企業経営活動を学ぶ。企業経営活動は、利潤を生み商品やサービスを生産する。生産された財やサービスは市場を通して供給される。そのためには、人やモノやカネといった諸資源とその有効性や効率性を高めるための情報が必要となる。これらの資源もまた市場を通して獲得される。講義の中では、企業の特性や形態を理解した上で、今日のグローバル市場とそれらを取り巻く政治・経済・文化・社会環境及び自然環境の体系的な構造を捉えながら企業行動を学ぶ。講義の中では、企業の特性と形態、技術変化と企業行動の変化、グローバル市場・環境との体系的構造関係と企業経営活動を考察する。</p>	
	グローバル時代の経営B	<p>本講義では、企業の特性やグローバル市場下での企業経営の構造と体系的連関を理解した上で、情報技術・産業技術の変化、新興国の経済発展と市場競争の激化の中での企業経営を学ぶ。グローバル市場への広がりやME革命による情報・産業技術の展開は、企業経営活動において大きな変化をもたらしている。そこでは、多様性の受容と許容能力、スピーディーな対応力や柔軟性の創造が要求される。こうした状況下での企業戦略の視点に立って、金融資本市場・労働市場・材料資源市場・消費者市場の具体的な係わりや国際情勢の影響や変化について考える。講義の中では、特に労働市場に注目し、人的資源管理と働き方の変化や問題点を考察する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 現代社会課題解決科目群	ジェンダーを考えるA	ジェンダー論とは性別が自分の生き方にどのような影響を与えるかを考えること。たとえば「女性は家事育児を」という価値観は「男性は仕事を」という価値観の裏返し。男性が家族を養うことを当然だとする「男性稼ぎ手モデル」が人々の考えや様々な制度の前提となっているために男性を苦しめている面がある。過労死が最も多いのは中高年男性で、自殺率も男性の方が高い。仕事一筋に生きた結果、定年退職後は友だちもいないし趣味もないという男性も多い。この仕組みを男女双方が理解しないと、男女の不平等は解決に向かわない。 本講義では、ジェンダー論の基礎理論をおさえた上で、家庭、労働、教育の場面においてみられる身近なジェンダーの課題やバイアス（性別役割分担、男女の賃金格差、同性婚、性同一性障害等）について取り扱い、個々人の私的な世界と、それを取り巻く環境的制度的構造とを複合的に捉える視点を獲得する。	
	ジェンダーを考えるB	労働市場はグローバル化によって大きく変わった。非正規雇用の問題は女性だけでなく男性にも広がり「男性稼ぎ手モデル」はすでにその有効性を失っている。しかし、意識の変化は追いついていない。矛盾は家族、それも異なる文化背景をもつカップルがつくる国際結婚家族により強く現れる。違いは葛藤の原因になるが、それらを乗り越えることで新たな可能性を生み出すこともある。本講義では、身近なものになりつつある国際結婚に着目し、ジェンダー規範の変化について考えていく。	
	ボランティア論	他人のために自分は何ができるかと考えたことや、他人や社会に役立ちたいと思ったことはないだろうか。社会には援助が必要な人々や無償の労働が必要な分野がたくさん存在する。この授業科目では、自分のボランティア体験を振り返り、まず、ボランティアという言葉に対する自分のイメージを検証することから始める。そして、ボランティアとは何か、その活動分野、受ける側の考えとニーズの理解、必要な態度とルールの理解、歴史と基本的理念、市民参加の重要性、NPOとNGOを取り上げる。	
	生涯学習論A	生涯学習時代といわれて久しいが、この授業科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、生涯学習・生涯教育論の展開と学習の実際、生涯学習社会における家庭教育・学校教育・社会教育の役割と連携、生涯学習振興施策の立案と推進、教育の原理とわが国における社会教育の意義・発展・特質等を取り上げる。	
	生涯学習論B	この授業科目では、生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律・自治体行財政・施策、学校教育・家庭教育等との関連、並びに社会教育施設、専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本を解説する。具体的には、社会教育行政の意義・役割と一般行政との連携、自治体の行財政制度と教育関連法規、社会教育の内容・方法・形態（学習情報の提供と学習相談、評価を含む）、学習への支援と学習成果の評価と活用、社会教育施設・生涯学習関連施設の管理・運営と連携、社会教育指導者の役割を取り上げる。	
	情報社会文化論A	本講義では、文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から概観する。具体的には、情報の意味について理解することからはじめ、情報の量、遺伝子情報、人間の記憶能力、文明の発祥と文字の発明、粘土板・パピルス・紙といった記録媒体、社会的記憶装置である図書館などについて、古代からギリシア時代あたりまでを概括する。歴史の発展、文化・文明の展開を「情報」という視点から見る「情報史観」を導入する。	
	情報社会文化論B	本講義では、文字の発明からインターネットまで、人類社会が今日に至る文化・文明を築いてきた意味を「情報」という視点から概観する。具体的には、紙の発明は人類に何をもたらしたか、同様に、印刷術の普及はどうかであったか、また、レコードやフィルムといった音声・画像・映像などの情報メディアが社会や文化にどのような影響を及ぼし変革をもたらしたのかについて学ぶ。さらに、数表、計算する道具、電子計算機など、情報社会を形作ってきた事物・事象の生成・展開について、原動力となった要因を社会的・歴史的・文化的背景を踏まえて概説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 現代社会課題解決科目群	メディア論	本講義では、私たちの身の回りに存在しているさまざまなメディアを取り上げ、それらを歴史的かつ理論的に捉え直すことによって、現在のメディア文化に批判的なまなざしを向けることを目指す。イントロダクションでは、マーシャル・マクルーハンやヴァルター・ベンヤミンによる論考を読み、そもそもメディアとは何かについて考察する。私たちは、メディアを何らかの情報を媒介するだけの「透明なもの」として捉えてしまいがちだが、ここではそれぞれのメディアには「物質性」があり、それこそが私たちの知覚や考え方を規定していることを確認する。その後は、写真、テレビ、電話、等々のメディアについて個別に見ていくが、そこでもそれぞれのメディア技術の歴史的な成立過程やそれらについて論じた理論を確認することによって、私たちが自然なものとして受け入れているメディアの「透明性」の奥に「物質性」を探っていく。	
	図書館の基礎と展望	本講義では、図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図る。“知識”の社会的再配分装置である図書館について見識を深め、“西欧型民主主義社会の申し子”“情報社会のショーウィンドー”とも言われる図書館について深く考察し、現代社会を理解する一助とする。具体的には、図書館の現状と動向、図書館の構成要素と機能、図書館の社会的意義、知的自由と図書館、図書館略史、公共図書館の成立と展開、館種別図書館と利用者のニーズ、図書館職員の役割と資格、図書館の類縁機関・関係団体、図書館の課題と展望などを取り上げる。	
	情報法制論	本講義では、平成17年4月に完全施行された個人情報保護法をはじめ、情報公開法・著作権法など、情報をめぐる個人・法人の権利の保護に関する法律を中心に、その制定経緯から説き起こし、理論上・実務上の要点を解説する。特に、マスメディアや企業内で活躍する際に特に留意すべき法的争点を取り上げる。具体的には、法律学における「情報」、マスコミ倫理と法制度、「知る権利」、プライバシー保護、コンプライアンス、著作権の歴史、著作権法の基本概念、パブリシティの権利、不正競争防止法・企業秘密、工業所有権法の基礎、ビジネスモデル特許を取り上げる。	
	グローバル時代の英語	「言葉は文化である」と言われる。しかし、グローバル時代においてもことばと文化は一体なのか。本講義では、グローバル時代における英語という視点から、この問題を追究しながら、英語という言語文化に迫る。具体的にはまず、英語文化圏の生活文化を中心に探訪する。主要な民族言語として英語が話される地域の衣食住について学び、英語文化を理解する。次に、グローバル時代における異文化としての英語を探求し、英語圏以外の文化における言葉と文化の問題について日本語とも対照しながら身の回りの言語事実から言葉のおもしろみを発見し、グローバル時代の英語への誘いとする。	
	日本事情A	本講義は、原則として留学生を対象とした授業科目である。日本文化や大学生生活に必要なだと想定される一般的な事象について提示し、学生の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では日本の風土、芸術文化、娯楽、家族・人生観、大学生生活、衣食住文化等をテーマとして取り上げる。	
	日本事情B	本講義は、原則として留学生を対象とした授業科目である。日本文化や大学生生活に必要なだと想定される一般的な事象について提示し、学生の既成概念との違いを確認し、ディスカッションを行う。それらを通して、より専門的な言葉を理解しつつ、自分のまとまった意見が述べられるようにすることを目標とする。また、異なる文化・考え方を理解することで共生への方法を考える。講義では労働・産業構造、技術革新、教育、交通・物流、コンビニエンス・ストアなどの業態、コミュニケーションの様々な形態等をテーマとして取り上げる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 人文知探究科目群	哲学A	哲学は、時代・地域に限定されない根源的な考察を展開する思考の営みである。そのために哲学は、人間の知的・文化的活動にかかわる広範囲な分野に繋がっている。本講義では、文学や芸術、宗教などを素材としながら、哲学という思考の大筋を理解できるようにしたい。「哲学とは何か」という基本的な問題から始まって、哲学において用いられる術語や概念などに馴れ親しむことができるように、原典の解説などを含めて、哲学の基本的な考え方を紹介する。	
	哲学B	「他者」とは何か。他人が気にならない人はいない。我々が日常味わうストレスは、詰まるところ他人との関係に起因している。また、時に我々は、誰も見ていないのに誰かに見られているという思いにとりつかれる。このどこからやってくるのか分からない「視線」は、高ずれば人の神経・精神を侵すに至る。「他人・他者」とは、我々の生き方に根底において関わってくる何ものかである。本講義では、この問題について、主にフロイトとラカンの精神分析的な立場から、幾人かの哲学者・文学者の観点について検討する。	
	倫理学A	本講義では、現代倫理学を扱う。現代の倫理的なテーマという観点から勉強していきたい。リバタリアニズムや功利主義などの現代的な倫理思想を主に取り上げる。また、カントやプラトンなどの思想も、現代的な観点から取り上げたい。今日を代表する政治思想並びに倫理学の教科書であるマイケル・サンデルの著書『これから正義の話をしよう』で取り上げられた倫理学上のテーマを多く扱っていきたい。個人の生き方並びに公共善の問題が、現代においては、どのように議論されているか。現実の生き方や社会の在り方に根差した倫理学を学修する。	
	倫理学B	倫理学の歴史が本講義の主要テーマである。プラトンやアリストテレスに始まり、ニーチェに至るまでの西洋倫理学の歴史をここでは総括する。古来より現代にいたるまで、善とは何か、倫理規則の根拠付けはどうすべきか、個人の生き方や公共の在り方などは、倫理学の中心的なテーマである。しばしば、個人の幸福の追求と公共善が対立することがある。この対立をどのように、歴史上の倫理学者は、解消しようとしてきたか。ある倫理学者は、個人の善を重視し、別の倫理学者は、公共善を重視した。その足跡を辿り、現代の倫理学上の問題を考えるための土台とする。	
	宗教学A	本講義は、現代社会に生きるものとして必要不可欠な基本知識の一つとしての「宗教」を取り上げ、その起源・歴史的展開を追いながら、人間や社会に対する洞察を深めることを目的とするものである。そのため、(1) まず宗教現象の基本的知識を確認した後、(2) 創唱宗教(仏教・キリスト教・イスラーム等の世界宗教)を生んだ価値観の歴史的な大転換を確認し、(3) キリスト教と合理主義に支えられた西欧文明の世界化である近代、(4) そしてその近代の宗教に対する叛乱として現代に生じたカルトのありようを概観し、(5) グローバル化した現代社会における宗教のありようを考える、という仕方で、上記の教育目標を達成しようとするものである。	
	宗教学B	本講義では、西洋思想の中で「悪」がどのような問題として考えられてきたのか、とりわけキリスト教的文脈の中で、創造者としての神との関係において、悪はどのように位置付けられ、理解されてきたのか、主要な哲学者の見解を具体的に参照しながら、確認する。取り上げられる主なテキストは(1) 聖書、(2) アウグスティヌス(354-430)、(3) ライプニッツ(1646-1716)、(4) ヴォルテール(1694-1778)などである。悪についての認識を深めることで、人間を考え、現代社会を生きるための基本的知識を身に付けることを本講義の目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 人文知探究科目群	イスラームの歴史と文化	<p>本授業では、中世（7世紀頃）から現代（21世紀）までのイスラーム世界の歴史と文化について講義する。まずは、イスラーム成立の歴史を辿り、さらにはイスラームの特徴について解説する。次に、中世におけるイスラーム世界の拡大とそれにとまなうヨーロッパ勢力との対立あるいは対話（十字軍やレコンキスタ）の状況について解説し、また当時のイスラーム世界がいかに物的にも知的にも豊かな地域であったのかについても説明する。近世から近代に関しては、オスマン帝国台頭から衰退までの歴史を、ヨーロッパ世界の動向に触れつつ説明し、さらに第一次、第二次世界大戦とアラビア諸国との関連についても解説する。最後に、現代における中東問題についても触れる。</p>	
	考古学A	<p>本講義では、考古学の基本概念と方法を学び、日本の先史文化（旧石器、縄文、弥生）を題材として、人間の文化の消長と諸相について考える。また、環境と人間生活の関係性及びその変遷について認識し、マクロな視点から地球環境と人間存在の意義を学ぶ。さらに、歴史の分析を通じて人間の本性と進化について考察すると同時に、過去を糧として人類の現在と将来について考察する。講義と共に、遺跡や遺物を映像によって視覚的に捉え、また実物に触れる機会をもつことで、その背後にある人間について実感の伴う学修をする。講義の中で受講者は多くの疑問に出会い、深く考察する事を求められるであろう。これらによって、自己の存在の位置付けを再認識する一助とし、また未来の生活指針を設計するための基本素材を提供することを目的とする。</p>	
	考古学B	<p>「考古学B」では、「考古学A」を踏まえ、日本と異なる地域、自然環境、人種、文化における人間の諸相を、オセアニアを舞台に概観する。異なる文化を比較する事で、人類の本質的な共通性と差異を認識し、その環境要因及び社会背景について考察する。また、イースター島の歴史を概観し、文化の発達と衰退、人類と自然環境との関係性の変遷について学び、これらを材料として人種を越えた人類の本性、長所や短所などの実態を学修する。講義に際して、遺跡や遺物を映像によって視覚的に捉え、実物に触れる機会を提供することで、その背後にある人間について実感の伴う学修をする。講義の中で受講者は多くの設問を課され、深く考察する事を求められるであろう。これらによって、人類について地球規模で考察し、自己の存在の位置付けを再認識し、また未来の生活指針を設計するための基本素材を提供することを目的とする。</p>	
	日本史A（前近代）	<p>最近中学校・高校学校の歴史教育では、国際関係・国際交流が重視されるようになってきた。もう日本の歴史を、日本列島だけで考えることはできない状況になっている。この授業では「アジアの中の日本史」というテーマで、日本とそれを取り巻く国際社会について、縄文・弥生時代からはじめて、古代の日本・中国・朝鮮半島の関係、中世の日宋貿易・元寇・日明貿易、さらにヨーロッパとの関係からいわゆる鎖国まで通史的に考えることにする。到達目標としては、日本とそれを取り巻く国際社会について歴史的に理解できること、日本と東アジアとの関係について歴史的に説明できること、日本が今後目指すべき国際理解の方向性について考えることができること、である。授業は、講義形式で実施する。</p>	
	日本史B（近代）	<p>この授業では、「日本史A（前近代）」をうける形で、明治期以降の日本の対東アジア外交史を扱う。まず、伝統的な東アジア朝貢貿易システムを西洋型の万国公法体制に転換させようとする明治政府の基本的な外交方針を確認し、その具体的発現形態としての対朝鮮、対中国外交を概観する。それを通して、近代日本が帝国主義時代を帝国主義国として生き抜くことを決断した時点で不可避的に東アジアへの抑圧を伴わざるをえなかったことを示し、未来の対東アジア関係について考えさせる契機とする。授業は、講義形式で実施する。</p>	
東アジアの歴史と文化A	<p>本授業は、東アジアにおける共通した漢字を軸に、その歴史を遡って文化理解を深め、そこから知識と知恵を得て、歴史研究・文化研究の基本的な方法を身に付けることを目標とする。まず、漢字の起源を甲骨文字まで遡り、次に「六書（りくしょ）」という漢字の構造、秦の始皇帝による漢字統一や書体の変遷を、また墨や紙等の漢字の書写道具と材料の変化を明らかにし、さらに書道の誕生及び印刷術にまで広げて概説し、漢字の発展が東アジアの歴史と文化に如何に影響を与えたのかを考察する。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 人文知探究科目群	東アジアの歴史と文化B	本授業は、東アジアにおける共通した漢字を軸に、その歴史を遡って文化理解を深め、そこから知識と知恵を得て、歴史研究・文化研究の基本的な方法を身に付けることを目標とする。横文字の世界に対して、こうした遠く離れていない共通で相違の漢字文化は東アジアをつなぐ一つの絆になった。本講義では、西夏文字等漢字の派生文字の歴史、日本文字における漢字の由来等を検討し、後の中国語圏における日本製漢字語彙の逆輸入という文化交流を紹介した上で、さらに具体例を取り上げ、各地域の漢字語彙について、その意味の文化的比較を行う。最後に漢字の未来を展望する。	
	西洋の歴史と文化A（古代・中世）	本講義では、古代（古代エジプトを含む）から中世（15世紀頃）までの西洋の歴史と文化を、歴史的に著名な人物や西洋史における重要なテーマを取り上げつつ解説していく。古代に関しては、アレクサンドロス大王を取り上げ、古代ギリシア文化の特徴や当時のユーラシア大陸における東西交流の状況などを解説する。ローマ時代に関しては、この時代特有の剣闘士競技を取り上げ、そこから見えてくるローマ帝国の特性について解説する。中世については、ローマ・カトリック教会の盛衰を辿るとともに、中世特有の世界観について解説し、また、英仏百年戦争を取り上げ、当時の王と貴族を中心とした封建社会の状況や中世の戦争のあり方などについて解説する。	
	西洋の歴史と文化B（近現代）	本講義では、近世（16世紀）から現代（21世紀）までの西洋の歴史と文化を、歴史的に著名な人物や世界史上で重要なテーマを取り上げつつ解説していく。近世については、まずコロンブスを取り上げ、大航海時代の歴史的背景とその歴史的意義について解説する。また、フランス革命についても取り上げ、近世の王政がどのようにして崩壊し、新たな体制が作り上げられていくのかについて説明する。近代に関しては「帝国主義」を取り上げ、欧米列強が世界に植民地を広げていく状況を説明し、さらにはそこから第一次、第二次世界大戦へとつながる過程について解説する。また現代については、戦後のアメリカとロシア（ソ連）に注目し、冷戦の展開及び終結について解説する。	
	地理学で知る人間と社会	人間生活は地球上で成り立っている。本講義は、人間が生きていくために行う営みや人間が作り出した社会を構造的に理解することを目的とする。人間が生きていくために行う営みとは、農業や工業などの生産活動（つくる）であり、それらを輸送（はこぶ）すること、消費（つかう・たべる）ことである。我々は、これらの活動を行う舞台としての空間や、仕組みとしての社会に囲まれて生きている。世界各地で繰り広げられる人間の生活は、それぞれの地域特性に応じて多様である。この授業を通じて、学生に知識を増やすばかりでなく、世界に目を向けさせる。	
	教育学A	「教育学A・B」では、①教育の歴史的展開を理解すること、②法規的・制度的に理解すること、③行政的に理解すること、④教育思想的に理解すること、⑤社会問題的に理解すること、以上5点を教育目標とする。本講義では、教育の本質からはじめ、人間の成長・発達の特異性と教育の必要性と可能性から教育の意義について理解した上で、西洋における教育の変遷をたどりながら、J・ロック、J.-J.ルソー、J・デューイなど時々の優れた教育思想家の教育の考え方に耳を傾け、学んで、山積する教育問題について確かな問題認識をもち、問題の解決に向けて自らの考えを形成することを達成目標とする。	
	教育学B	「教育学A・B」では、①教育の歴史的展開を理解すること、②法規的・制度的に理解すること、③行政的に理解すること、④教育思想的に理解すること、⑤社会問題的に理解すること、以上5点を教育目標とする。本講義では、日本における教育実践の歴史的積み重ねに学び、あるいは反省的な振り返りを土台に、現代の教育課題を、憲法、教育基本法、学校教育法、さらには教育課程編成の国家基準としての学習指導要領の改訂の後をたどり、今日これからの教育に何が求められているかについての確かな問題認識を手に入れ、現代の教育課題解決に向け、日々の取り組みの構えを整えることを達成目標とする。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 人文知探究科目群	民俗学A	日本民俗学は近代日本の学問の中においては西欧化の輸入ではない日本独自のものとして形成されてきた点で特異である。それは何よりも近代日本におけるアイデンティティの問い直しであった。本授業では、その学問形成歴史を踏まえながら、日本民俗学が関心を寄せてきた日本の生活文化について講義をおこなう。生活文化を考える際には社会（人間関係）の分析が重要であることを認識したい。沖縄文化の解説をおこないながら学生には自分たちの周囲の生活文化を考えていくきっかけを与えたい。	
	民俗学B	柳田國男によって創始された日本民俗学は、何よりも現実を直視することであった。身の回りの常識を疑い、その意味を探ることにその本質はあったともいえる。本授業は、そのような日本民俗学の成果を踏まえながら、我々の生活文化の再検討をおこなうことを目標とする。親子関係、婚姻関係、ジェンダーとセクシュアリティ、老い、生活革命、年中行事の変化、伝統文化の作られ方などが問題となるであろう。近年の日本民俗学の新しい展開を踏まえながら、これらの問題について概説をおこなう。学生は関心に合わせて身の回りの生活文化に関するレポートを作成する。	
	文化人類学A	異文化理解の学問として始まった文化人類学の概要を学説史をたどることによって理解する。文化人類学の特徴は西欧にとって異質な社会を対象とした研究だけではなく、人間の全活動を文化として総体的に理解しようとしたことにある。本授業では、そのような文化人類学の考え方を、啓蒙期から進化主義の人類学、機能主義人類学、構造主義人類学、象徴主義人類学、解釈人類学とたどっていくことで明らかにする。現代の社会における文化人類学の果たすべき役割も重要なテーマである。	
	文化人類学B	本授業では、「文化人類学A」で学んだ基本的な考え方をふまえて、文化人類学が扱う個別のテーマについて考察する。扱われる問題は、家族と親族、結婚、ジェンダー、宗教、ナショナリズム、グローバリズムなど多岐にわたるが、そのうちのいくつかが選ばれ解説され、学生自身の問題として討論されることになるだろう。身近な問題を通して世界をどう捉えることができるかを学生に認識させることが目標となる。自身が社会や世界とどのようにつながっているかを考えることにより、自身への理解が深まることを期待している。	
	美術を読み解く	人が何を美しいと思うかは、必ずしも一様ではない。ことに風土や生活習慣や宗教の異なる西洋と東洋、昔と現代では、違う場合もあれば、意外なところで共通する場合もある。本講義は、「幅広い教養」の「人文知探究科目群」に位置付けられ、西洋と、それとは異なる東洋や日本の美に対する感じ方を、具体と抽象・模倣や保存・色彩表現やパロディなど、1時間に1テーマずつ取り上げ、そこから様々な美の見方を考えることを目標とする。	
	図像学A	美術作品といわれるものの中でも、文化や宗教の違う国の作品や、日本でも古い時代の作品には、予備知識なしに見ただけでは理解できないものもある。そこで本講義では、西洋・東洋の宗教絵画・物語絵画の意味を、ギリシャ神話・聖書・仏伝・日本の伝説や物語などを通じて学ぶ。その姿や場面の意味するものや、物語の内容を知ることによって、個々の絵画を理解するのみならず、各国の物語や神話を比較しつつ鑑賞することにより、多様な文化への興味を深めることも期待される。	
	図像学B	図像学は本来、絵画・彫刻等の美術表現の表す意味やその由来などについての研究する学問であるが、本講義では日常に潜む図像として記号論より始めるとする。個人の属する団体や社会においてその成員ならば了解可能なコードを操って情報のやりとりをする点で図像は記号の一つであると考えられる。記号の仕組みを学び、図像から象徴まで、我々の身近にある表現の意味内容を探り、文化の意味を知る。それが本講義の目標である。それはいいかえれば、コミュニケーションの根幹となっている記号の役割を理解し、社会システム的一端を理解できるようになることである。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 人文知探究科目群	美学A	<p>文字通り美を扱うものとしての美学という学問領域は、今日、哲学や倫理学と並んで人文諸科学の中に確かな地位を占めている。美学は芸術作品等に関する美的な経験についての思弁としておおよそ理解され、かつそうした位置付けは自明なものとなっている。</p> <p>しかし西洋哲学史を振り返ると、そうした「美学」の定義、そして自明性自体、きわめて歴史的な産物であることが浮かび上がってくる。美とは、ある時はアイデアであり、ある時は概念化を拒む一回的な経験であり、ある時は神秘的なものであり、ある時はある種の完全性の把握であり、ある時は、合理的なものとは非合理的なものとの間に位置する何ものかである。本講義では、美をめぐる思想の分水嶺、歴史的転換点を西洋哲学史のうちに辿っていく。</p>	
	美学B	<p>本講義では、美や芸術に関わる重要な概念、主題、思想を取り上げ、具体例を交えながら解説する。「作品」や「表現」など、日常的に用いられる言葉が、美学・芸術学のなかではどのように理解され、またその理解にどのような変遷と揺らぎがあるかを解説する。そのために、伝統的な美や芸術のみならず、革新の著しい現代の美や芸術に関わる諸問題も取り上げたい。そして、古今東西の美や芸術の諸現象について全般的な理解を深めていくことで、私たちが生きる現代の感性とは何かを探ることを目標とする。</p>	
	音楽といきる	<p>現代の10代・20代は、生まれてからそれぞれに音楽を消費し続けているにもかかわらず、音楽文化の間口の広さ・奥行きにはほとんど気づいていないかに見える。本講義は、音楽全般についての視野を広げ、歴史的文化的背景の中で音楽のジャンルやスタイルを捉え、従前とは異なった意識をもって音楽にアプローチする態度を養うことを目的とする。</p> <p>学生自身の体験に根差して視野を広げていくために、(1) 声の音楽：声の使い方の多様性に焦点を当てた音楽探訪、(2) 楽器の音楽：風土に根ざしながらも共通の発想のもとに伝播する楽器に焦点を当てた音楽探訪、(3) 身近に親しんでいる音楽の中にある多様な音階とリズムの発見、(4) 音楽文化の担い手たち：職業的・非職業的担い手の存在などを題材のまとまりとして扱う。可能な限り、実技を交えながら講義を進める。</p>	
	舞台芸術を読み解く	<p>シェイクスピアの戯曲には様々な人間が登場する。中でも重要な存在の一つが「悪人」だ。嫉妬や野心から陰謀を巡らし、周囲の人間を貶める彼らは、誰よりも「個人」であり、また人間観察や洞察にも長けた存在だ。なぜなら、彼らの目的は自分自身のためのものであり、その成就のためには、人間に関する知識が必要不可欠だからである。本講義では、シェイクスピアの戯曲におけるこうしたアンチ・ヒーロー（リチャード3世、イアーゴ、マクベスなど）に着目する。作中での人間関係や歴史的背景等と関連付けながら、彼らの言動や言葉を丁寧に読み解くことを通じて、単純な善悪の図式で捉えるのではなく、彼らもまた「人間」であることを明らかにしたい。また、ドイツの作家フリードリヒ・シラーの『群盗』におけるフランツ・モーアとの比較を通じて、シェイクスピアの生み出した悪人像の後世への影響や受容にも触れたい。</p>	
	日本の芸能A	<p>本講義は、日本の芸能のうち、立花について探究することを目的とする。室町時代に様式が確立した立花は、室内芸能として茶・香とともに隆盛した。現在の「生け花」の源流である立花は、依代・仏前供花・室礼などの要素が絡みあって成立した様式のため、立花を通じて室町時代の文化を学ぶことにつながる。立花に親しむことによって、他の日本の伝統芸能である能楽や茶、香などへの関心を高めることにもつなげていく。音源資料や映像資料も用いて、立花を中心とした室町文化の知識を得る。広い視点から、立花を日本の伝統文化の中に位置付ける。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 人文知探究科目群	日本の芸能B	本講義は「俊寛」を扱う文芸を取りあげる。鹿ヶ谷の事件を起こした僧・俊寛は、『平家物語』で描かれて以降、能・歌舞伎・浄瑠璃といった古典芸能だけでなく、物語や歌謡・俳句・小説などの様々な文芸で扱われてきた人物である。講義では、『平家物語』などの古文と古典芸能を踏まえた上で、それぞれの諸本・台本の精読と分析を行うことを目的とする。音源資料や映像資料も用いて俊寛の描かれ方を考察していくことで、学生には、中世から近代までの幅広い時代の文芸に親しみ、広い視点に立つて精察できることが期待される。	
	言語学A	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学をはじめ、あらゆる学問分野を通して考える。特に、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来・構造とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。本授業では、言語学とは何か、音声学(母音・子音)、音韻論、音節構造、形態論、言語の種類、語彙と文法、統語論、ジャンル分析等について講義を行う。	
	言語学B	「言語学」は、人間性を代表する人間の機能について、生物学をはじめ、あらゆる学問分野を通して考える。特に、大学人として言語の使用は不可欠である。ただ、その由来・構造とその使用の表象についてあまり意識がない。これらを理解することで、言語の可能性と限界を発見しながら、自分の使用を再確認し、他者の使用について態度を寛容にする。本授業では、語彙の意味論、意味と比喩、言語変種、言語の変化、言語獲得論、言語教育の前提、言語能力の評価、言語と人間性等について講義する。	
	世界のことばと文化を知る	<p>(概要) 本講義では、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語のことばと文化について学修する。各言語の単語や簡単なフレーズ、文法などを紹介し、各言語の特徴を解説し、またその特徴がどのような文化的、歴史的背景から生まれたのかについて解説する。いくつかの授業内では、ことばと文化に関わる共通テーマを設定し、各言語担当の教員間で議論を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(43 深澤 清/3回) 英語の簡単なフレーズを紹介し、英語の特徴とそれが生まれた文化的背景について解説する。</p> <p>(39 林 伸一郎/3回) フランス語特有の表現方法やその表現方法が生まれた文化的背景について解説する。</p> <p>(59 鶴田 涼子/3回) 日本で馴染みのあるドイツ語を紹介し、ドイツ語の特徴とドイツ文化について解説する。</p> <p>(47 吉川 榮一/3回) 日本で知られる中国の故事やことわざについて解説し、中国文化の特徴を説明する。</p> <p>(24 金 庚芬/3回) 広告やメディアでよく使われる韓国語を入り口として、韓国語と韓国文化の特徴を解説する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 幅広い教養 人文知探究科目群	外国の文学A（アジア）	優れた文学作品には国や時代を超えた普遍性があるものの、やはりその文学作品を生み出した社会や時代や風土との密接なつながりを否定することはできない。この講義では、日本以外のアジアに生まれ育った文学者の作品を深く分析し、日本文学との共通性と異質性を探ったり、作品と生み出した社会的背景についての理解を深めたり、比較文学的視点から比較検討したりといった具合に、多様な視点から文学作品を吟味していきたいと考えている。なお、本講義は特定の外国語修得を前提としてはいない。アジアの諸言語を学んでいない学生でも、十分理解できるよう配慮して講義を進める。	
	外国の文学B（欧米）	本授業では、欧米の民話を中心に紹介する中で、各民話の固有性に着目し、民話の背景を考察する。その際、民話と文学作品の違いを説明するとともに民話に関する文芸理論について取り扱う。本授業の達成目標は、(1) ドイツを代表する民話集である『グリム童話集』（初版第1巻1812年）の出版背景を理解し、文学作品との差異を理解すること、(2) その特徴を踏まえたうえで民話について考察し、自分の考えを述べ、文章でまとめる力を養うことである。折に触れて原文を引き、民話特有の言い回しや常套句について解説を加える。	
	日本の文学A	最も好事家的な学問であると思われがちな文学を単なる教養ではなく、社会批評の学問として再認識する。「詩」や「物語」という概念を拡張し、社会の様々な物語の存在に気づくことが出来、かつそれらに批評的な視点を持つ方法を有する。本授業では、日本近代「文学」研究の誕生、作家論・「作家」をめぐる物語、作品論・研究としての文学、テキスト論・研究から再び批評へ、実証研究の意義・文学の基礎、読者論・様々なレベルの読者、サブカルチャーとメインカルチャー、「文学史」をめぐる物語等のテーマについて講義を行う。	
	日本の文学B	文学を読むことと文学を研究することは異なる。文学は、作品を読み、時代や文壇のことを調べ、作家の意図をさぐる単なる謎解きでもない。今や文学だって単なる好事家的な営為とは違う段階に来ている。本講義では、文学史の再教育としてではなく、文学を研究する方法を講義することによって、単なる文化的教養ではなく、新たな思考法の獲得の機会とすることを旨とする。具体的には、文学を物語と考え、社会の多くの言説がその構造に支えられているということを知り、如何に物語に批評的な立場を取りうるかという方法の獲得を目指す。講義の具体的なテーマは、モダンとポストモダン、批評から研究へ等である。	
	哲学から考える人間	本講義では、精神分析の創始者フロイトによる『精神分析入門』の第1部「錯誤行為」と第2部「夢」を中心に扱う。フロイトの言う無意識というものが、人間の生活においてどのような意義をもっているか、フロイトの文章を丹念に読み、精神分析的「構造」を掘り下げながら検討する。神経症に対する臨床的な医療行為から始まった精神分析が、人間についての深い洞察に支えられた一つの優れた倫理思想であることを学生に理解させることを目的とする。	
	哲学から考える世界	哲学の歴史とは、それぞれの歴史的時代の具体的状況のうちで、人間が哲学的思索を行った足跡を示すものである。そこから、それぞれの時代が直面した課題、そうした課題に対する様々な対応を窺うことができる。それはもちろん特定の時代や地域に限定された問題でもありうるが、一方、そうした時間的、空間的制約を超えた、普遍的な問題を提示する場合も少なからず存在する。本講義では、今日の世界におけるさまざまな問題を、広く哲学的な観点から論じるべく、哲学史上登場する様々な思想家の残した思索の内容とそれらの動向を確認していく。	
	日本の歴史と文化A	本授業では、高校まで学んだ知識を再確認しながら、19世紀後半、すなわち幕末維新期以降の日本が歩んだ歴史を概観していく。特に、欧米諸国なみの近代国家建設を目指した日本が、いかなる葛藤や矛盾をみせながら、新たな社会を形成していったのか、政治経済面、対外問題、戦争を中心にいくつかの事例をとりあげて講義する。その上で、高校までに学んだ歴史の知識と、実際に語られる歴史の差異をいかに把握すべきか、解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
人文知探究科目群	日本の歴史と文化 B	高校までの日本史は、政治面を中心にしながら主に国家の歩みを教える内容といえる。その一方で歴史を形作るのは、いつの時代であろうと、人やモノの移動・交流がおりなした所産にほかならない。本授業では、そうした、高校までは詳しく教えられないことなかつた歴史のうち、世界規模での移動・交流が盛んになった近代の日本を舞台としながら講義していく。また、近代的価値観を求められた激変の時代のなかで、人びとはいかなる価値観をいだいていたのか、モノの交流がいかに社会を変貌させていったのかについても解説する。	
	表象文化論	「表象文化論」は、「表象」として現れる文化事象を、分析し、考察する学際的な学問の一分野であるが、本講義では、人がつくりだすもの—工業製品、広告、映像、建築、都市など—デザインの分野に特化して取り扱うこととする。19世紀の産業革命以降、世界は人工物で溢れた。それらが生活を支え、都市をつくり、文化を形作った。それが今日につながる。機械生産の大量生産により、国際的に均一化に向かっていとも考えられる現在。デザインの研究において「表象」という観点から、人間への理解を深めるのが本講義の目標である。	
	人類の社会と文化	本講義では、人間が生きることとは何なのか、死ぬとは何なのかという人間の生き方について文化人類学の成果に基づきながら考える。具体的な内容として、通過儀礼を辿りながら、人間が成長して大人になること、結婚や家族、様々な病気、死をどのように受け入れるか、死の儀礼、祖先を祀ることの意味などについて、主として東アジアの社会の比較を行う。様々な比較を通じて、学生は自分自身のもつ文化を相対化して考えることができるようになるであろう。	
全学共通科目	健康・スポーツ科学論	心<こころ>と体<からだ>の健康を維持することは、現代社会を生きる人々にとって豊かな生活基盤を築くために欠かせない現実的な目標であると同時に、重要な課題である。そのため本講義では、自らの心や体に関する知識の獲得、かかる思考力・判断力の涵養、健康的ライフスタイル創造への理解・計画など、これからの「生きていく力」を高めるための総合的な学力の獲得を目指す。具体的には、健康科学やスポーツ科学の見地に基づいた議論を展開し、必要に応じて担当教員の研究領域に関連した知見も活かしながら、健康を実践的に維持・向上させるための講義を展開する。	
	心と体の健康 健康・スポーツ実習 A	本実習では、身体運動の実践を通して思考力・判断力・コミュニケーション能力などを向上させることをねらいとする。学生は【種目 A 群】より科目を選択する。授業では、学生一人ひとりが自己の興味や能力に応じた課題を持ち、グループで協力し、目的によってはスポーツ実践や調査、測定、分析などを行ない、成果をレポートなどにより報告する。本実習を通して、健康で活動的な生活を送ることができるように、身体運動やスポーツ実践の意義や重要性について理解する。 【種目 A 群】 サッカー、ソフトボール、バドミントン、ボディワーク、水泳・スクーバダイビング、スポーツ吹き矢（特別種目）など	
	健康・スポーツ実習 B	本実習では、身体運動の実践を通して思考力・判断力・コミュニケーション能力などを向上させることをねらいとする。学生は【種目 B 群】より科目を選択する。授業では、学生一人ひとりが自己の興味や能力に応じた課題を持ち、グループで協力し、目的によってはスポーツ実践や調査、測定、分析などを行ない、成果をレポートなどにより報告する。本実習を通して、健康で活動的な生活を送ることができるように、身体運動やスポーツ実践の意義や重要性について理解する。 【種目 B 群】 ゴルフ、軟式野球、バレーボール、フットサル、剣道、コンディショニングエクササイズ・ジムナスティックエクササイズなど	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学共通科目	心と体の健康	現代スポーツ論	現代スポーツは、政治・経済・社会情勢と密接に関わりながら変化している。人々はメディアを通じて現代スポーツの華やかな表舞台を知っているが、その裏に様々な背景・思惑があるということにどれくらい自覚的だろうか。このような現実を理解するために、本講義では、現代スポーツの機能・役割を理解すること、そして現代スポーツに関連して語られる「国際貢献」「女性スポーツ」「パラスポーツ」「トップアスリート」「ボランティア」「文化・芸術」「産業化」「メガ・イベント」などのキーワードを取り上げて展開する。本講義を通じて、現代スポーツの現実・現状・実態を捉える力、また客観的且つ俯瞰的に考えることができる力の涵養を目指す。	
		食と健康	人体は約60兆個の細胞から成り立っていると言われていたが、その一つ一つの細胞のなか、そして細胞と細胞の連鎖のなかでは様々な化学反応が進行している。そうした化学反応の結果として我々は生命を維持しているわけだが、そうした細胞の活動を支えているのは、我々が毎日口に入れる食品にほかならない。しかしながら、多くの人は、自分の口に入れるモノに対してあまりにも無頓着である。摂取した食品は、生命維持活動に必要なエネルギーを生み出してくれるが、時には肉体や精神に良からぬ働きをする物質を作り出してしまうこともあるにもかかわらず、である。本講義では、若い世代の人々を念頭に置いて、食と健康の関係を具体的に解説し、学生諸君の健康増進のための指針を提示する。	
		心理学A	本授業では、われわれにとって一般的で基礎的な過程である、感覚・知覚、学習、認知、についての講義を行う。 心理学は、あいまいでとらえどころがないように感じられる「こころ」のはたらきを、客観的・科学的に解明しようとするものである。それを、こころや意識のような実体のないあいまいなものを研究対象にすることから、行動を対象にして実験や観察を行うことで、実現しようとしてきた。そこで、まず、心理学が、行動を対象とすることにどのような意味があるのか、を考える。そして、感覚・知覚、学習、認知の各分野について学ぶことで、心理学がこころをどのように考えているか、を理解することが、この授業の目的である。	
		心理学B	本授業では、発達、知能、性格、社会という、心理学の応用的な分野についての講義を行う。 これらの分野は、われわれにとって、基礎的な分野よりもなじみのある問題を対象にしている。だが、それだけ、さまざまな要因が入りくんだより複雑な状況や、個人差などを考えなければならない、難しい問題ともいえる。そのため、実験や観察だけでなく、調査や検査などの、より広範な研究方法も必要になる分野である。そこで、発達、性格、知能、社会の各分野が、それらの問題をどのように研究してきたか、さらには、一般的・常識的に信じられていることが、心理学ではどのように考えられているか、を理解することが、この授業の目的である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通キャリア形成科目	自立と体験 3 A (社会人としての基礎をつくる)	本授業は、社会人基礎力を身に付けることを目的とする講義科目である。社会人基礎力は、専門知識を活かして社会で活躍できる人になるために必要な力である。本授業の中では、学部学科横断クラスで実施し、チームでの演習を重ねながら、社会人基礎力を体験的に学ぶ。問題を発見し、解決策を構想し、自分の意見を伝え、チームで話し合いながら、様々な問題解決を体験することにより、問題解決能力・コミュニケーション力を身に付けることを目指す。	
	自立と体験 3 B (就業力を身につける)	本授業では、就職力を身に付けることを目的とする。就職力とは、これからの就職活動の前提となる意識とスキルである。本授業の中では、「自分」「社会」「仕事」という3つの観点で視野を広げ、チーム活動を通して深く考えることを学んでいく。また、自分を表現し、グループで話し合う体験を重ねながら、コミュニケーションを高めていく。ステップを踏んで一つずつ学びながら、自身のキャリアを自らつくる力を身に付けることを目指す。	
	ボランティア実践 A	ボランティア活動とは、自主性、無償性、公共性の3原則に加えて、創造性（開拓性・先駆性）が求められる実践活動である。本授業では、2年前期に行う実際のボランティア活動を通じて、社会に対して自分が出来ることを模索し、自分自身が新たに取るべき行動の目標を設定する力を身に付けさせ、自己実現に向けた貴重な社会的経験となることを目指す。具体的には、事前学習を2回行い、ボランティア活動を行う上で大切な心得（ボランティアとは何か、ボランティア活動のマナー、活動先との関わり方）などを学ぶ。第3回から第14回では、それぞれの活動先でボランティア活動を行い、第15回では事後学習としてボランティア活動報告会を行う。	
	ボランティア実践 B	本授業では、「ボランティア実践 A」と同様に、2年後期に行う実際のボランティア活動を通じて、社会に対して自分が出来ることを模索し、自分自身が新たに取るべき行動の目標を設定する力を身に付けさせ、自己実現に向けた貴重な社会的経験となることを目指す。具体的には、事前学習を2回行い、ボランティア活動を行う上で大切な心得（ボランティアとは何か、ボランティア活動のマナー、活動先との関わり方）などを学ぶ。第3回から第14回では、それぞれの活動先でボランティア活動を行い、第15回では事後学習としてボランティア活動報告会を行う。	
	キャリアデザイン A (理論で考える自己とキャリア)	本授業は、卒業後に社会人として活躍するための意識の醸成を目的とする講義科目である。キャリアデザインの理論学習に基づきキャリアに関する考え方を修得し、学生がキャリアの考え方を知り、自分に当てはめて活用できるようになることを目指す。また、学部学科横断クラスで実施し、知識や情報を基に個人ワーク、グループワーク等を通して勤労観、職業観を育成する。本授業を通して、学生がキャリアに関する考察を深化させ、他者に説明できるようになることを目指す。	
	キャリアデザイン B (生き方と法律・労働・お金)	本授業では、社会で直面する問題についてのケースワークを行い、チーム活動で多様な考えにふれ、勤労観、職業観を育成するとともに、社会に出て働く上での基本的知識の修得、現実的態度を身に付けることを目的とする。授業は、現在の社会問題（労働問題等）についてケースワークを行い、必要に応じてゲストスピーカーを招聘する。本授業を通して、職業労働に関する基本的知識を修得し、社会問題に対する当事者意識、現実的態度を身に付けることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要			
(建築学部建築学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	基 礎 科 目	<p>(概要) 建築学の専門分野は広範囲に及んでいる。各自が建築学の個々の領域について深く学び、研究を進めるにあたっては、学生各自の4年間の学びの展望を示唆することが必要である。本講義では、学生を10名以下のグループに分け、15名の専任教員の専門領域を毎回交替で解説することで、「建築学を学ぶ大学生としての自立」を促すことを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 村上 晶子/1回) 設計・意匠論について概説する。            (12 齊藤 哲也/1回) 建築史・建築再生論について概説する。            (7 西浦 定継/1回) 都市計画について概説する。            (3 伊藤 雅春/1回) コミュニティデザイン論について概説する。            (17 深井 祐紘/1回) 建築計画論について概説する。            (10 米田 正彦/1回) 建築設計方法について概説する。            (13 高橋 彰子/1回) 住宅論について概説する。            (2 年縄 巧/1回) 耐震工学について概説する。            (16 松尾 智恵/1回) 構造デザインについて概説する。            (11 小笠原 岳/1回) 環境設備について概説する。            (9 矢島 寿一/1回) 地盤工学について概説する。            (14 高橋 義考/1回) 構造解析について概説する。            (15 鱒沢 曜/1回) コンクリート工学について概説する。            (8 藤村 和正/1回) 水工水理学について概説する。            (5 鈴木 博之/1回) 鉄骨構造・橋梁について概説する。</p>	オムニバス方式
		<p>線形代数は、自然科学、社会科学の幅広い分野で応用されている数学の基礎である。建築分野においては、建築空間内の線形的表現、構造物の力学解析や温熱環境の空間解析、あるいは都市計画における社会調査のデータ処理などに必要とされる数学的知識である。本講義の目標は、建築学部の学生にとって重要である代数学の基礎として、ベクトル量、行列、逆行列の演算法、連立一次方程式の一般解について修得することである。授業形態は講義形式とする。</p>	
		<p>(概要) 本講義は、建築学における専門領域への導入教育の一つであり、社会での実務経験を有する教員が、ゲストスピーカーを招いて行う講義である。具体的には、実務経験を有する教員がゲストスピーカーを選定して対話形式で講義を行う。建築実務は、建築設計をはじめ、構造設備設計、施工、不動産、専門メーカー、各種デザイン分野、公務員など多岐に渡る。ここでは、建築学のさまざまな職業分野の実践を知り、将来の自己確立の方向について考えさせることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(6 武田 有左/10回)            建築の仕事のコラボレーションの実践紹介と組織事務所について解説した後、照明デザイン、ランドスケープデザイン、インテリアデザイン、組織設計事務所、構造設計、設備設計、交通系、官公庁、総合建設業に関わる実務家・専門家等をゲストスピーカーとして招聘し、対話形式で建築実務の実際について概観する。</p> <p>(4 大藪 元宏/5回)            建築家の仕事について概観した後、工務店、家具職人、不動産コンサルタント、ハウスメーカーで勤める専門家・企業人をゲストスピーカーとして招聘し、対話形式で各業種における実務の実際や今日的課題について概観する。</p>	オムニバス方式



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	基礎解析学	微分積分学は自然現象や社会現象などの変化を数式で記述し、解析する学問である。建築分野において、構造物の力学的解析や環境解析、空間的な温熱環境解析など、欠かすことができない数学的手法である。建築学部の学生にとって特に重要と考えられる初等関数の基本性質と微分・積分を中心に解析学の基礎を修得し、そして高校で学んだ微分積分の考え方を発展させ、極限の考え方を理解し、その考え方を生かして基礎的問題が解けることを目標とする。授業形態は講義形式とする。	
	基礎物理学	建築分野においては、構造分野における力学的な知識や環境・設備分野における伝熱工学的知識が要求されるため、専門科目の本格的な履修が始まる前に物理の基礎を修得しておく必要がある。本講義では、単位(MKS単位系)や力学の基礎(仕事、運動量)熱現象(温度・状態変化、比熱や熱容量)など、2年次以降の専門科目で必要となる物理の基礎について学修する。授業形態は講義形式とし、力学や熱現象における基礎的な知識を修得することを目標とする。	
	建築デザイン幾何学	本講義では、建築デザインに必須となる数理の理解と修得を目的とする。全体構成は、建築数理の基本(形と重心・体積・面積、三角関数、数列と階級—フィボナッチ数列と黄金比、確率と統計—帰分析・調和分析、対数—人の感覚と音のデシベル、+・×÷で解く微分方程式、行列で解くつるかめ算、数式と物理量と単位)、建築構造からみる数理—見えぬ力の流れを読み解く(部位にかかる力—圧縮と引張、部位の性能—曲げたわみと断面力学から建築へ)、デザインから見る数理—建築に隠された数理(建築の形と数理—古代ギリシャから現代までのシュムメトリアの流れ、建築の秩序のつくり方—座標、単位、部分と全体)と段階を追い、演習も交えて修得させる。	
学科科目	建築概論	1年生を対象として、大学での建築学の学びの概要を理解させ、建築学を社会的に理解させることを目的とする講義科目である。建築は広範囲で学際的な学問である。建築を学ぶ根拠について、歴史や社会背景、建築を構成する要素や成り立ち、環境、技術、デザイン、社会基盤等の概要を通して建築を総覧し建築を創り出す基礎を養う。また、建築がおかれている状況を理解することで、現代社会の都市環境問題を見据えた視野も広げていく。建築を学ぶということ、多様化する現代社会と建築、建築の設計・デザイン、建築の構工法、建築と法規、建築の施工、住宅とは、建築と環境、建築材料とエイジング、建築のコンテキストとプログラム、建築の公共性と建築家の職能などを概説する。学生にはその内容を要約する小レポートの作成を課す。	
	造形デザイン実習	本授業科目は、将来、建築に携わる者が備えるべき造形感覚や色彩感覚の基礎を学び、デザインの表現手法を身に付ける実習科目である。デッサンにより、対象物を注意深く観察し、表現する能力を養うとともに、色彩の基礎を学ぶ。抽象表現としての平面構成と立体構成の課題より、自ら構想したイメージを具現化し、第三者に伝えるための基礎を学ぶ。この過程において、建築模型に必要な各種素材の加工方法や特性について理解を深める。	共同
	建築基礎力学	本講義では、建築構造物の構造計算で基本となる力学の基礎を取り扱う。具体的には、力の作用と単位、力の三要素、力の種類、力の合成と分解(図式解法・数式解法)、偶力とモーメント、一般力の数式合成、力とモーメントのつり合い、構造物のモデル化(支点の種類と反力、節点の種類)、構造物の性質(安定と不安定、静定と不静定)、構造物の種類、静定ばり(単純ばり、片持ちばり)の反力計算の方法に関して詳述し、例題を用いて解き方を解説する。	
	西洋建築史	本講義では、西洋における歴史的建築物の基礎的知識の修得と、幅広い建築価値観に対する理解を深める。西洋に誕生した「建築」という文化を理解し、各時代、各地域の人々が、建築に何を求め、如何につくり、どのように関わってきたか、写真や図版をもとに概説する。古代エジプトから近現代までの建築の発生と発展の歴史的成立を追って、建築物の形式、技術の変遷をはじめ、各時代の建築を支えた社会的かつ文化的背景についても解説する。	
専門基幹科目			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 基 幹 科 目	建築基礎設計製図	本実習科目は、建築の図面表現を学ぶ基礎的な科目である。建築学は3次元の空間を扱い、その表現の媒体として、2次元の図面、模型、3次元CAD等を用いるが、初学者にとって最も基本となるのは、図面である。本授業科目の目的は、建築図面のルールを理解し、読みやすい図面を作成できるようになること、また、図面と立体空間の関係を読み取る能力を養うことである。さらには、建築計画における基本的な寸法の修得と、建築模型制作の基本を学ぶことである。	共同
	建築計画1	建築計画とは、設計の基礎となる人間の特性（人体、動作、行動、習慣等）と空間の関係について、設計以前に知ることである。多くの観察、調査、実験等により、多くの関係性が知られているが、設計機会の都度現れる新しい問題に対して、自らの観察、調査、実験で解明することの出来る力を養うことが望ましい。本講義では建築環境における人間と空間の関係について、基本的な原理について学修する（データとして、身体寸法とユニバーサルデザイン、パーソナルスペース、アフォーダンス、テリトリー、プライバシー、空間認知、動線、混み合いと空間規模等）。	
	建築法規	建築実務は常に法と背中合せであり、社会的に責任の生じる仕事である。本講義では、社会基盤である建築物が社会的に認められるために、法令順守の設計態度を自覚育成することを目的とする。全体の流れでは、建築士をはじめ建築関連分野の職業人として必要な法律条文・用語の理解と活用、建築実務の流れとして技術や経済以外の業務となる行政手続等の重要性を把握させる。これらの知識を活用し、建築法規に基づき安全かつ創造性豊かな建築設計を行うことの重要性を理解させる。	
	建築設計製図1	本実習では、「建築基礎設計製図」で修得したスキルを基に、小規模建築の基礎的な設計力を養う。第1課題では、身体的スケールの小空間を設計し、空間の快適性や楽しさについて考察する。第2課題では、別荘を設計し、住空間に求められる機能や寸法等の基礎的な事項を学ぶと同時に、周辺環境と住まいのあり方について考える。第3課題では、ギャラリー併設の都市住宅を設計し、生活に配慮した住環境や、都市部における周辺との関係について考える。また、全課題を通して、建築設計における計画、意匠、環境、構造の総合性に配慮したデザインを指導する。	共同
	建築構造力学	建築構造力学の基本である静定構造物の力学的性質について取り扱う。本講義では、反力と応力を求めるための力・モーメントのつり合い式の立て方、集中荷重・分布荷重を受ける片持ちばり・単純ばりの反力と応力、集中荷重・分布荷重を受ける門型静定ラーメンの反力と応力、3ヒンジラーメンの反力と応力、トラス構造の特徴と種類、節点法・切断法・図式解法（クレモナ法）による静定トラスの反力と応力に関して詳述し、例題を用いて解き方を解説する。	
	建築構造計画	本講義では、建築設計製図における住宅や公共施設等の建築を対象に、基本設計に必要な構造計画の基礎知識と一般的な計画方法を学ぶ。講義では、建物にはたらく力の理解を基礎に、建築条件・敷地条件の分析、構造種別と構造形式の特徴の把握と選定について学び、各構造の基本的な配置を行う能力と建築構造へのスケール感覚を養う。小演習も取り入れ構造計画を実践する。また、構造計画に関する技術と諸技術（構法、工法、環境・設備、コスト等）の関係をj知ることjで、建築設計の総合力を向上させることも目標の一つとなる。	
	建築環境学1	本学科に設置する建築設備・環境関連の科目群のうち、最初に履修する講義科目である。建築環境工学の目的は、望ましい室内環境を形成するための物理的・整理的・心理的な知見を整理し、建築計画に役立てることにある。本講義は初めて建築環境工学を学ぶ学生を対象に、日照・日射、光環境、色彩環境、空気環境、温熱環境、熱環境の基礎的な内容を網羅しており、2級建築士試験相当のレベル設定である。授業形態は講義形式とし、建築を構築する上で必要な環境工学的知識の基礎を身に付けることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 基 幹 科 目	建築設計製図 2	本実習では、「建築設計製図 1」で体得した基礎の上に、建物の具体的な設計力を養う。第1課題では、小さな美術館の空間を設計することで空間イメージの具体化とイメージの伝達を学ぶ。第2課題では、公共的空間を設計することで建築の社会における役割を考察する。具体的な設計を行うことで豊かな建築空間を創出する能力の獲得を目標とする。各課題では、類似施設のレファレンス・考察も行う。専任教員4名と非常勤4名で15名程度の人数に対する丁寧な個別エスキスを行う。	共同
	建築設備 1	建築基準法において、建築設備とは、建築物に設ける電気、ガス、給水、排水、換気、暖房、冷房、消火、排煙、汚物処理、昇降機、避雷針と定義される。本講義では、その中でもとりわけ重要である空気調和設備(空調機やヒートポンプの仕組み、熱負荷)、給排水設備(給水システム、太陽熱利用設備、衛生器具類)、消火設備(消火栓、スプリンクラ設備)、電気設備について、基礎知識の修得を目標とする。また、空気調和設備に関連して、人体の温冷感や体感指標についても学ぶ。授業形態は、講義形式とする。	
	建築環境計画	建築設計製図における住宅や公共施設等の建築を対象に、基本設計に必要な建築環境に関する計画技術の基礎を学ぶ。また、建築計画を考える上で重要な設備計画についても事例紹介をとおして基礎知識を得る。本講義では、建築を取り巻く、熱、空気、光、音等の環境テーマに対し、建築条件・敷地条件の調査分析を踏まえ、実践的基礎を学んでいく。また、建築環境計画に関する技術と諸技術(構造、構法、工法、緑化、コスト等)の関係をすることで、建築設計の総合力を向上させることも目標の一つとなる。講義には、一部アクティブラーニングを取り入れ建築環境計画を実践させる。なお、本講義は建築士試験の建築計画・環境設備計画に関する基礎知識の修得にも配慮される。	
	建築構法	建築構法とは、建築の全体あるいは部分の、性能の検討を踏まえた材料や部品の構成方法であり、建築が具体的にどのようなもので構成されるか、どのように作られるかを修得することであり、設計の段階で決定することである。構法とは建築のありようであり、建築工法は、建築工事のやりようである。建築構法には建物を支える構造を決める主体構法と壁や屋根などの構法を決める各部構法がある。主体構法の主要なものとしては木造、S造、RC造が挙げられる。本講義では、多種多様な建築の構造、構法の種類の把握と建築部位の構法について学ぶとともに、主要な仕上げ材による建物部位の構成方法(納まり)について理解することで、設計に活用することを目的とする。	
	建築設計製図 3	「建築設計製図 1」「建築設計製図 2」で学んだことを基礎に、より具体的で高度の課題に取り組み、設計製図能力の向上を目指す。「建築設計製図 1」「建築設計製図 2」では、単一用途の建築を設計することを学んだ。単一用途の建築が、群となり集合することで新たなメリット、デメリットが発生する。また、多用途の建築が群となり複合することもある。本実習では、「単一用途の集合」と「多用途との複合」という2つの課題を通して設計製図能力の向上を目指す。授業は、丁寧な個人エスキスを中心に行う。	共同
建築材料学	建物は様々な材料から構成されるが、各材料を適材適所に活かして使用するには、材料の特性を熟知していることが求められる。本講義では、材料の特性を表すために用いられる指標(比重、強度、ヤング係数、ポアソン比、線膨張係数など)を学んだ上で、構造体として主に使用される材料(木質系材料、鉄鋼材料、コンクリートなど)の特徴を学ぶ。実際の建物で、どのように製造され、どのように用いられるのか、そして、どのように壊れるのか、写真や動画を用いて示す。実務に携わった経験を生かし、設計する場合、どういふ点に留意すべきかという観点も取り入れる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 基 幹 科 目  学 科 科 目	建築施工管理	<p>建築施工管理とは、設計図書に従い建物を作るために、施工過程の各種工事を管理し、多業種の関係者と協力しながら施工業務を遂行することである。本講義では、建築施工に関する技術用語を理解し身に付けること、建築施工の流れを把握すること、各種施工方法の特徴を理解すること、品質管理の基本を理解し実践できるように知識を蓄えることを目的とする。建築士試験における必修科目でもあることも視野に入れて、確実に知識を体得させる。</p>	
	建築表現	<p>(概説) 本演習の目的は、「建築基礎設計製図」と並行して履修することで、総合的な建築設計意図の伝達方法を修得させることにある。学生には、アナログ表現（透視図法に代表される図学の基礎、写真表現、模型表現他）からデジタル表現まで多岐に渡る表現手法を修得させる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(6 武田 有左／5回) 建築の設計意図の伝達のための模型作成と加工方法の概説と事例の紹介後、建築模型の写真技法演習、写真加工ソフトを使用した演習、ベクタイメージ編集ソフトを使用したプレゼンテーション演習、模型写真と写真加工ソフトを使用した総合的な演習を行う。</p> <p>(10 米田 正彦／5回) 建築の設計意図の伝達のためのダイアグラムの概説と事例の紹介後、プログラム伝達のダイアグラム演習、建築計画のダイアグラム演習、調査分析のためのダイアグラム演習を行う。</p> <p>(4 大藪 元宏／5回) ・透視図の図学的原理概説と事例の紹介後、アクソメ・アイソメ、インテリアパース、外観パースに関する透視図作成の演習を行う。</p>	オムニバス方式
	建築基礎力学演習	<p>本演習では、建築構造物の構造計算で基本となる力学の基礎を取り扱う。座学である「建築基礎力学」の内容の理解をさらに深めるため、力の作用と単位、力の三要素、力の種類、力の合成と分解（図式解法・数式解法）、偶力とモーメント、一般力の数式合成、力のつり合い、構造物のモデル化（支点の種類と反力、節点の種類）、構造物の性質（安定と不安定、静定と不静定）、構造物の種類、静定ばり（単純ばり、片持ちばり）の反力計算に関する演習を行う。</p>	
	建築材料実験	<p>(概要) 本授業科目は、建築分野で扱ういくつかの材料を対象とし、基本的な特性である物理的性質について理解するための実験を行う。実験内容は大きくコンクリート、金属、地盤（土）の3種類に分けられる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(5 鈴木 博之・9 矢島 寿一・15 鱒沢 曜／2回) (共同) 実験時の安全性の確保のための安全教育について概説する。また、実験レポートを作成するための作文技術、実験データの記録方法について概説し演習を行う。</p> <p>(15 鱒沢 曜／4回) モルタルの強度試験や骨材のふるい分け試験等により、コンクリートの物理的性質及び構成材料の基本的な特性を理解する。</p> <p>(5 鈴木 博之／4回) 鋼材の引張試験等により、金属材料の基本的な特性および物理的性質を理解する。</p> <p>(9 矢島 寿一／4回) 密度試験、液・塑性限界試験等により、土の基本的な特性および物理的性質を理解する。</p> <p>(5 鈴木 博之・9 矢島 寿一・15 鱒沢 曜／1回) (共同) 本実験について学んだことについて振り返りの総合演習を行う。</p>	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	専 門 基 幹 科 目	日本建築史	日本における歴史的建築物の基礎的知識の修得と、日本の建築文化に対する理解を深める。「建築」という概念を確立した西洋の建築に対して、日本の建築とはいかなる相違点と固有性を持っているのか、原始から現代まで、海外からの宗教や技術の伝来期と国内における固有文化の熟成期など、日本建築の歴史的展開について概説する。さらに、四季の変化に富んだ島国として、また地震国として、厳しい環境条件に育まれた日本建築の形式や技術の変遷についても学ぶ。	
		建築CAD演習A	<p>(概要) 建築の実務分野で使用されているCADの概要とその基本的な使用法を講述し、ソフトウェアを使用する初歩的技術を修得することを目標とする。今日、建築製図の実務を行う上でCADは、必要不可欠の技術であり、2Dの図形および図面の作成から3Dのモデリング、レンダリング、アニメーションなど、そのソフトウェアの種類や技術は多岐にわたる。本演習では、その最初歩として、CADの概念から基本的な2Dの作図までを行うものである。最終的には基本的な図形、建築平面図立面図程度が描けることを到達目標とする。また、3次元CADの導入も行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(6 武田 有左・7 西浦 定継・14 高橋 義孝・17 深井 祐紘/1回) (共同) 建築の実務分野で使用されているCADの全体像の概説と事例を紹介する。</p> <p>(6 武田 有左・14 高橋 義孝/7回) (共同) 2次元CAD「Vectorworks」及び3次元CAD「SketchUp」を用いて、基本設定・操作方法から図形の作成、編集方法について演習形式で行い、学生は、様々な建築物の平面図・立面図の作成に取り組む。</p> <p>(7 西浦 定継・17 深井 祐紘/7回) (共同) 2次元CAD「AutoCAD (Autodesk)」を用いて、基本設定・操作方法から図形の作成、編集方法について演習形式で行い、学生は、様々な建築物の平面図・立面図の作成に取り組む。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
		建築構造実験	<p>(概要) 建築構造の基本である力のつり合い、部材の変形、材料特性などを理解するための実験を行う。実験内容は大きく一般構造、コンクリート構造、木構造の3種類に分けられる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(2 年縄 巧・5 鈴木 博之・15 鱒沢 曜/2回) (共同) 実験時の安全性の確保のための安全教育について概説する。また、実験データを処理するために関数電卓の使い方について概説し演習を行う。</p> <p>(5 鈴木 博之/4回) 紙を用いた鉛直力支持体の作成、テンセグリティの作成などを行い、建築一般構造の力学的性質を理解する。</p> <p>(15 鱒沢 曜/4回) 鉄筋コンクリート梁の作成と破壊実験などを行い、コンクリート構造の力学的性質を理解する。</p> <p>(2 年縄 巧/4回) 1/2耐力壁模型の作成と水平加力試験、1/10小屋組模型の作成と鉛直加力試験などを行い、木構造の力学的性質を理解する。</p> <p>(2 年縄 巧・5 鈴木 博之・15 鱒沢 曜/1回) (共同) 本実験について学んだことについて総合演習を行う。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
		建築CAD演習B	<p>建築の実務分野で使用されているCADは、建築表現のための道具に終わらず、設計の検討及び検証の在り方を高度化してくれる新たな道具である。「建築CAD演習B」では、CADを手描きでは得ることができない新たな可能性を設計者に与えてくれる道具であると位置付けることで、プログラミングを用いたパラメトリック設計の手法も含め、設計の深度を深め、完成度を高めるための思考ツールとしての利用法について、演習形式で実践的に学ぶ。</p>	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 目	専 門 基 幹 科 目	建築構造力学演習	本演習では、建築構造力学の基本である静定構造物の力学的性質について取り扱う。講義科目である「建築構造力学」の内容の理解をさらに深めるため、反力と応力を求めるための力・モーメントのつり合い式の立て方、集中荷重・分布荷重を受ける片持ちばり・単純ばりの反力と応力、集中荷重・分布荷重を受ける門型静定ラーメンの反力と応力、3ヒンジラーメンの反力と応力、トラス構造の特徴と種類、節点法・切断法・図式解法（クレモナ法）による静定トラスの反力と応力に関する演習を行う。	
		建築材料力学	本授業科目は、建築分野との関連性が高い材料力学の理論における基礎の修得を目的とする講義科目である。具体的には、建物に作用し得る様々な外力に対して、建物の構成部材に十分な強度と剛性を確保し、なおかつ経済的に設計するための力学的手法を学ぶ。 授業の主な構成は、(1)材料力学の基本：応力とひずみの関係、フックの法則と弾性係数、(2)断面の幾何学的性質：図心と断面一次モーメント、断面二次モーメントと断面係数、(3)部材に働く応力と変形：応力の種類（引張及び圧縮、せん断、曲げ）、応力分布、中立軸、部材の変形、はりのたわみ、許容応力度の概念とする。	
		建築診断・リフォーム	本講義の建築診断分野では、災害の多い現代社会において求められる診断方法について具体的に学ぶことで即戦力を養うことを目的とする。また、リフォーム分野では、住宅の変遷から現在の建物（主に住宅）が備えるべき性能を学び、これからの環境問題に対する社会情勢を踏まえたリフォームについて考える。さらに、リフォームの事例を交えて学ぶことにより、これからの建築業界においてますます増えることが予想される改修分野への興味を高めるとともに、自らの視点で改修の提案を考えるスキルを身に付けさせる。	
		施工実習	本実習は、建設業に関わる専門業者の仕事の体験を通して、建築の実践に興味を深めることが目的である。施工前の段取り、仕事の手順及び難しさ、完成したときの達成感などを体験するとともに、部材の種類と名称などを覚えることも重要である。具体的には、足場組立、鉄筋組立、型枠、塗装、タイル貼りなど多岐に亘る様々な施工を学生に経験させ、体得させる。本実習は、大学の地元である日野市商工会の方々にも協力を得て、産学連携で行う。	共同
		減災学	(概要) 災害の発生、その後の対応は、様々な要因に影響される。発生は主として自然条件、発生後の対応は人的条件によるところが大きい。同時に、その両方が複合して災害が拡大する場合もある。本講義では、災害の発生、その後の拡大要因に着目し、科学的視点から災害リスク及び損失を大幅に削減する方策を、多面的に講義する。  (オムニバス方式／全15回)  (2 年縄 巧／3回) 耐震工学の視点から、建築物の耐震性について講義する。  (9 矢島 寿一／3回) 地盤工学の視点から、斜面崩壊、地滑災害について講義する。  (8 藤村 和正／3回) 水文学の視点から、河川の氾濫リスク、洪水災害について講義する。  (15 鱒沢 曜／3回) 都市防災の観点から、建物や地域における災害対応力の向上方策について講義する。  (7 西浦 定継／3回) 都市・地域計画の視点から、災害リスクを考慮した都市計画マスタープランの策定内容について講義する。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 基 幹 科 目	木造建築	木構造は古くから存在し、時代を経て発展を遂げてきた。本講義では、その歴史を振り返りながら、現代の木構造の特徴、そして将来の木構造について考える。地震国である日本における耐震に対する考え方も修得する。木造建築の理解については、(1)木造住宅の構造の仕組みの理解・各部材の名称、役割についての基本的な理解、(2)鉛直荷重を支える仕組み(力の流れ)の理解—屋根や床の荷重：梁→柱→基礎→地面への伝達、(3)水平荷重を支える仕組みの理解、(4)構造計画のポイント、など順を追って修得させる。これらの基本を理解した上で実物を見渡し木造の古建築(寺院、塔、書院、茶室、数寄屋等)から現代の木造事例も紹介し解説する。また、日本の伝統的な技術を知ることの一環として、木造仕口の紹介も行う。	
	B I M演習	今日の建築設計の現場では、BIM (Building Information Modeling) についての的確な知識を持ち合わせる事が求められる。「B I M演習」では、BIMの基本概念の学修から3次元設計に至るまで、実際にソフトの操作を通じて、実践的にBIMの利用方法を学修する。特に、建築生産現場でのBIMの普及の実態を踏まえ、設計計画の川上の基本計画段階から基本、実施設計、生産設計、メンテナンスに至る建築の一生の諸段階に即して、総合的な実践力を養う演習を行う。	共同
	測量学	測量とは、地球表面上の土地を中心とする自然及び人工物体について、空間における位置関係を求めることである。測量技術は、都市計画や地域計画において対象地域の調査や設定、そして、計画地における建築物の施工に際し、建物位置の設定、構造部材の配置、高さの決定などに必須である。測定する要素は主として距離、角度、高さである。本講義では、地球表面を曲面として扱う測地学的測量と平面として扱う工事用測量である距離測量、水準測量、各測量、トラバース測量、平板測量について修得すること、また、近年、飛躍的進歩に進歩した測量技術に関して、空中写真測量やGNSS測量などを理解することを目標とする。授業形態は、講義形式とする。	
	測量学実習	測量において信頼性の高い結果を得るためには、観測値に含まれる誤差をいかに適切に処理するかが課題である。そのためには、測量機器の操作の習熟が必要である。本実習では、測量機器を操作し、実測することにより、測量の基本技術を体得することを目標とする。具体的な内容として、大学構内あるいは学外の敷地、施設を利用し、距離測量、水準測量、平板測量、トラバース測量を実施し、観測値の誤差処理計算を行うとともに、図面の作成を行う。授業形態は実習形式とする。	
	ランドスケープ	ランドスケープ (landscape) は、景色や眺望などを意味し、時に陸地における景観のことを示す言葉である。実社会において建築を設計する際には、建物だけではなくその周辺環境にも十二分に配慮することが求められる。時には広大なエリア全体の環境をデザインする、またコーディネートする必要も出てくる。適切な土地利用に配慮した建物を建てようとする行為そのものがランドスケープでもある。建築と周辺環境を結ぶランドスケープをどの様に計画するかは、そこに建つ建物の計画同様に重要な要素である。本講義では、建築とランドスケープデザインの関係の重要性について学ぶことから始まり、建築を常にその周辺環境・都市環境との関係性の中で考えられる思考を身に付ける。	
	建築マネジメント	本講義では、建築の設計あるいは施工において業務を企画計画し、推進し、その過程を管理(マネジメント)していく基本的技術と知識を修得することを目標とする。実際に業務を遂行するためには、その過程で起こる様々な事柄に対応する知識と技術が必要である。授業では、建築における各段階での知識と技術を概説する。具体的には、(1)設計のマネジメント：建築士制度/職能、コンサル業務、(2)時間のマネジメント：設計スケジュール、工程管理、(3)コストのマネジメント：事業収支、積算の概要、概算、積算手法、(4)グレードのマネジメント：標準仕様、請負方式、入札、品確法等を教授し、建築の実務の中で、時間、コスト、品質を管理(マネジメント)していくための知識と技術の修得を目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 発 展 科 目  建 築 デ ザ イ ン	建築計画2	<p>本講義では、「建築計画1」を受け、従来の研究蓄積を踏まえながら、それぞれの建築種別に特徴的な人間の行動と空間特性（関係性を踏まえながら）について学修する。各種施設建築の基礎とともに最新の建築物・事例を紹介・解説し、更にそれらの施設に対する研究の紹介・解説を行うことで、それぞれの建物空間をどのように捉えたら良いのかということを解説する。</p> <p>対象施設は（病院、福祉施設、学校、図書館、博物館、劇場、オフィス、住宅、住宅地、コミュニティ施設など）を予定するが、既存の施設計画のみではなく、リノベーションやコンバージョンなどのこれからの建築計画学的な事象の紹介・解説も行う。</p> <p>各種研究蓄積について学ぶことで、設計作業の中で必要な特徴的な人間の行動と、対応する空間の特性をセットとして理解させる。</p>	
	建築意匠	<p>本講義では、建築を考え、表現することにおいて必要な建築言語・思想・歴史・社会背景を学ぶ。建築の原点、要素、形態の原理、建築を構成する要素や役割、空間の原理、光の効果などの建築の成り立ちを学ぶことで、自ら考えて建築を創り出す基礎を養う。また、建築の社会成立性に着目して、近代から現代の建築諸理論の変遷の基礎を学び、建築が現在おかれている状況を理解し持続可能な建築デザインへの視野を広げていくことを目的とする。</p>	
	都市環境デザイン論	<p>都市活動による環境への影響に関連する都市環境要素として、大気、水、土壌、音、日照、都市熱、景観、住居の各項目について講義する。具体的には、都市活動による大気汚染と拡散要因、水質汚濁の要因と処理方法、土壌汚染の要因とその対策、騒音・振動の計測法と環境基準、日照障害、ヒートアイランド現象のメカニズム、景観保全の手法、居住環境などについて具体的事例を紹介しながら講義する。学生は、それら要素を総合的に判断する方法、総合的判断を受けての都市環境デザインの計画技法について学び、説明できるようにする。</p>	
	建築再生論	<p>国や地域の価値ある既存建造物を継続的に維持活用し、その地域特有の歴史や文化を取り込んだ環境整備のあり方と方法について理解を深める。また、保存再生に関わる先進的事例の多い西欧の事例をもとに、保存再生の概念の歴史と変遷を理解し、日本文化に根ざした再生、再利用の歴史、解釈について学ぶ。対象は、文化財指定された建造物に限らず、工場や団地など幅広い既存建造物を取り上げ、再生デザインを行う上での意義と設計手法のあり方について学ぶ。</p>	
	建築環境学2	<p>本講義では、「建築環境学1」の内容の理解を前提に、健康的かつ快適な建築室内空間を形成するための環境要素についてを取り扱う。具体的には、自然換気、機械換気、空気環境計画、シックハウスなど空気流動に関する講義を中心に展開する。授業形態は講義形式とし、建築計画に生かすべき環境工学手法を身に付けることを目標とする。また、建築士試験で出題される各種計算問題についても、講義内で取り上げる。</p>	
	構造デザイン	<p>設計者は、基礎力に加え、構造物の安全性に対する創造力、物事の先を予見する能力、問題解決能力（判断力）などの素養が大事となる。本講義では、それらの素養を強化するための知識を修得することを目的とする。具体的な内容として、(1) 多様な構造形式や技術が、歴史の中でどのようにして出現したのか、(2) 先人のエンジニアが彼らの活躍した時代を背景に、いかにして考え、判断をし、設計を洗練させていったか、(3) 自然災害(地震、積雪、台風、津波、土砂崩れ、液状化)、人災(テロリズム、施工ミス、設計ミス)、設計時点で未解明だった事象による破壊(疲労破壊、カルマン渦)など、過去の事故事例から構造物が壊れた要因等について教授する。課題を通じて、学生が自ら調べ、問題に対する自らの答えを導くという過程を繰り返し重ねることで、問題解決能力の鍛錬につながる。</p>	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 専 門 発 展 科 目 建 築 デ ザ イ ン	都市計画	本講義では、都市とは何か、都市化とはどのような現象か、都市問題はなぜ起こるのかなどの基礎的な事柄を講義し、その上で、都市計画の具体的内容と社会的役割について説明できるようにする。都市を構成する要素の一つとして建築と敷地があり、優れた都市環境形成には建築本体のみならず、建築と周辺環境との調和が不可欠である。土地利用計画、交通計画、各施設計画などの内容と策定方法について講義する。学生には、広い視点から都市と建築の関係を理解し、都市計画について説明できるようにする。	
	コミュニティデザイン概論	コミュニティデザインは、コミュニティを設計する方法論ではない。コミュニティが必要としている空間、あるいは環境をデザインする方法論である。あくまでもコミュニティとともにデザインすることが重要であるという思想である。コミュニティとともにデザインすることでコミュニティそのものが自立的に生み出されていくプロセスを作り出すことができるのである。本講義では、コミュニティデザインを形成する考え方を身に付けるために、豊富なまちづくりワークショップの事例を通して、具体的に検証しコミュニティデザインに関する実践的な方法論を修得していく。	
	建築設備 2	本学科に設置される建築環境・設備関連科目の最終段階に配置される本講義では、「建築設備 1」の内容の理解を前提に、設備設計について学修する。具体的な内容として、空調用熱負荷計算やZEB(ゼロエネルギービルディング)について取り上げるほか、設備的に特色ある建築についても実例を挙げて紹介する。本講義を通して、基本的な設備設計の知識を身に付け、快適環境を創造する設備の役割を理解することを目標とする。授業形態は講義形式とする。	
	建築デザインスタジオ	本授業科目は、3年次後期に配当される選択必修の実習科目である。3年次の後期は、学生がこれまで建築学の個々の領域について学修したことを踏まえ、自らの進路を視野に入れた研究テーマを選択する段階に入る。本実習では、建築デザイン分野の専任教員が用意する専門的領域のテーマ(スタジオ)を学生が選択し、最終学年に配当する4年次の卒業研究への円滑な移行を促すことを目的とする。 建築デザイン分野は、(1)建築意匠設計、(2)都市計画、(3)建築再生、(4)構造デザイン、(5)建築環境設備、(6)建築計画、(7)コミュニティデザインで構成される。授業では、専任教員の指導のもと、学生自身が実証的な研究に取り組み、研究成果の発表やディスカッションを通じ、創造的かつ論理的な建築デザインのあり方について学修する。	
	住まいのデザイン	住宅とは、様々な要因により形成される。住宅のデザインは時代、気候風土、慣習、人的環境、社会的地位、家族関係などにより、実に多様である。本講義の目的は、これらの多様な住宅デザインを、様々な切り口から眺め、その成立の社会的・歴史的背景を知り、デザイン史的・空間論的にこれらを位置付け考察することである。講義では、図版や写真を多用し、対象とする住宅での生活を具体的にイメージできるようにする。さらには、それらの住宅について言語化し、分析する訓練を行う。	
	住まい計画	「建築計画 1」を受け、「住まい」に絞った人間と空間の関係を軸に、「住むということ」「住まい(住空間・住環境)の在り方」等について学ぶ。多くの建築種別の中で、住宅に絞ることは内容を狭めるように思えるが、住空間・住環境は建築の母体となった根源的な存在であり、「住まい」を考え知ることによって建築の根源を学ぶと言える。本講義では、戸建住宅における、住宅の集合としての住宅地の計画、個別の敷地における住宅の計画、住宅自体の計画、また、集合住宅における、配置計画や住棟計画、住戸計画について解説をすることで、社会の根幹をなす事象を学ぶことにつながる。	
	インテリアデザイン	今日、商品としてのインテリアデザインには、様々なスタイルが求められる。このため、インテリアデザインの実務において重要なものは、多くの「デザインの引き出し」を持っていることである。本講義では、ウィリアム・モリス以降、多様に展開する空間デザインの歴史を概観し、その風土や文化的・歴史的背景を考察する。さらには、現代美術からの影響が強いインテリアデザインや、伝統的な日本の空間デザインを引用したインテリアデザインも対象とし、幅広くインテリアデザインを知ることで、空間デザインの専門家としての知識を身に付ける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 学 科 科 目 住 宅 デ ザ イ ン 専 門 発 展 科 目 建 築 都 市 エ ン ジ ニ ア リ ン グ	住宅と社会	<p>建築を学ぶことは社会の仕組みを考えることであり、なかでも住宅はその根幹をなす基本単位である。また、今後の地域計画ではコミュニティ・マネジメントの実現もキーワードとなる。「私」と「公」の間には、さまざまな中間的な空間が生み出されているが、こうした空間の意味と発生の仕組みを学ぶことも社会の活性化に繋がる。本講義では、身近な住環境課題から、住宅と住宅地に求められている周辺の課題がどのように変化してきたかを学び、現代社会が抱える諸問題（人口減少、少子高齢化、成熟経済等）に取り組む姿勢と手法を身に付けることを目的とする。</p>	
	住環境と福祉	<p>本講義では、幼児、子ども、老人、障がい者、病人等の身体的弱者にとって、どのような住環境が安全で、生活しやすいかを学ぶ。また、住宅と健康の関係を、建築計画的な視点から扱う。大半の学生は相対的に最も身体能力が高い状況にあるため、弱者の身体能力に対する想像力に欠けることがある。これらの人たちの身体特性を学ぶことで、多様な人々の生活を具体的に想像し、彼らと寄り添う住環境のつくり手へと成長することを目標とする。講義内では、車いす体験や、障がい者の方のゲストスピーカーによるレクチャーなどを行う。</p>	
	住宅と実務	<p>本講義では、戸建住宅や小規模の集合住宅を対象に、設計監理と施工に関する実務について学修する。講義では、実践事例の紹介を通して、実務に必要な建築計画とデザイン、構造や構法・工法、環境・設備、コスト、施工監理等に関する諸技術が、どのように実務全体を構成しているのか、建築計画の過程を辿り、実務の全体像を把握する。また、実務を構成する技術を総合的に捉えることで生まれる様々な利点を知ること目標の一つとなる。講義では更に、契約を主とした建主・設計者・施工者の関係、関係法規への応答、建築に関するマネジメント等にも触れる。</p>	
	住宅デザインスタジオ	<p>本授業科目は、3年次後期に配当される選択必修の実習科目である。3年次の後期は、学生がこれまで建築学の個々の領域について学修したことを踏まえ、自らの進路を視野に入れた研究テーマを選択する段階に入る。本実習では、建築デザイン分野の専任教員が用意する専門的領域のテーマ（スタジオ）を学生が選択し、最終学年に配当する4年次の卒業研究への円滑な移行を促すことを目的とする。</p> <p>住宅デザイン分野は、(1)住宅設計、(2)住環境・インテリアデザインで構成される。授業では、専任教員の指導のもと、住宅分野のキャリアを見据えた住宅設計・インテリア設計に特化した課題の実践に取り組み、研究成果の発表やディスカッションを通じ、創造的かつ論理的な住宅デザインのあり方について学修する。</p>	
	建築構造解析	<p>本講義では、「建築構造力学」で取り扱った静定構造を発展させ、建築構造で多く使われる不静定構造について取り扱う。具体的には、不静定構造物について解説したのち、不静定構造物の解析を行う上で有効な手法であるモーメント分配法およびたわみ角法について詳述する。また、ひずみエネルギーの概念を解説したのち、仮想仕事の原理、最小仕事の原理などのエネルギー原理について詳述する。さらに、コンピュータを用いた構造解析の基本となるマトリックス法による不静定ラーメンの構造解析について解説する。</p>	
鉄筋コンクリート構造	<p>本授業科目は、鉄筋コンクリート構造の基本的な特徴及び基礎的な設計、施工方法の理解を目的とする講義科目である。具体的には、鉄筋コンクリートのルーツ、構成材料の性質、構造原理等の知識を身に付け、鉄筋コンクリート構造の設計法及び施工法について学ぶ。</p> <p>授業では、具体的に(1)鉄筋コンクリートに関する知識：鉄筋コンクリートのルーツ、特徴、原理、種類、構成材料の性質、構造物に働く力、(2)鉄筋コンクリート構造：設計法の概要、ラーメン架構の応力、架構計画、梁・柱の断面設計、(3)鉄筋コンクリート造建物の耐震性：地震災害と耐震基準、鉄筋コンクリート構造物の耐震診断、耐震補強(4)鉄筋コンクリート造建物の施工：施工方法と流れ、各種工法について学修する。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 専 門 発 展 科 目 建 築 都 市 エ ン ジ ニ ア リ ン グ	鉄骨構造	本講義では、建築構造材料の一つである鋼材の力学的性質、鋼材を加工して作製される部材の挙動と設計、部材の接合方法ならびに接合部の性能、さまざまな部材で構成される構造全体の構造設計について学修する。具体的には、最初に構造計画、設計用荷重・外力、設計判定条件、各種設計法の要点について解説する。続いて鋼材の製法、規格と種類ならびに力学的性質、ボルト接合法、溶接接合法といった鋼材の力学的性質、鋼部材の作製に関連する事項について講義する。さらに、鋼部材に軸方向力が作用した場合、および鋼部材に曲げモーメントとせん断力が作用した場合に各部材に生じる応力ならびに座屈理論の基礎を含む各部材の挙動について解説する。	
	地盤基礎工学	近年、甚大な土砂災害が多発しており、土砂災害を説明、理解する上で必要な地盤の成り立ちから土の物理的性質を学ぶ。 地盤の成り立ちについては、地盤の成り立ちが地盤の良し悪しに影響を与えており、建築物の構築に非常に重要であることを理解し学ぶ。 土の物理的性質については、土粒子の密度、土粒子の粒径分布において砂質土なのか粘性土なのか分類する。次に、砂質土であれば最大密度や最小密度、相対密度等の考え方を学ぶ。粘性土であれば液性限界、塑性限界等について学び、土の種類によって異なる物理的特性を理解する。	
	都市数理工学	本講義では、都市工学に係わる調査、実験、解析の際に用いられる統計解析及び数理解析手法について学ぶ。実際の都市ならびに環境に関連するデータを基に、解析手法、適用事例を講義し、その上で学生各自が演習問題に取り組み、解析手法の詳細を理解し、データ解析ができるようにする。具体的には、記述統計、推測統計、回帰分析(単回帰、重回帰)、判別分析、クラスター分析などを講義する。更には、質的データの取り扱いとして数量化理論の概要も講義する。	
	耐震工学	本講義では、建築構造物が地震のような時間的に変化する荷重を受けた際にふるまう動的挙動の基本について取り扱う。講義では、減衰のない一質点の自由振動の性質のような簡単な振動体の動的挙動を解説した後、減衰を持つ一質点系が支点変位を受けたときの応答を計算する手順とそれを用いて求める応答スペクトルとその性質を詳述する。また、応答スペクトルの種類やそれを耐震設計へ適用する流れを解説する。さらに、許容応力度計算や限界耐力計算などの耐震設計法について解説する。	
	水工水理学	水理学は、様々な水の運動の法則性を取り扱う科学である。その適用分野は、自然域では河川、湖沼、沿岸域、海域、人工物に対しては上下水道、水力発電、灌漑施設、あるいは建築建物内の給排水システムなどである。水理学に基づき、水の流れや圧力の状態を知り、制御し、利用することは都市社会にとって必要不可欠な技術である。本講義では、水理学の原理として静水力学、開水路の流れ、開水路の流れについて修得することを目標とする。また、水理学的アプローチから水工学として流域における洪水流出、管路の設計に必要な各種損失などについて理解することを目標とする。授業形態は講義形式とする。	
	地盤工学	土砂災害の中で近年頻繁に発生している、斜面安定問題、液状化問題、圧密問題を理解し、その発生メカニズムや対策方法について学ぶ。 はじめに、上記の土砂災害諸問題を理解する上で必要な、土の強さと圧密の違いや土のせん断強さの考え方、土の圧密理論の考え方を学ぶ。その上で、斜面安定問題については斜面安定問題の考え方を学び、解析方法を理解する。液状化問題についてはその発生メカニズムを理解し、その対策方法の考え方を学ぶ。また、圧密問題についてはその理論を理解し、解析方法を修得する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 専門発展科目 キャリア支援科目	建築都市エンジニアリングスタジオ	<p>本授業科目は、3年次後期に担当される選択必修の実習科目である。3年次の後期は、学生がこれまで建築学の個々の領域について学修したことを踏まえ、自らの進路を視野に入れた研究テーマを選択する段階に入る。本実習では、建築デザイン分野の専任教員が用意する専門的領域のテーマ（スタジオ）を学生が選択し、最終学年に担当する4年次の卒業研究への円滑な移行を促すことを目的とする。</p> <p>建築都市エンジニアリング分野は、(1)地盤工学、(2)耐震工学、(3)構造シミュレーション、(4)コンクリート工学、(5)鉄骨橋梁学で構成される。授業では、専任教員の指導のもと、実験結果に基づくデータ分析等の手法を学び、データ結果に基づく実証的な研究に取り組む。研究成果の発表やディスカッションを通じ、創造的かつ論理的な建築都市エンジニアリングのあり方について学修する。</p>	
	インターンシップ	<p>本授業科目は、学生の就業意識及び学習意識の向上を目的として、建築関連の企業及びその他の一般企業においてインターンシップを行う実習科目である。事前学習として、受け入れ企業について調べ、どのような事業活動を社会に対して提供しているのかを理解した上で実習に臨む。企業における実際の業務を経験することにより、これまで学んできたことが、社会でどのように活かせるのかを整理する。同時に自分自身の就業観を確立する。実習終了後は、学内で成果発表を行う。</p>	
	建築総合演習A	<p>本授業科目は、4年次に担当される演習科目である。建築に携わる職業人として期待される進路やその実現のためのキャリアについて学ぶ「キャリア支援科目」に位置付けており、建築士試験における学科科目を視野に入れて、実践的な演習を行う。「建築総合演習A」では、建築計画及び建機法規について取り扱う。具体的な内容として、建築計画では、建築計画各論、建築史、都市計画、環境工学、建築設備を、建築法規では、「建築基準法」をはじめ「建築士法」等に関する問題に繰り返し取り組み、教員からの指導と解説を受けることで、4年間の学修で得た知識の定着を図る。</p>	
	建築総合演習B	<p>本授業科目は、4年次に担当される演習科目である。建築に携わる職業人として期待される進路やその実現のためのキャリアについて学ぶ「キャリア支援科目」に位置付けており、建築士試験における学科科目を視野に入れて、実践的な演習を行う。「建築総合演習B」では、建築構造及び建機施工について取り扱う。具体的な内容として、建築構造では、主に力学、構造、材料を、建築施工では、建築工事に関する準備から完成までの過程において必要な知識等に関する問題に繰り返し取り組み、教員からの指導と解説を受けることで、4年間の学修で得た知識の定着を図る。</p>	
	卒業研究	<p>本授業科目において、学生はこれまでに学修した建築に関する知識と技術を更に発展させ、自ら設定した研究テーマに対して主体的に取り組み、担当教員による指導を受けて卒業論文・卒業制作を完成させる。授業は演習形式で行い、研究成果の発表、グループ討論及び担当教員による指導を通じて、知識だけでなく理論的考察力を高めるとともに、社会人としての基礎的能力（コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力など）を向上させることを目標とする。最終的には、その研究成果を卒業論文・卒業制作としてまとめることで、建築学に関する総合力と研究遂行力を身に付けさせる。</p>	

## 明星大学 組織の移行表

### 平成31(2019)年度

#### ●明星大学

##### ・通学課程

学部等	学科等	入学定員	収容定員
理工学部	物理学系	400	1,600
	生命科学・化学系		
	機械工学系		
	電気電子工学系		
	建築学系		
	環境科学系		
	小計	400	1,600
人文学部	国際コミュニケーション学科	100	400
	人間社会学科	80	320
	日本文化学科	100	400
	福祉実践学科	60	240
	小計	340	1,360
経済学部	経済学科	260	1,040
情報学部	情報学科	140	560
教育学部	教育学科	350	1,400
経営学部	経営学科	200	800
デザイン学部	デザイン学科	120	480
心理学部	心理学科	120	480
通学課程合計		1,930	7,720

##### ・通信教育課程

教育学部	教育学科	2,000	8,000
------	------	-------	-------

#### ●明星大学大学院

##### ・通学課程(博士前期課程)

研究科	専攻	入学定員	収容定員
理工学研究科	物理学専攻	10	20
	化学専攻	10	20
	機械工学専攻	10	20
	電気工学専攻	10	20
	建築・建設工学専攻	5	10
	環境システム学専攻	5	10
	小計	50	100
人文学研究科	英米文学専攻	10	20
	社会学専攻	10	20
	心理学専攻	10	20
	小計	30	60
情報学研究科	情報学専攻	7	14
経済学研究科※	応用経済学専攻	10	20
教育学研究科	教育学専攻	10	20
通学課程(博士前期課程) 合計		107	214

※経済学研究科は修士課程

##### ・通学課程(博士後期課程)

研究科	専攻	入学定員	収容定員
理工学研究科	物理学専攻	5	15
	化学専攻	5	15
	機械工学専攻	5	15
	電気工学専攻	5	15
	建築・建設工学専攻	3	9
	環境システム学専攻	2	6
	小計	25	75
人文学研究科	英米文学専攻	3	9
	社会学専攻	3	9
	心理学専攻	3	9
	小計	9	27
情報学研究科	情報学専攻	3	9
教育学研究科	教育学専攻	3	9
通学課程(博士後期課程) 合計		40	120

##### ・通信教育課程(博士前期課程)

教育学研究科	教育学専攻	30	60
--------	-------	----	----

##### ・通信教育課程(博士後期課程)

教育学研究科	教育学専攻	3	9
--------	-------	---	---

### 令和2(2020)年度

#### ●明星大学

##### ・通学課程

学部等	学科等	入学定員	収容定員	変更の事由
理工学部	物理学系	280	1,120	定員変更(△120)
	生命科学・化学系			
	機械工学系			
	電気電子工学系			
	環境科学系			
	小計			
人文学部	国際コミュニケーション学科	100	400	
	人間社会学科	80	320	
	日本文化学科	100	400	
	福祉実践学科	60	240	
	小計	340	1,360	
経済学部	経済学科	260	1,040	
情報学部	情報学科	140	560	
教育学部	教育学科	350	1,400	
経営学部	経営学科	200	800	
デザイン学部	デザイン学科	120	480	
心理学部	心理学科	120	480	
建築学部	建築学科	120	480	学部の設置(届出)
通学課程 合計		1,930	7,720	

##### ・通信教育課程

教育学部	教育学科	2,000	8,000
------	------	-------	-------

#### ●明星大学大学院

##### ・通学課程(博士前期課程)

研究科	専攻	入学定員	収容定員	変更の事由
理工学研究科	物理学専攻	10	20	
	化学専攻	10	20	
	機械工学専攻	10	20	
	電気工学専攻	10	20	
	建築・建設工学専攻	5	10	
	環境システム学専攻	5	10	
	小計	50	100	
人文学研究科	社会学専攻	0	0	令和2年4月学生募集停止
	社会学専攻	10	20	
	社会学専攻	0	0	令和2年4月学生募集停止
	国際コミュニケーション専攻	10	20	専攻の設置(認可又は届出)
	小計	20	40	
情報学研究科	情報学専攻	7	14	
経済学研究科※	応用経済学専攻	10	20	
教育学研究科	教育学専攻	10	20	
心理学研究科	心理学専攻	15	30	研究科の設置(認可又は届出)
通学課程(博士前期課程) 合計		112	224	

※経済学研究科は修士課程

##### ・通学課程(博士後期課程)

研究科	専攻	入学定員	収容定員	変更の事由
理工学研究科	物理学専攻	5	15	
	化学専攻	5	15	
	機械工学専攻	5	15	
	電気工学専攻	5	15	
	建築・建設工学専攻	3	9	
	環境システム学専攻	2	6	
	小計	25	75	
人文学研究科	社会学専攻	0	0	令和2年4月学生募集停止
	社会学専攻	3	9	
	社会学専攻	0	0	令和2年4月学生募集停止
	国際コミュニケーション専攻	3	9	専攻の設置(認可又は届出)
	小計	6	18	
情報学研究科	情報学専攻	3	9	
教育学研究科	教育学専攻	3	9	
心理学研究科	心理学専攻	3	9	研究科の設置(認可又は届出)
通学課程(博士後期課程) 合計		40	120	

##### ・通信教育課程(博士前期課程)

教育学研究科	教育学専攻	30	60
--------	-------	----	----

##### ・通信教育課程(博士後期課程)

教育学研究科	教育学専攻	3	9
--------	-------	---	---